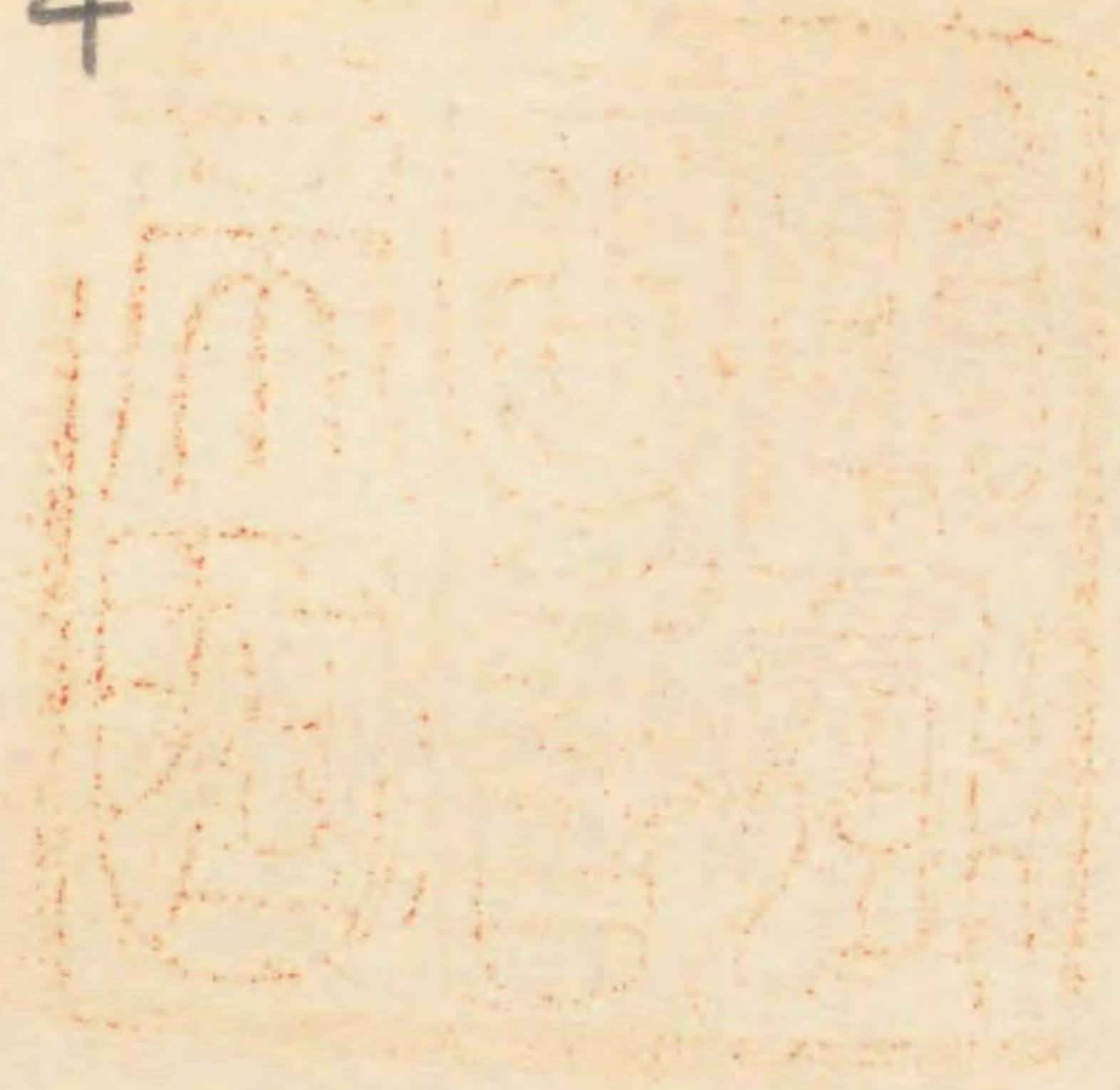




35
N-4

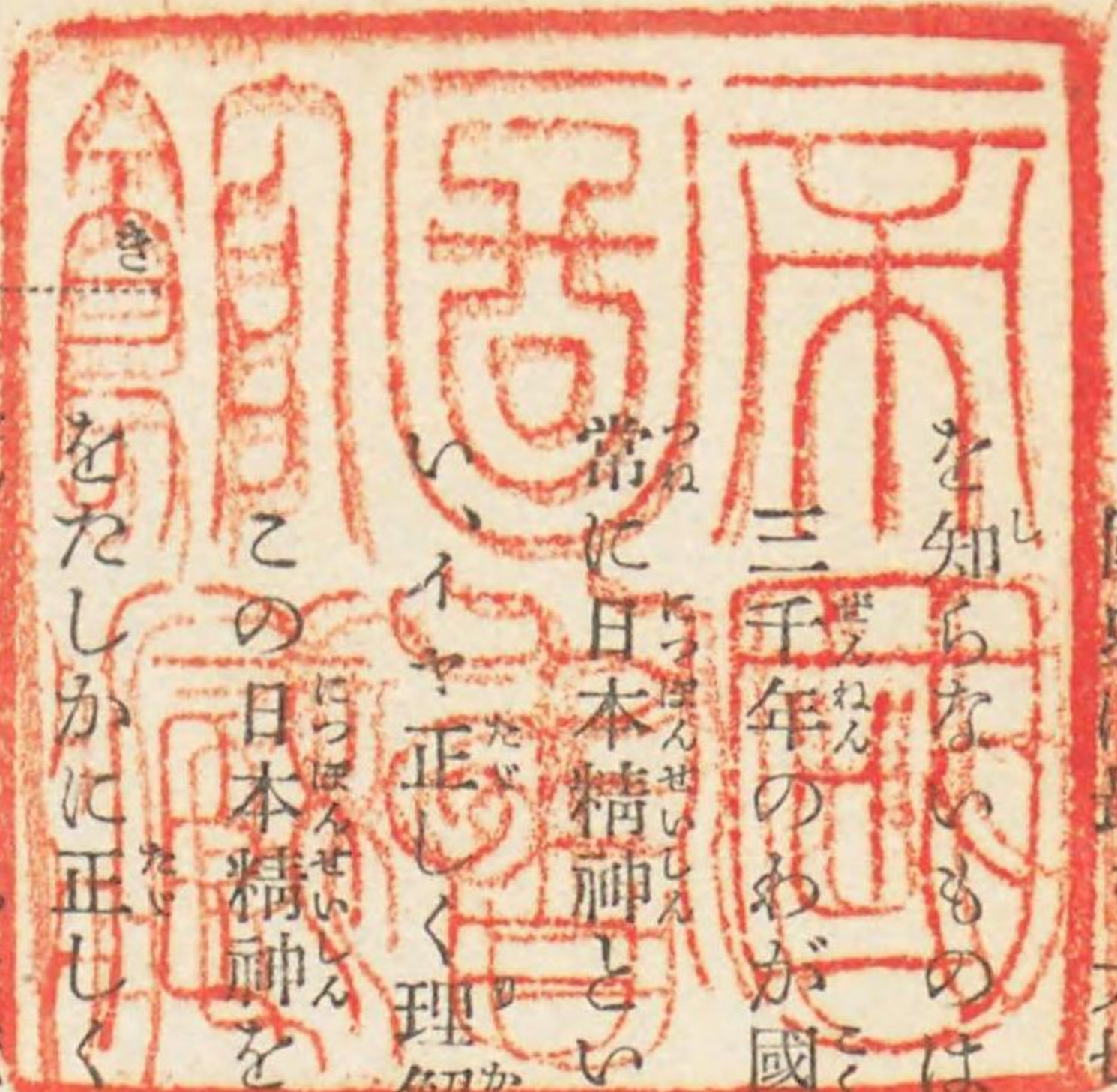


はしがき

國史は最も大切な科目です。國史はわれわれの祖先のことを書いたもので、これを知らぬものは立派な日本人とは云はれません。

三千年のわが國史には、随分色々な事がありました。併しその事件の奥底には常に日本精神といふものが流れてゐます。それは外國人には、とても眞似の出來ない、正しく理解することさへも困難な、大和魂といふものが流れてゐるのです。この日本精神をしっかりとつかむことが、われわれに最も大切なことです。これをたしかに正しくわれ等の心に植え付け、益々立派に育て上げて行くことが、日本人としての最も大切なつとめです。

併し學校でお習ひする國史の教科書は、あまり簡單でもあり面白味も少く、先生のお話は面白くても、聴いただけでは忘れ易いのです。それで、教科書にあることを中心にして、ずつとくわしく面白く書いたのが、この國史文庫十二冊であります。



鬼のやうなわるもの	八五
進退は太鼓の音で	八七
神風敵を追ひ拂ふ	九一
慘たり新戰場	九五
更に外征の計畫	九七
元軍再び來寇	一〇一
敵艦に躍り込む	一〇四
僅かに歸る三人	一〇八
不征國日本	一一一

鎌倉時代の文化

武士道の華	一一六
優美な歌、雄壯な歌	一一九

文學と美術	一二三
來世を重んずる宗教	一二五
武士的氣風の宗教	一二八

後醍醐天皇

北條氏の横暴	一三三
朝廷の仁政	一三五
田樂や犬の噛み合ひ	一三八
落花の雪	一四一
どちらが屁理窟?	一四四
頼みに思ふたゞ一人	一四七
笠置落	一五〇
般若寺の異變	一五四

少年國史文庫

鎌倉時代

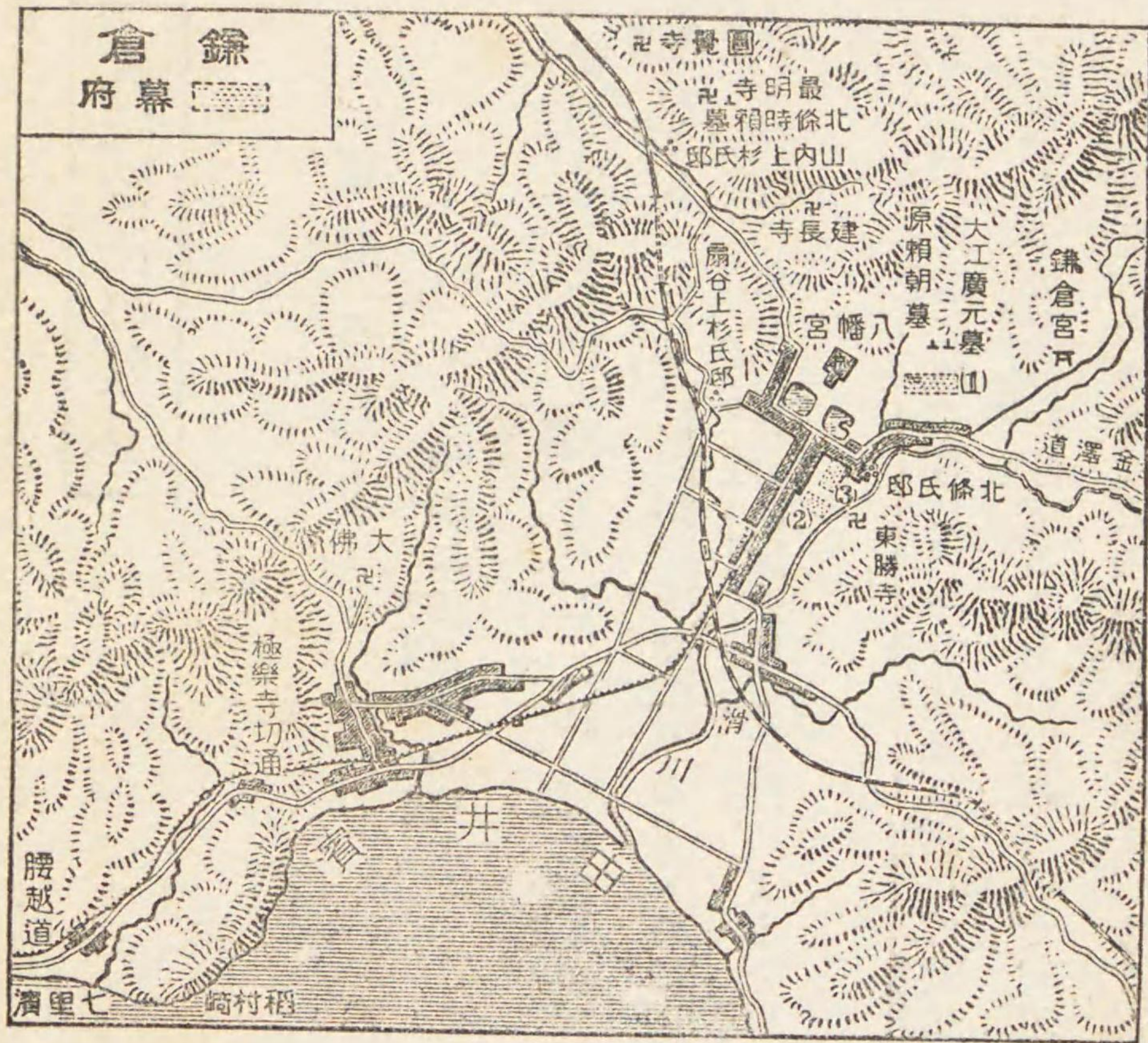
武家政治の起り

幕府の起り

俄かに繁昌する町

源頼朝は兵を擧げて關東を手に入れ、更に富士川に平氏の軍を破つてから、直ちに京都に上らうとしましたが、千葉常胤のすゝめによつて、京都へ上ることは弟の範頼・義經に任せ、自分は關東地方を鎮めようと思つて、先づ鎌倉に邸宅を建てました。

鎌倉は三方に山をめぐらし、一方は海に面して天然の城廓をなし、西には箱根・足柄の險があつて充分防禦することが出来るので、地形としては最もよい處であります。その上先祖の頼義はこの地方を治めて、よく部下を愛してゐましたので、そ



の頃からの忠實な家來も澤山ありますし、又前九年の役のすんだ後、頼義はそのお禮として八幡宮をこの地に建て、近くは頼朝の父義朝も鎌倉の龜谷に邸宅を置いたことがありますので、色々源氏とは縁故の深い土地であります。それ故頼朝はこの鎌倉の大倉郷に邸宅を置くことに定めたのであります。

それまでの八幡宮は由比郷と云つて海岸の方にありましたが、頼朝はこれを今の地に移しました。そして頼朝の邸はその東の方にならんで建てました。その頃鎌倉は淋しい漁師の村で、ほんのあばら家が少しあるさりでしたが、頼朝が邸を作つてから、その家來のもの等も次々に家を建てますし、商賣人なども次第に集つて、俄かに賑やかな町が出来ました。街の通りも始めから考へて縦横十文字に作つて置きましたので、勿論京都のやうに立派ではありませんけれども、小さいながら整然とした都會が出来たのであります。

由比が濱を見れば、數百艘の舟が集つてまるで大津の浦のやうであり、千萬の家が軒をならべたところは、大淀の渡のやうだ。海があり山があり、街すぢは方々に通じて頗る賑かである。おそろく將軍の邸を覗いて見れば、翠簾は美しく垂れ、朱の欄干が美事に構へられて、美しさ氣高さ、何とも云ひやうがない。

(源光行の日記から)

頼朝は先づ侍所といふ役所を置き、和田義盛をその長官として主に軍事を司らせ、次で公文所(後に政所と改稱)を置き、大江廣元をその長官として一般の政

治をさせ、問註所を置き、三善康信等をして訴訟を司らしめました。今で云へば侍所は參謀本部、公文所は内閣、問註所は裁判所のやうなものです。かうして今迄の朝廷とは全く別に、一つの獨立した政府を作りしました。即ち今迄に全く無かつた幕府といふものが新に出來たわけでありませぬ。

追はれる義經

うまく考へた守護地頭

頼朝は梶原景時等の讒言を信じて義經を惡み、遂に土佐坊昌俊を京都に遣はして義經の邸を襲はせましたが、義經はその昌俊を殺して置いて京都を逃げ出した。そこで頼朝は更に土肥實平・北條時政等を京都にやつて、義經を捜させましたが、何處へどう逃げたのか皆目わかりませんでした。

その頃又平氏の殘黨も京都に入り込むものが多く、頗る物騒な噂がありましたので、時政はこれを捜し出しては捕へて斬りました。併し義經の在り所がわかりませんでした。何時何處で騒動が起るかわからぬと云つて、人々は頗る不安心に思つてゐました。

そこで頼朝は朝廷に願ひして、國々に守護といふものを置いて、兵隊を率ゐて謀叛人や強盜・山賊・海賊などを追捕し所罰するといふことにし、又莊園その他各地に地頭といふものを置いて、兵糧米を取立てしめることにしました。これは義經等の行方がわからないから、それを調べ捜すためだと云つてゐました。けれども實はかうして天下を治める權利を握らうとしたのであります。即ち幕府といふものを作つて天下の政治をすると云つても、地方には朝廷の命令によつて動く國司といふものが居りますから、この國司を廢するかはりに、國司以上に勢力のある守護といふものを置いて、次第に國司の權利を殺いだのであります。

かうなると幕府の勢は大したものです。朝廷には國司があつても、これは莊園に對して何の權力もなかつたのですが、幕府には守護と地頭とがあつて、莊園に至るまで悉く自由に動かすことが出来るやうになつたのです。こんな守護だの地頭だの

といふものを置くことは、朝廷の権力を無くするものだとは、後白河法皇もお察しになりましたので、容易にお許しがありませんでしたが、北條時政が無理にお願して已みませんので、たうとうお許しになつたのであります。

そんなことのある間、義経は吉野山にかくれてゐました。吉野の吉水院の坊さんが義経に同情して隠まつて呉れたからです。併しそれも長くは續きませんでした。同じ吉野山の覺範といふ坊さんがこれを知つて、俄かに僧兵を指揮して義経を圍みました。義経は已むなくこれと戦ひつゝ、漸く逃れて十津川の方に行きました。

この時佐藤忠信が一人踏み止まつて僧兵をふせぎました。忠信は繼信の弟で、兄弟二人が奥羽から義経に従つて來たのですが、繼信は屋島の戦に義経の身代りとなつて死にましたので、弟の忠信がこの度義経の身代りになりたいといつて、強ひて義経に乞ふて遂にその甲を貰つて、十七人の従士と共に敵を防ぎつゝ、自ら判官義経だと稱して、矢を放つて大に奮戦し、遂に覺範を射殺しました。

僧兵等これを見て大に恐れ、義経公は劍術がうまいとは聞いてゐたが、弓がこん

なに上手とは知らなかつた」と云つて容易に近づくものがありません。忠信は從者が悉く死に、自分も矢が盡きたので大聲で呼んで「貴様等は俺を判官だと思つてゐるか。判官はもう遠く逃げておしまひになつた。俺は佐藤忠信といふものだ。勇者の最後がどんなものか見て居れ」と云つて、腹を切つて死んだ真似をして、やがてそつと谷を越えて逃げ去りました。

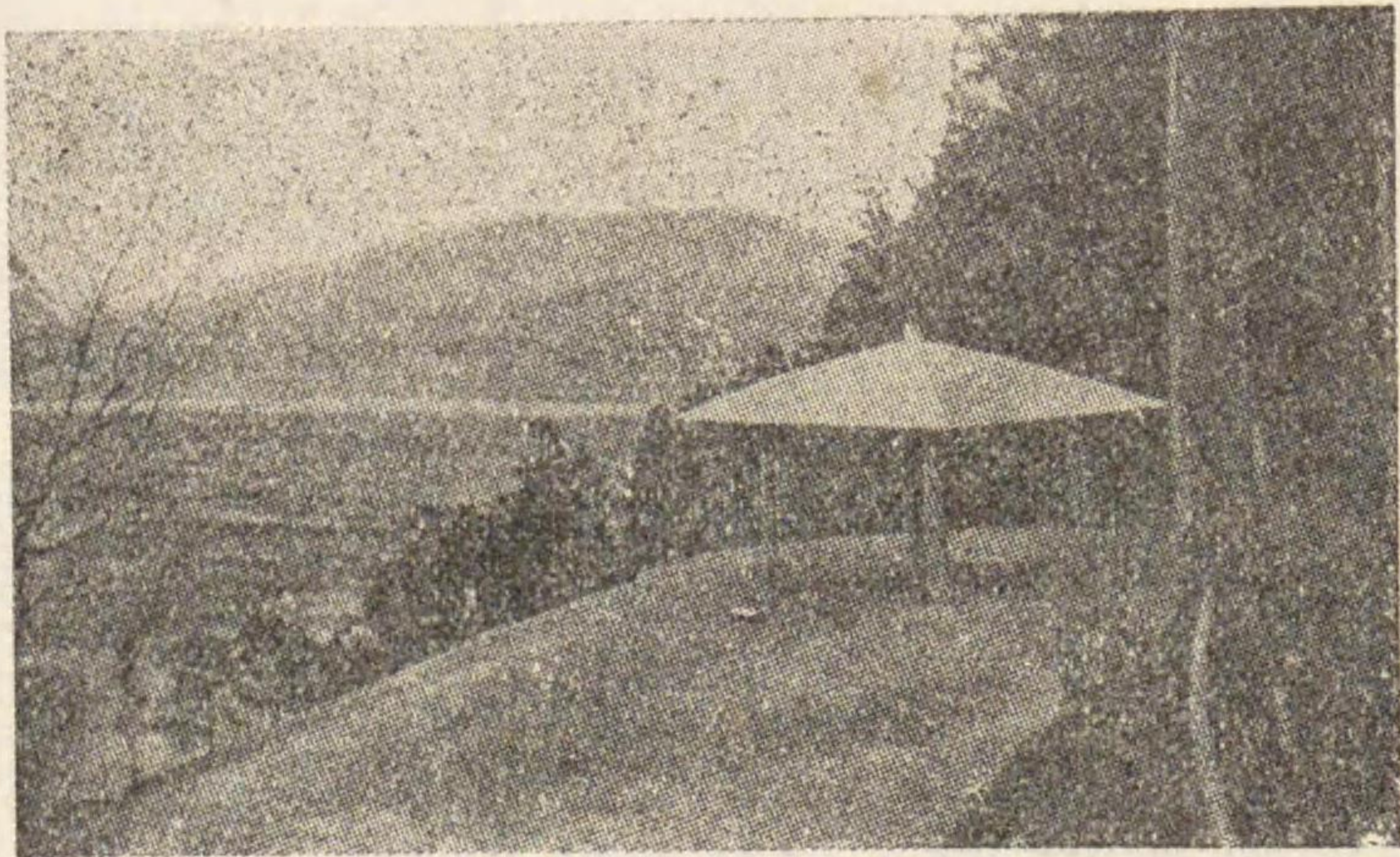
あはれ義経の最後

辨慶は衣川の立往生

義経はその後再び京都に歸りました。京都には義経に同情して、これを隠まつてくれる者が澤山あつたからです。それで頼朝が躍起になつて逮捕を命じて、時政が一生懸命で搜索しても、どうしてもその居所を知ることが出来ませんでした。

かくて義経は、或は比叡山にかくれ、或は奈良に入り、京都の附近に轉々として數ヶ月を費しましたが、あまりにきびしく搜されてどうも安心が出来ないので、奥

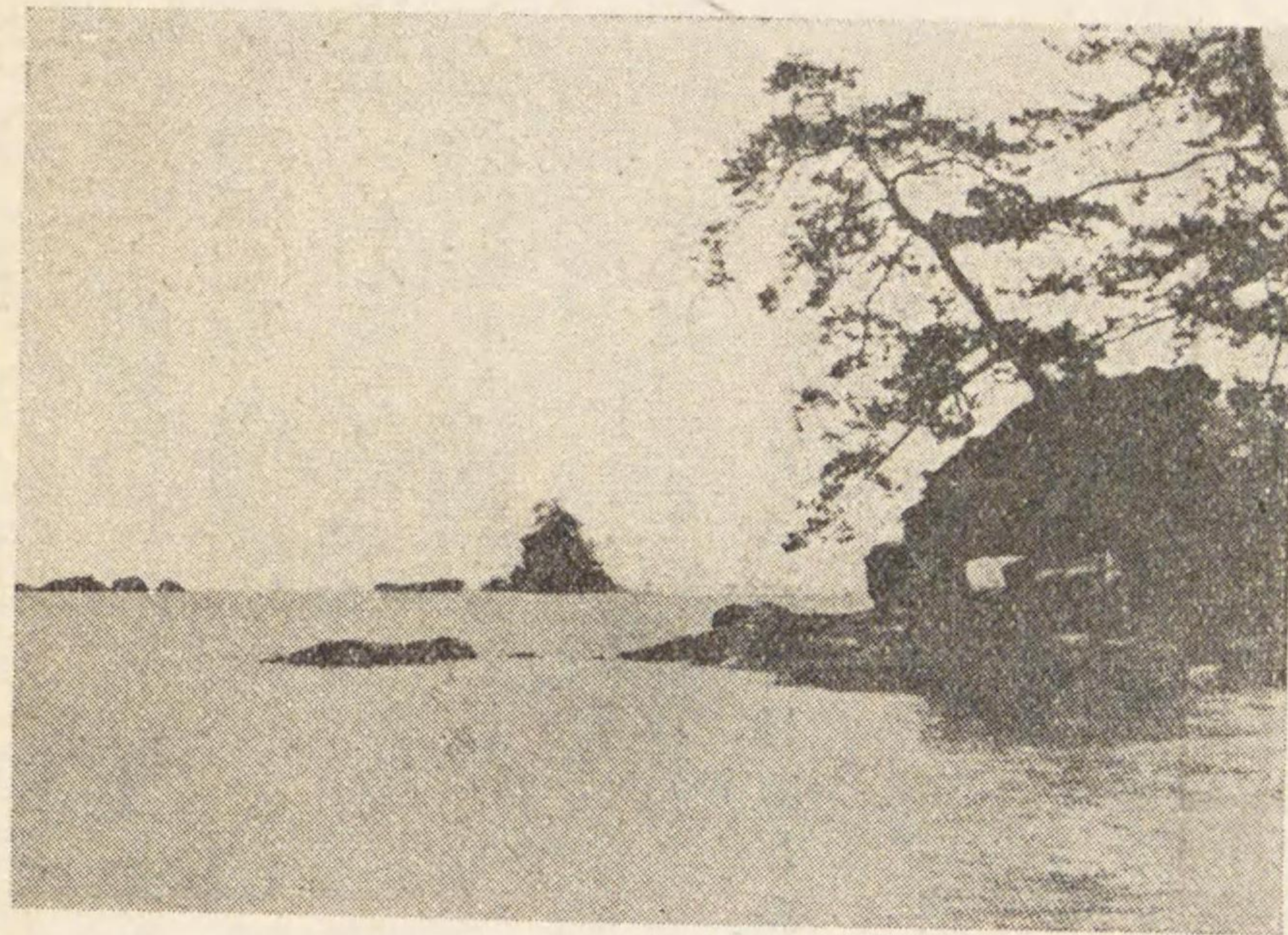
頼朝に取つて代るか、少くとも奥羽だけは頼朝に取られまいと考へてゐたからです。



衣川古戦場 平泉中尊寺の東物見から、衣川の古戦場を望んだ圖です。前方の山は東稻山、その下の白い一線が衣川で辨慶の戦死したのはこのあたりでせう。

安宅關にさしかゝつた時に、武藏坊辨慶が勸進帳を讀んで、關所の役人を誤魔化したといふ話もありますが、これは足利時代になつて出来た作り話で、勿論實際にあつたことではありません。義経が奥羽に到着しますと、秀衡は大層喜びました。秀衡は頼朝が勢力がよくなつたら屹度自分を攻めて來るに違ひないと思つてゐましたから、その時は義経を奉じてこれに對抗し、場合によつては

羽に下つて藤原秀衡に頼らうと思ひました。秀衡は義経が十六の歳から厄介をかけた人で、奥羽地方を領して非常な勢力があつたからです。



義経雨晴 富山灣の沿岸にあります。義経が俄雨にあつて、この岩窟の中で暫くその晴れるのを待つたといふ所です。

奥羽へ下るについても、勿論鎌倉からの搜索が嚴重ですから山伏の姿になつたりなどして、あちらへ逃げこちらへ隠れ、随分苦心をしたことでせう。併し又一方には、義経に同情する人もあつて、知つても知らぬ風をして見逃して呉れたことも度々あつたことでせう。大體は北陸道を通つたらしいですが、何處

それで義経を衣川の館に置いて大に優遇しました。

そこで朝廷から義経を捕へるやうにと秀衡へ命令が来ても、又頼朝から使を遣はして秀衡を責めても、秀衡は「決して不都合は致しません」と云ふだけで、その實はひそかに鎌倉に對する防備を施してゐました。併し秀衡の勢があまり盛なものですから、さすがの頼朝もどうすることも出来ませんでした。

ところが秀衡は間もなく病氣で死にました。その時子の泰衡に向つて、義経を大將軍としてよくその命を聽くやうに遺言しましたが、その後頼朝がますますくさびしく催促するやうになつてから、泰衡はたうとう頼朝の註文通りに、精兵數百を遣はして衣川の館を襲ひ、義経の首をとつて鎌倉に送りました。

この時義経以下大に奮戦したのは勿論ですが、多勢に無勢で到底勝つことが出来ませんでした。そして剛勇の武藏坊辨慶は、大長刀をぐるぐると水車のやうに振り廻し、衣川の川水の中に立つて奮戦して、戦死した後までも水の中に突つ立つてゐたさうで、「辨慶の立往生」と云ふことが傳へられてゐます。

併し義経は實は衣川では戦死しないで、こつそり北海道の方へ逃げて行つて、アイヌの王様になつたとか、更に蒙古の方に行つてチングスカンといふ王様になつたなどいふ話もありますが、これ等は一向あてになりません。

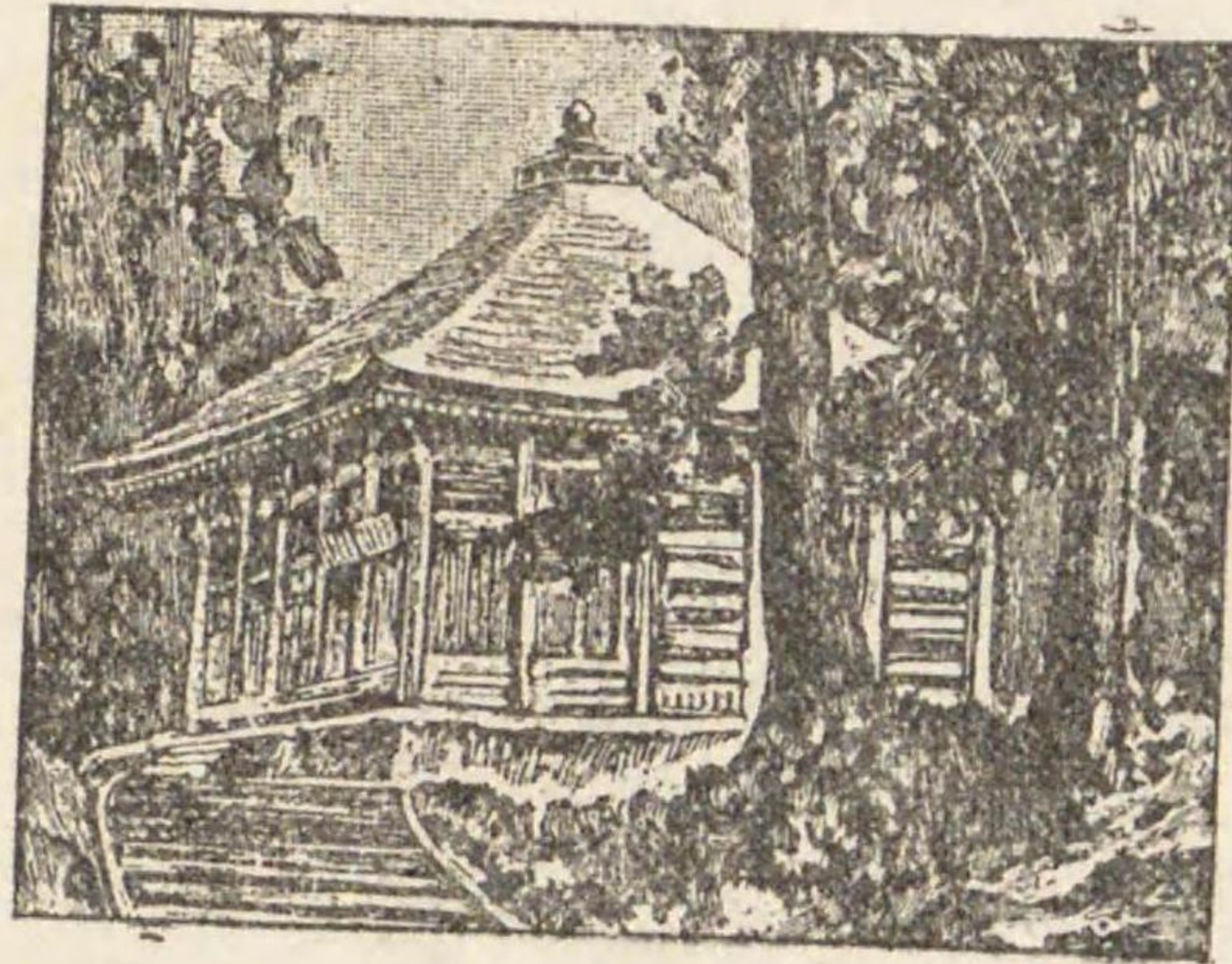
三代の榮華

頼朝をも恐れぬ勢

奥羽の藤原氏は前卷に記した依藤太秀郷の子孫であります。秀郷から六代目の孫が清衡で、後三年の役に源義家を援けてから、陸奥六郡の地を領して勢が頗る盛であります。そして今の岩手縣平泉の地に邸宅を構へました。

清衡の子が基衡で、陸奥・出羽の押領使となり、勢が益々盛でした。そしてその子の秀衡は、頼朝の命令さへも中々聽かなかつたほどの勢でした。この清衡・基衡・秀衡を藤原氏三代と云つて、それは榮華の限りを盡したものでした。清衡の建てた中尊寺、基衡の建てた毛越寺などは、實に宏壯雄大善美を極めたもので、その

ためには莫大な費用を使つたものと思はれます。毛越寺の如きは堂塔四十餘、禪房五百餘もあつたと云ひますが、今は何も無くなつてたゞ遺跡を存するのみです。秀衡の建てた無量光院は宇治の平等院の真似をしたものだといふことですが、これも



金色堂
中尊寺の金色堂は藤原氏三代榮華の名残りです。圖に見えるのは覆堂ですから、ほんとの金色堂はこの中にあるわけです。

今はありません。今残つてゐるのはたゞ中尊寺の金色堂のみです。併しこの金色堂一つを見ても、三代の榮華がどんなものであつたかは大凡想像がつくのであります。

金色堂は、上下四壁内殿皆金を塗つたもので、堂内の三壇は悉く螺鈿であ

り、そこに阿彌陀三尊、二尺の六地藏が安置してあつて、何れも定朝といふ有名な彫刻家の作つたものです。現在はこの金色堂の上に、更に覆ひの家を建て、保護してあります。

藤原氏がこんなにして贅澤なことをすることが出来たのも、その頃の奥羽地方が物産が多く人民が富み榮え、又土地も廣大であつたからであります。それですから兄に追はれた義経が逃げて來た時も、秀衡はこれを奉じて頼朝に對抗しようと考えた位で、頼朝から義経を殺すやうに命令して來ても、鼻の先であしらつて決して應じなかつたのであります。財力が充分な上に兵隊も強いのですから、頼朝位はちつとも恐れてゐませんでした。

ところが泰衡は父の如く剛勇でありませんでした。それに頼朝の勢が日に盛になるのを見ては、到底これと對抗することは出来ないと考え、寧ろ早く義経を討つて頼朝の命令に服従した方が、自分を安全にする道だと考へ、たうとう義経の首を鎌倉へ送つたのであります。

併し頼朝は、義経の首を受け取つたその月に、奥州征伐の用意を命じました。「泰衡が久しく義経を隠まつてゐて、これを殺すことが遅かつたのは、義経と同罪だ」といふのです。そして朝廷に對して、泰衡追討の宣旨を御下しになるやうに願ひま

した。

奥州征伐

若し義経が生きてゐたら

朝廷では頼朝からの願出がありましたけれども、「義経は已に殺されたのだし、今年は大神宮の上棟式などもあるから」といふので、中々お許しが出ませんでした。ところが頼朝は、部下の將兵も續々として集つて來たので「已に朝廷に一應申し上げたのだから、お許しが出るのを待たなくてもよからう。殊に泰衡は元來源氏の家來筋なのだから、これに誅罰を加へるのは源氏の勝手にしてもよいことだ」といふやうな都合のよい理窟をつけて、間もなく奥州に向つて進撃しました。頼朝の眞意は、理由は何でもよい、たゞ一日も早く藤原氏を滅ぼして、眞に天下を統一したいといふことにあつたのです。

頼朝は兵を分つて三軍とし、千葉常胤等をして東海岸を北上させ、比企能員等を

して北陸から日本海岸を進ましめ、中軍は自らこれを率ゐて今の東北本線の鐵道の通つてゐるあたりを北に進みました。

泰衡はこれを聞いて大に驚き、直ちに城壁を阿津賀志山に築き、濠を穿つて阿武隈川の水を引き入れ、兵二萬を以てこれを守らせ、又刈田郡にも城廓を構へて敵を防がせました。併しこれ等の諸城も次第に陥り、頼朝の軍は怒濤の押し寄せるやうに各方面相應じて侵入して來ました。泰衡は自分の邸宅を焼いて、北に逃げました。頼朝にはげしく追つかけて大に窮し、内々降參を申入れましたが許して貰はず今の秋田縣の方に逃げ込んで、家臣の河田次郎の處に頼りました。

ところが河田次郎は、忽ち變心して泰衡を殺し、その首を頼朝に献じました。そして賞與にあづからうと思つたのですが、頼朝は次郎が主人を殺した不忠を責め、遂にこれをも殺しました。かくして藤原氏はあつけなく滅亡したのであります。

泰衡もどうせこんなにして滅ぼされるものであつたら、義経を殺したりなどしないで、これを大將軍としてその指揮を仰いで、頼朝に對抗したならば、たとひ頼朝

を亡ぼすことは出来なかつたにしても、日本の半分か、或は奥羽だけでも永く保つことが出来たかも知れません。たやすく頼朝に征服せられたのは、勇士を四方の要害に分けて遣はし、却つて本營の守りが手薄であつたからだと言はれてゐます。戦略に巧であつた義経が居たら、こんな拙い戦争はしなかつたでせうに、惜しいことをしたものです。

武家の政治

かうして天下の實權を握る

京都に於て藤原氏が榮華を極めた頃から、天下の政治は大に亂れて、朝廷の命令は地方によく行き渡らず、地方には盜賊が横行し、武士といふものが出来て朝廷の命令を守らず、莊園が出来て年貢を出さないやうになりました。そこで藤原氏に代つたのが平氏ですが、清盛自ら太政大臣となり、一族のものを多く朝廷の役人にしたのみで、政治の仕方はこれまでと同じでしたから、地方の亂れはちつとも治まる

ところがありませんでした。

頼朝はそれを考へて、こゝに全く違つた別の政治を始めました。頼朝は建久三年七月に征夷大將軍になりましたが、決して太政大臣にも攝政・關白にもなりません。嘗て權大納言、右近衛大將に任ぜられましたが、すぐに御辭退申し上げました。そして一度京都に上つて法皇及び天皇に拜謁しましたけれど、間もなく鎌倉に歸つて、一族のものも悉く鎌倉に置き、こゝを政治の中心としました。そして諸國に守護や地頭を置いて、守護には軍事・警察のことを司らせ、地頭には年貢を取り立てさせましたので、これまでの國司などとは違つて、鎌倉の命令がよく全國の隅々まで届くやうになりました。

かうして出来上つたのが武家政治といふものであります。その政治の仕方もこれ迄とは全く違ひ、役所も侍所・政所・問註所などと云つて、大臣の代りに別當と云ひ、納言の代りに執事とか奉行とかいふやうに、役人の名までも悉く違つて來ました。又九州を治める太宰府に對しては別に鎮西奉行・九州探題などを置き、奥羽

の鎮守府將軍の代りには奥州總奉行だの蝦夷管領だのを置きました。

それですから朝廷には、普通りに大臣以下多くの役人がありましたけれども、それはただ名前ばかりで何の仕事もありませんでした。天下の政治は悉く鎌倉へ統一されてしまつて、法皇も天皇もたゞこれをちつと御覽になつてゐるより外ありませんでした。これは全く残念なことですから、代々の天皇は何とかして政權を再び朝廷に還さうとお考へになりましたが、それは中々容易に出来ることではありませんでした。

蘇我氏などのやうに我がまゝの限りをつくして、朝廷をないがしろにする様だつたら、これを悪む人も出来て、忽ち滅ぼされるやうになるのですが、頼朝は平氏がわがまゝをして人望を失つたのを見てゐますから、決して再びその眞似なんかしませんでした。即ち京都に大邸宅を作るなどいふことを考へないで、當時としては極めて淋しい片田舎の鎌倉に居て満足しました。そして寧ろ京都の公卿たちの風を見習ひすることの無いやうに、色々骨を折つてゐた位であります。

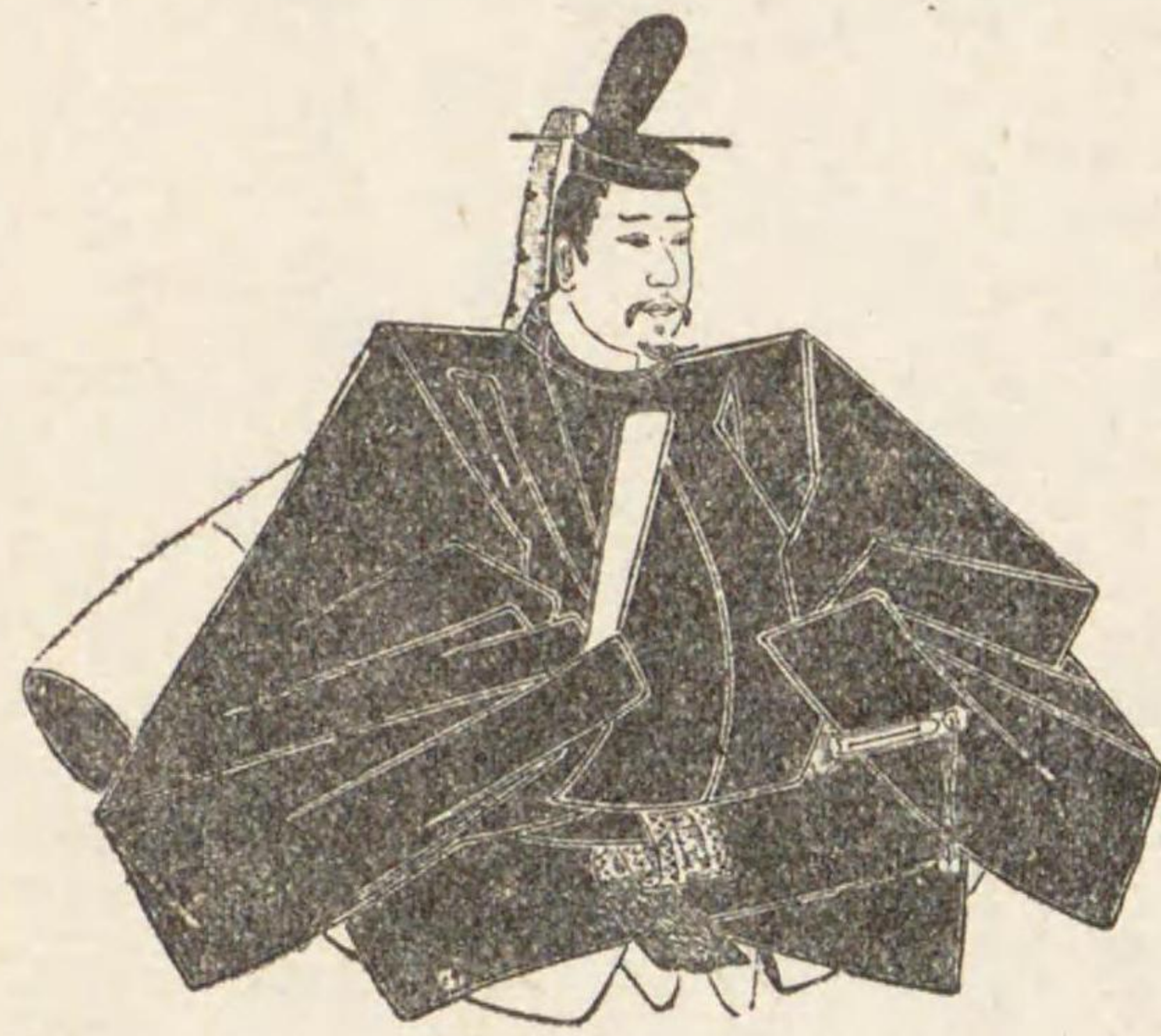
名は何でもよい、實際の權力を握りさへすれば、といふのが頼朝の考でした。そして武家政治の特色がさういふ處に存するのであります。

質素剛健の教へ

お化粧して叱られる

頼朝は質素と剛健とを以て部下を率ゐました。そしてそれがやがて鎌倉武士の氣風となりました。同じ武士と云つても平氏は京都に居て公卿と交りましたから、優美風流なところがありませんでした。熊谷直實と組打ちした平敦盛は、ほんのりと薄化粧して女のやうに美しく、而も腰には青葉の笛といふ横笛をさしてゐたと云ふことです。ところが鎌倉の武士には、笛を吹いて楽しむといふやうな道樂は決してゆるさず、況や化粧をするなどといふことはもつての外のことでした。食べるもの、着るもの、凡て出来る限り質素な粗末なもので、日常の仕事と云へばたゞ武藝を練る外はなかつたのです。

それですから平家の中には、知盛だの教盛だのといふやうな勇将も居ましたけれど、又維盛や宗盛のやうな頗る臆病な大將もありました。殊に宗盛の如きは海に飛



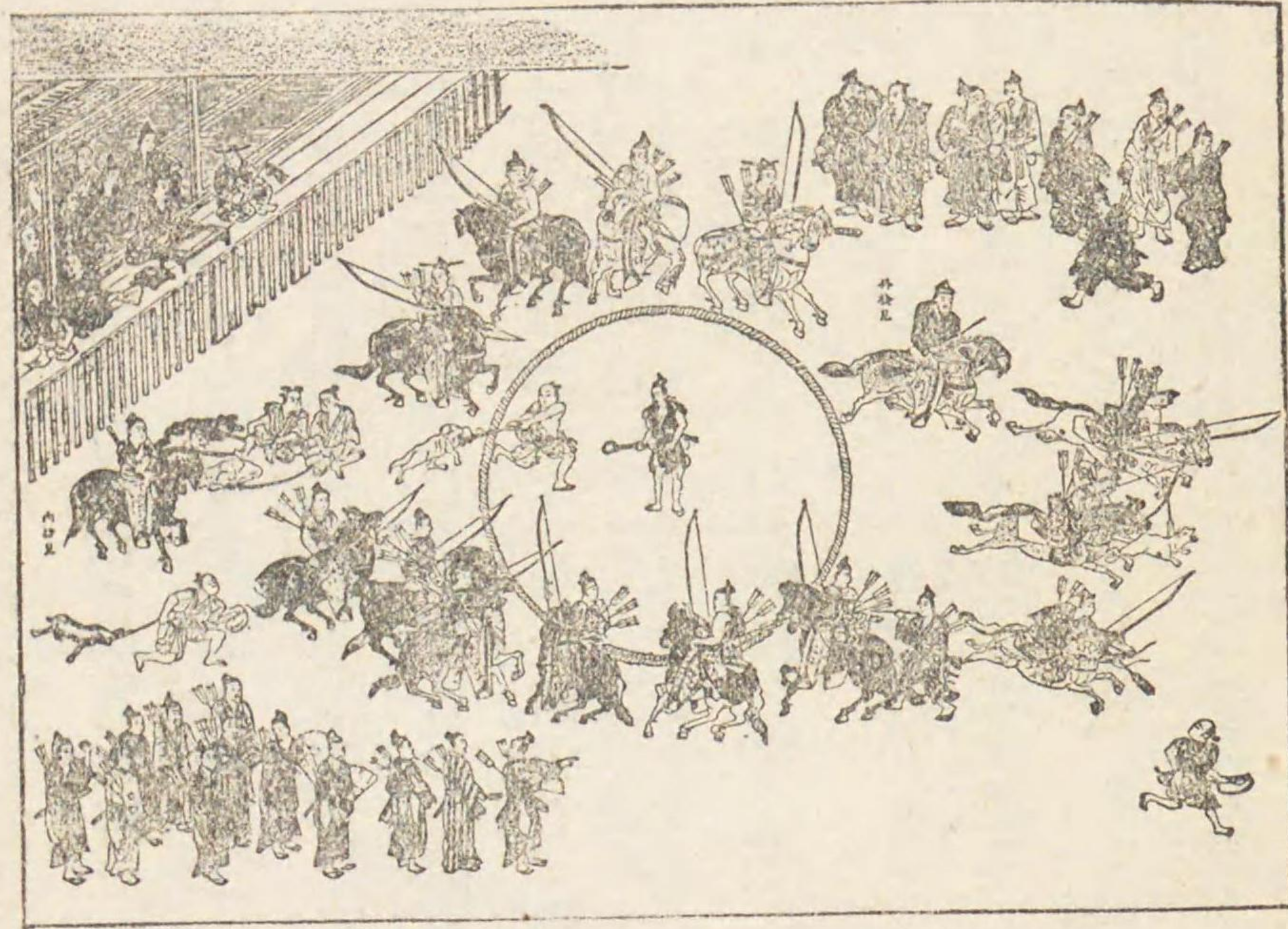
頼朝 頼朝
これは源頼朝の肖像で、藤原隆信の描いたものです。頼朝は土御門天皇の正治元年に五十三歳で亡くなりました。智慧もすぐれ、忍耐力もありましたが心の奥底に冷たい所があつたのは惜しいことでした。

び込むことさへも出来な
いで捕虜となり、鎌倉へ
連れて来られてからも涙
を流して命乞ひをし、自
殺せよとすゝめられても
どうしてもそれが出来ず
ほんとに氣の毒なほど見
苦しい最後をとげました

が、鎌倉武士にはそのやうな卑怯未練なもの、断じて一人も居ませんでした。それといふのも頼朝が力をつくして部下を教へ導いたからです。誰でも安心すると心がゆるむもので、戦争中は氣が張つてゐても、平和の世になると贅澤になり柔

弱になり勝つものものです。それを、頼朝は骨を折つて訓練して行きました。

壽永三年十一月のことでしたが、頼朝が用事があつて筑後權守俊兼を呼び出しました。俊兼が出て来たのを見ますと、美しく化粧をした上に、小袖を十數枚も重ねて着て、その袖口を見ると赤・青・紫・黄など種々の色が重なつて、ほんとに繪に見えるやうに美しくありました。頼朝は一目見て大に怒り、「お前の刀を出せ」と命じて腰の刀を出させて、それを抜いて着物の袖をズバリと切り捨て、しまひました。そして「お前はえらい男だが何で儉約といふことをしないのか、千葉常胤や土肥實平等は、所領もお前とは比べものにならないが、而もその着物は極めて粗末なものを着て居る。だから家が富み榮えて、澤山の從者を養つて置いて、まさかの時に勳功を立てようとしてゐる。お前のやうに金の使ひ所を知らないものが何になるか」ときびしく教訓しましたので、俊兼は顔を上げることも出来ず、眞赤になつて俯向いたばかりで「以後は充分慎みます」と云つてやつとゆるして貰ひました。そして大江廣元はそばでこれを見て居て、冷汗をかいいたといふことであります。



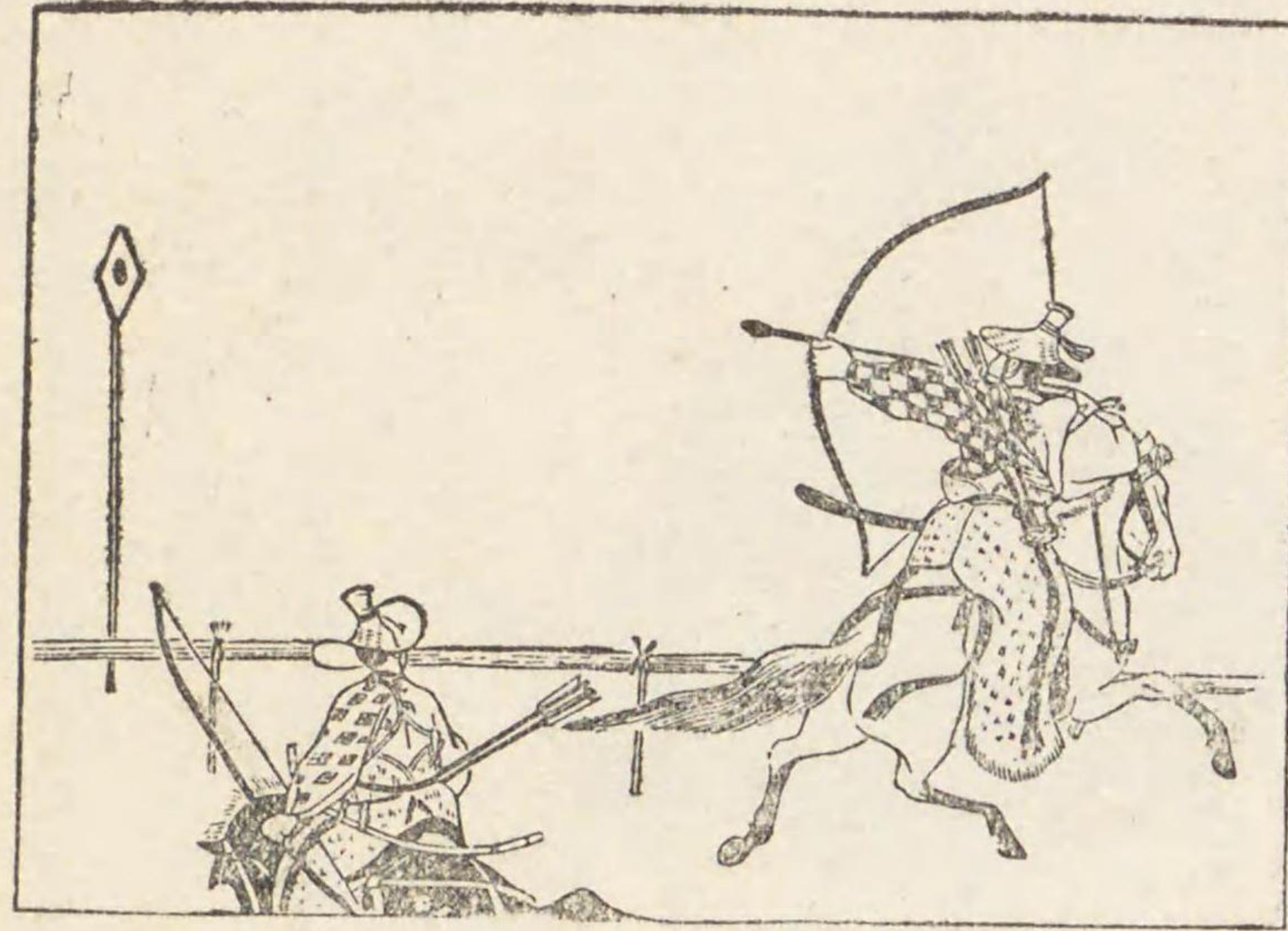
犬追物

真中に犬を引き出し、馬に乗って走らせながら、逃げ廻る犬を射るので、中々熟練しないと中らないものです。

は随分上手になりました。本間は孫四郎重氏の如きは、三人張の弓に十五束三伏の矢を用ひて六百米の遠方まで飛ばしたといふことで、恐らく前にも後にもこれほどのものは無かつたこととせう。
射術に流鏑馬・笠懸・犬追物などがありました。これは馬に乗って走りながら的を射たり、或は犬を追ひかけて射たりするので、余程上手なものでなくては、到底中るものではありません。

特別大演習

雷雨の夜の大騒ぎ



馬鏑流

これは馬に乗って走りながら、遠方の的を射る遊びです。色々面倒なきまりがあつて、中々むづかしいものがあります。

かうして鎌倉武士はその服装も住宅の構造も、起居動作も遊戯娛樂も凡て質素と剛健とで充たされました。板葺又は茅葺の家に住み直垂・水干を常服とし、頭には烏帽子を被り、京都の公卿が詩歌管絃を樂しんでゐるに對して、射藝・馬術・狩獵・放鷹・相撲等を樂しみとしてゐました。
それですから弓を射ることなど

ん。それから狩獵なども年々時を定めて行つてゐましたが、建久四年には頼朝自ら諸將を率ゐて那須野及び富士の裾野で大狩獵を行ひました。これは一方から云へば武藝の稽古でありませんが、一方には幕府の勢威を天下に示さんためでもあつたので、今日行はれる陸海軍の大演習が、軍事の練習といふことの外に、時にはわが國威を世界に示すために行はれるのと同様であります。

富士の卷狩は云はゞ特別大演習で、建久四年の五月から六月に亘つて行はれました。即ち頼朝が諸將を率ゐて鎌倉を出たのが五月八日で、十五日に富士野の旅館に入り、將士は軒を列ねて陣屋を構へました。そして狩獵が全く終つて、頼朝が鎌倉に歸つたのは六月七日でした。

この時、五月廿八日の夜半に大變なことが起りました。恰度猛烈な雨が降つて、雷が物凄く鳴つてゐましたが、その時頼朝の部下の大將工藤祐經の陣營に二人の壯漢が忍び込み、眠つてゐる祐經の枕を蹴つて目を覺させ、「曾我十郎祐成、同五郎時致の兩人、只今父の讐を報ずるために推參致した」と大呼しつゝ斬つてかゝり、

驚いて枕刀をとつて起つた祐經をたうとう二人して斬り殺しました。

この騒ぎに祐經の部下は驚きあはて、闇の中で同士討ちするものがあつたりして随分多くの人が怪我をしたり死んだりしました。祐成も亦仁田四郎忠常といふ、猪退治で有名な勇士と戦つて死し、時致は進んで頼朝の館を犯して遂に捕へられました。これが有名な曾我兄弟の讐討であります。

讒言の天才

ほんとに氣の毒な最後

今頃ならばこのやうな騒動でも起れば、すぐに無電で報告しますから、事實はすぐ明瞭になるのですが、交通や通信機關の不備な昔のことですから、富士の裾野に起つた事柄が鎌倉に聞えた時には、針ほどのことが棒のやうになり、尾には鱧を生じて、飛んでもない噂になつてゐました。「工藤祐經がやられた」「曾我兄弟だ」「イヤ助太刀するものが居た」「何百といふ兵が押し寄せたのだ」「頼朝公の館も危かつた」

「イヤめちやく／＼になつた」頼朝公もどうなつたかわからぬ「いや將軍も害せられ
たらしい」害せられたさうだ「害せられたのだ」重傷だ「イヤ即死だ」と云つた風
に、大變な噂になりました。

これを聞いては頼朝の夫人政子は心配でたまりません。もう生きた將軍には會へ
ないのかも知れないと、深い歎きに沈んでゐました。その時幕府の留守を預かつて
ゐたのは範頼でしたが、姉の悲しむのを見ては氣の毒でたまりませんので、これを
慰めて「若し萬一のことがありましても、この範頼が居ますから、御心配はなさい
ますな、あとの始末はどのやうにも致しますから」と申しました。

ところが頼朝は大そう疑ひ深い性質の人でしたから、あとで範頼のさう云つたこ
とを聞いて「これは範頼が自分を除いてあとを取らうと思つてゐるのかも知れぬ」
などと考へはじめました。そこへ頼朝の家來には梶原景時のやうな、人の讒言をす
ることの天才が居ますし、又源氏の勢力を次第に殺いでやらうと、狡猾な目をして
見てゐる北條時政も居ましたから、それ等の人々の云ひふらした事か「範頼は疑は

しい、兄を除けものにしようとしてゐる」といふやうな噂が、しきりに口から耳へ
と傳はつて行きました。

それより先頼朝は、義經がまだ京都に居た頃、それを討つやうに範頼に命じまし
た。範頼は大變に困つて、しきりに辭退しましたが「お前も義經と同じことをやる
のか」と云はれ「決してそんな不都合はしません」と云つて、千通の誓書を上つた
ことがありました。今度も亦誓書を上つて「失言でしたからおゆるし下さい」と云
ひましたけれど、頼朝はどうしても聞かず、殊にその誓書の末に「參河守源範頼」
と書いてゐましたので、いくら兄弟でも、源の姓を名乗るといふことは無禮だと云
つて、どんなに言ひ譯してもどうしてもゆるしませんでした。

範頼はこの上はどうなることかと、食事も喉を通らぬほど心配してゐました。そ
こでその家來の當麻太郎といふものが、主人の心配するのを見るに見かねて、頼朝
がどんな相談をしてゐるか、誰が頼朝にどんな告げ口をして行くかと、それを探る
ためにこつそりと頼朝の寢室の床の下に忍び込みました。

それは八月十日の夜でした。頼朝は床の下に何者か忍んでゐることを感付きました。すぐに側の者に云ひつけて捕へさせました。すると範頼の腹心の家來で、而も武勇のすぐれた當麻太郎なのですから、頼朝の疑はいよ／＼深くなりました。どんなに拷問しても太郎は「たゞ様子を聞きたいためで、決して將軍の身の上に危害を加へようとしたのではなく、又決して範頼の命令でもない」と申し立て、それ以外のことはどうしても云ひませんでした。頼朝は遂にこれを薩摩に流して、後に斬りすて、範頼を伊豆の修禪寺に押し込めました。

併しかうなると範頼の家來どもは承知が出来ません。主人が罪なくして幽囚の生活を送るのを、どうして黙つて見て居られませう。橘太郎左衛門尉以下數名ひそかに頼朝に反かうと圖りましたが、すぐに捕へられて殺されました。

そのうちに例の梶原景時は、色々頼朝に云ひ込んで、遂に範頼を攻め滅ぼすことの許可を得、五百の兵を率ゐて急に修禪寺を攻めました。範頼は不意をうたれて甲を着る暇もなく、弓を執つて防ぎましたが、多勢に攻められては力及ばず、十餘人

を射斃して矢も盡きたので、火を放つて自殺しました。義經と云ひ範頼と云ひ、ほんとうに氣の毒な最後でありました。

後鳥羽上皇

尼將軍と狸爺

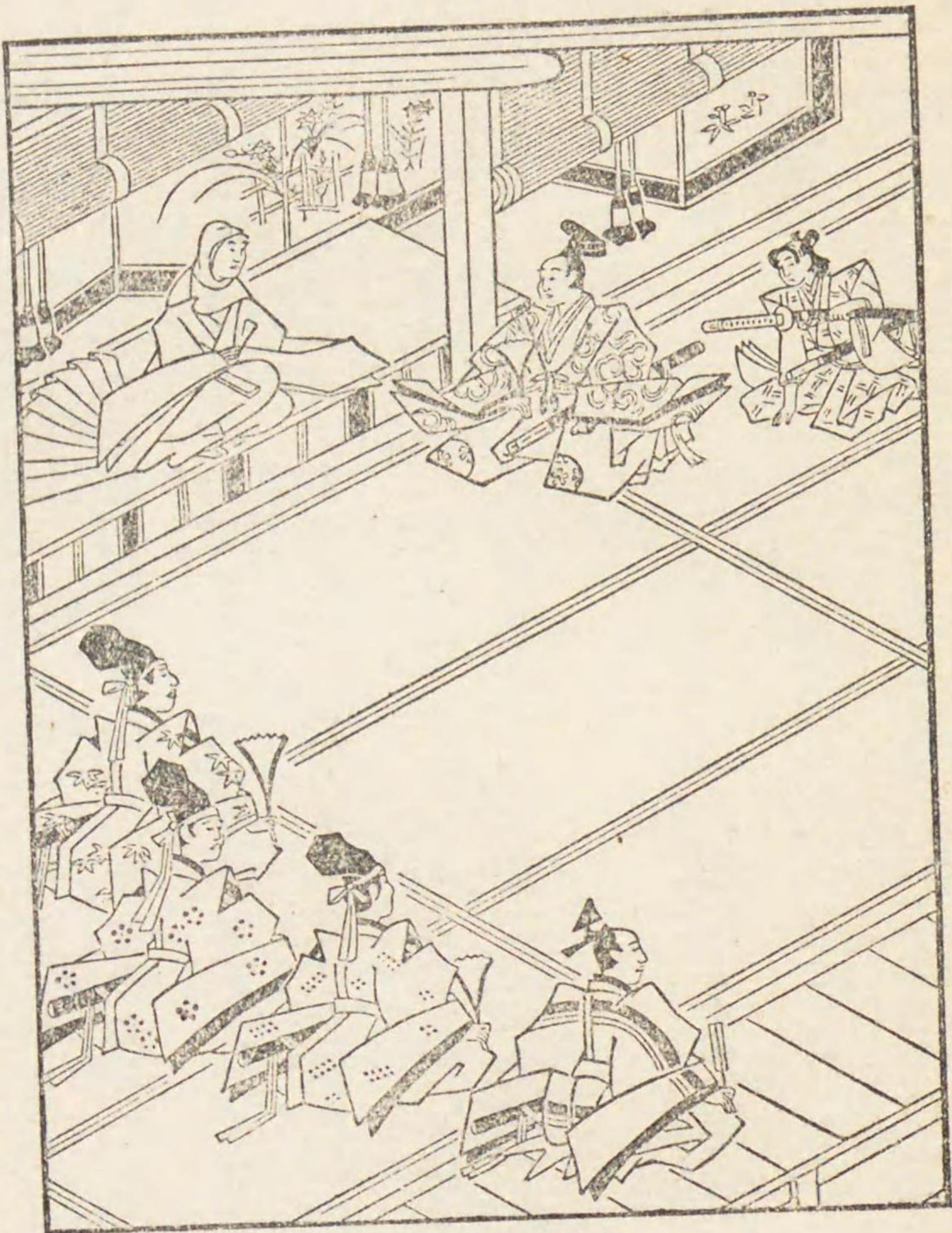
容易にゆるがぬ武家政治

建久九年十二月、相模川に新しい橋が架つたので、頼朝はその開通式に臨みましたが、歸り途で馬から落ちて大怪我をして、それがもとでたうとう翌年の正月に亡くなりました。平氏討滅の兵をあげてから、凡そ二十年、ほんとに花々しい生涯でしたが、疑ひ深い性質から、多くの兄弟や家來どもを殺してしまつて、たうとう源氏の血統の絶えるやうな事になつたのは惜しいことです。併し頼朝のはじめた武家政治は、その基礎が堅くて容易にゆるがぬものとなりました。

頼朝の死後はその子の頼家が家督をつぎました。ところがこの頼家は生れつきが

低能で、何とも仕方ない人物でした。毎日下らぬ遊びばかりして、誰が何と云つても聞きませ

て、一切頼家には關係させませんでした。そして政子が自分で政治の指圖をしました。ほんとに男まさりの女丈夫で、後には髪を剃つて尼となつてゐましたから、世



尼將軍

尼將軍と云はれた政子が、將軍に代つて凡ての政治の指圖をしてゐるところです。前に居るのは義時でせう。

も聞きませ
ん。そこで
母の政子も
非常に心配
して、政治
のことは主
な家來のし
つかりした
のに行はせ
るやうにし

にこれを尼將軍と云つてゐました。

尼將軍の父は北條時政で、頼朝が兵を擧げる始めから非常にその力になつた人です。すから、多くの家來の中では勿論第一の重要人物でありました。その上今は頼朝が亡くなり、その子の頼家が愚かもので、頼朝の夫人であつた政子が政治の實權を握つてゐるので、時政にとつては何事も思ふまゝになる世の中でした。

そこで時政は政子と相談して、たうとう頼家を伊豆の修禪寺に押し込め、將軍職はその弟の實朝に譲らせました。そして時政は、そつと使をやつて頼家を殺させました。頼家は湯に入つてゐましたが、不意に索が飛んで來て首にかゝつて、やがて引き出されて斬られました。

勿論こんなことになるについては、頼家によくない事があつたのは確かです。殊に和田義盛等に云ひつけて時政を討たせようとしたこともあつたので、そのまゝにして置いては北條氏が亡ぼされるかも知れなかつたのでせう。併し頼家がどんなふしだらなことをしても、一度もこれを止めようとしなかつたと云ひますから、充分

亂暴させて置いて、やがて殺さうといふ魂膽があつたのかも知れません。さう思ふと時政は油斷のならない狸のやうな爺さんであつたと云つてもよいのでせう。

雪の夜の異變

怪しい義時のふるまひ

そのうちに時政は益々威權を専らにし、遂には將軍の實朝を廢してしまはうといふ計畫を立てました。それには時政の妻の一族牧氏が關係したのですが、政子はこれを知つて大に怒り、遂に時政と親子喧嘩になつて、時政は伊豆の北條に逃げてしまひました。そしてその後は時政の子、政子の弟の義時が政治をとるやうになりました。

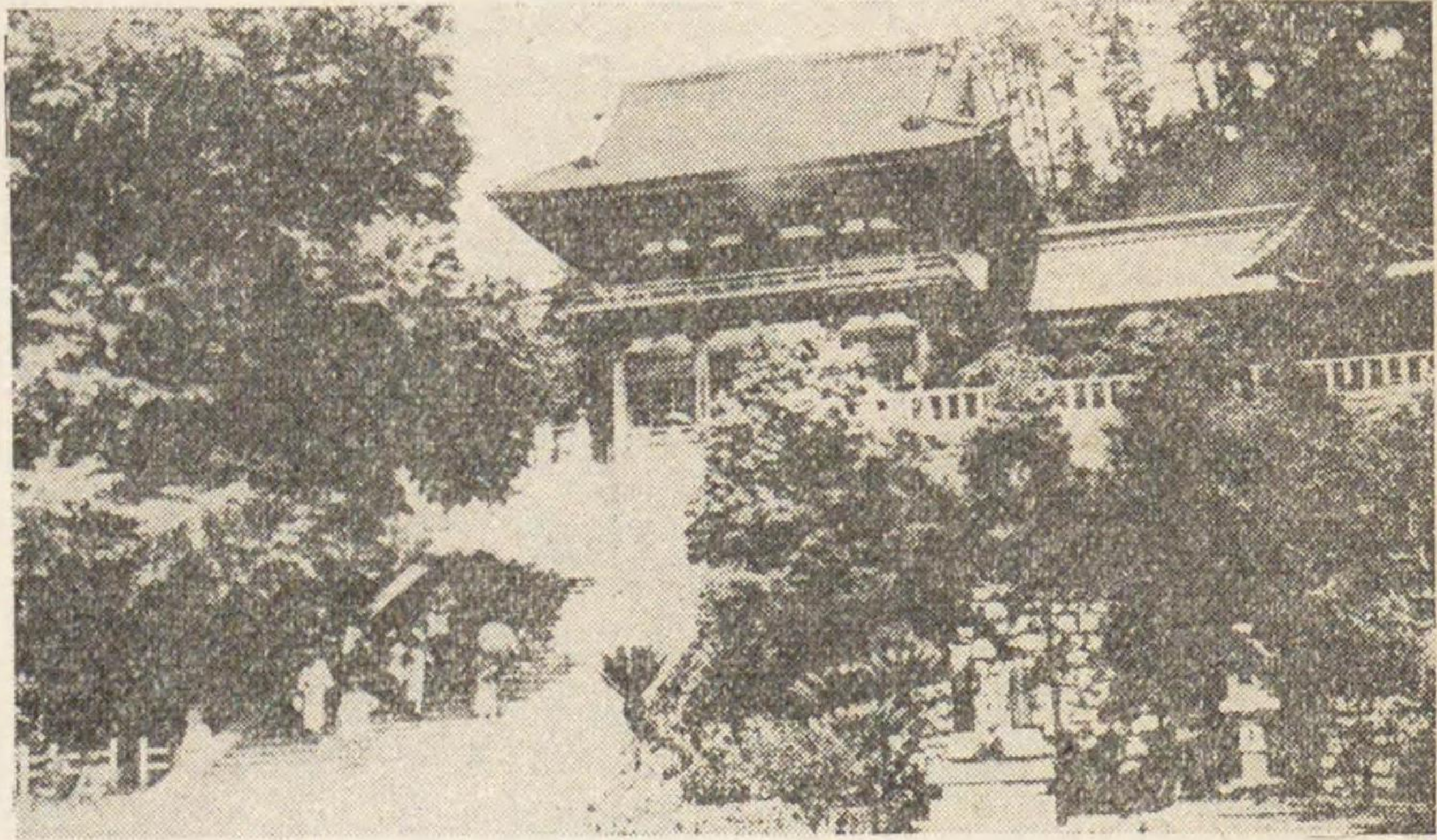
實朝が將軍になつたのは十二歳の時で、まだ何が何やらわからなかつたのですが、そのうちに様子が明かになつて見ると、自分は將軍であり乍ら何一つ政治に關係することなく、凡ての事は義時と尼將軍の政子との相談のみで決定するので、行末の

ことを考へると心配でなりません。そこで實朝は、せめて生きてゐる間に官位だけでも昇れるだけ昇つておいて、家名を揚げるのを唯一の樂みとし、度々朝廷にお願ひして遂に右大臣にまでなりました。大江廣元がこれを諫めて「年の若いにあまり高い官位を望むよりも、それは子孫に残して置かれたがよいでせう」と申しますと、實朝は「源氏の正統は今にも滅びさうではないか、子孫が何時までも續くことはとても望めない」と申しました。

それもその筈、實朝の運命も已に風前の燈火だつたのです。それは頼家の子に僧となつてゐる公曉といふものがあつて、實朝を父の讐だと云つて、三年も前からつねねらつてゐたのです。なぜその様なことを考へるやうになつたかわかりませんが或は北條義時がそゝのかしたのだらうとも云はれてゐます。父の頼家が殺された時公曉は四歳だつたのですから、その時のことを詳しく知つてゐるわけもあります。誰かに教へられて實朝を讐と信するやうになつたものでせう。

承久元年正月二十七日の夜、鶴岡八幡宮に於て、實朝が右大臣になつた拜賀

居ましたが、急に病氣だと云つて途中から歸つてしまひました。この時已に異變の



鶴岡八幡宮

石段の左に大銀杏があります。これは夏の寫眞ですから葉が繁つて居ますが、實朝が殺された時は冬ですから葉は落ちておました。その木の下に公曉はかくれて居たのです。

の式が行はれることになりました。晝の間から降つて居た雪は次第に積つて、たうとう五六十厘も積りました。併し豫定の式は中止するわけに行きません。夕方には行列が出はじめました。隨兵千人といふのですから、先登が八幡宮についても、まだ後尾は出發しないといふ有様、沿道の兩側には拜觀の群集が土下座して静まり返つてゐました。

義時は劍の役として實朝の側に

あることを知つてゐたのかも知れません。夜更けて神拜のことが全く終り、實朝が源仲章一人を伴つて、門を出て石段を下つて來るところへ、石段の側の公孫樹の蔭から一人の怪人物が躍り出て、忽ち刀を振つて實朝と仲章とを刺し殺し、首をとつて逃げました。衛兵どもが驚きあはて、騒ぎ廻りましたけれども、闇の夜のことゝて怪人物の姿は皆目わかりません。

そのうちに「公曉が父の敵を討つた」と闇の中から名乗る聲が聞えました。そこで公曉の居る雪下の本坊を襲ひましたが、多くの僧侶等が防ぎ戦ふのを、長尾新六等が先登を争ひつゝ突喚して、たうとうこれを滅しました。併し公曉の姿は見えませんでした。

ところが公曉は、將軍の首を持つて備中阿闍梨の北谷の宅に居ました。これを聞いた義時はすぐに公曉を討ちとるやうに命令しましたので、長尾新六定景がその命を受け、黒皮緘の鎧をつけ、従者五人を引きつれて備中阿闍梨の宅を襲ひ、公曉が早くも後方の山に上つたのを追つかけて、たうとう組み打ちしてその首をかき斬り

ました。公曉の弟の千壽丸は、これより四五年前に、京都で北條氏討滅の兵を擧げて討ち滅されましたので、こゝで源氏の血統は一人も残らず滅んでしまつたのであります。

關東討伐の御用意

官打ちにされた實朝

平氏が西海に滅亡し、安徳天皇が崩御しますと、京都ではすぐに後鳥羽天皇が御即位になりました。ところが天皇は、頼朝が次第に政治の實權を握つて、朝廷の御威光が次第に衰へられるのを御覽になつて、何とかして頼朝を除いて、政權を朝廷にとり戻したいものと、心密かに御計畫になりましたが、何分にもその當時、公卿の九條兼實や藤原能保が頼朝の味方をしてゐましたし、又宮中女官の丹後局が頼朝づきで、常に朝廷の様子をこつそりと鎌倉へ知らせますので、天皇は何一つも御計畫を御實行なすることが出来ませんでした。



後鳥羽上皇と御宸筆

この御肖像は藤原信實の筆と傳へられてゐるものです。御宸筆は上皇の御製で「磯馴て、しのぶや如何難波人、まるやかに夕浪の聲」

磯馴て、しのぶや如何難波人、まるやかに夕浪の聲

おましたので、上皇は實朝を官打ちにせられたのだといふ噂です。上皇は又武藝が御上手で、殊に刀劍をお好みになり、刀鍛冶をお召しになつて宮中で鍛錬せしめられました。それから院中をお護りするために北面の武士といふものがありました。この頃更に西面の武士といふのをお設けになりなるとして、關東討伐、政權回復のために種々と御用意になつたのであります。

そこで天皇は位を土御門天皇に譲つて上皇となられ、院中に於て御政治をなさいました。土御門天皇はその時僅かに四歳でしたから、もとより御政治をなさるわけには行きませんでした。そして上皇の御側にあつて、常に御力となつたのは土御門通親でした。

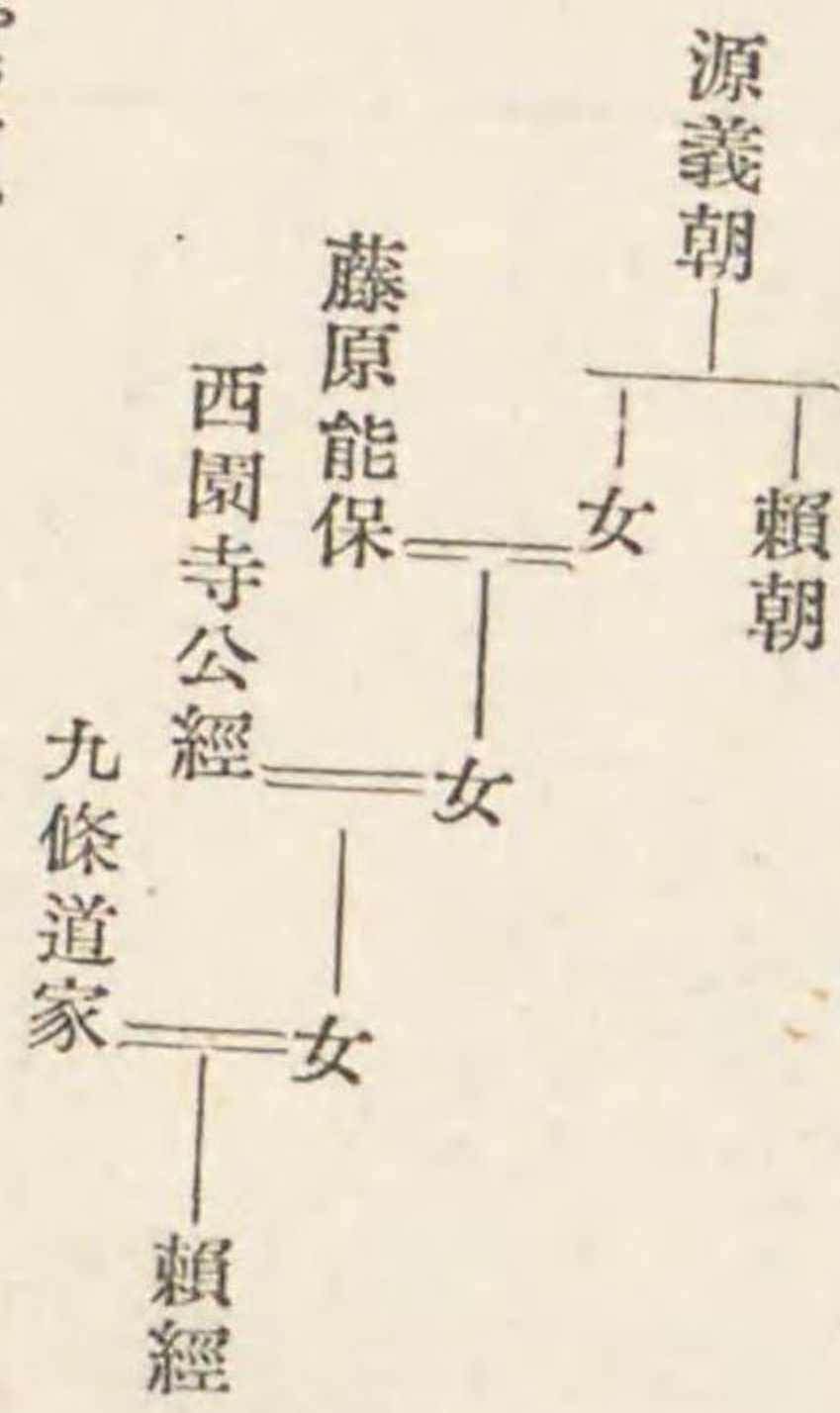
それから十三年ほど経つて、天皇は位を順徳天皇にお譲りになりました。そこで僅かに御年十六歳の上皇様が出来ました。この土御門上皇は極めて温順で仁慈な御生れつきでしたが、御弟の順徳天皇は、頗る英敏で剛健なお方でありましたから、後鳥羽上皇は深くこれを愛せられて、急に御位におつきになつたわけであります。併し御政治は依然として後鳥羽上皇がなさいました。

その頃關東では實朝が將軍になつてゐました。そしてしきりに高い官位を望んで朝廷にお願ひしてゐたことは前にも云つた通りです。これに對して上皇は、實朝の乞ふがまゝにどしどし官位を昇進せしめられました。その頃身分不相應の官位を授けられたものは、位負けがして死ぬるといふ迷信があつて、これを官打ちと云つて

子供がもとて出世

勅命にもそむく北條

將軍實朝が害せられた時には、已に將軍となるべき源氏の正統が無いのであるから、屹度政權は朝廷に歸るものと、後鳥羽上皇は心ひそかにお待ちになつてゐましたところ、尼將軍の政子は北條義時と相談して、左大臣九條道家の子、頼經を迎へて將軍としたいと願ひ出ました。それは頼經が頼朝と血縁があるからと云ふのです。血縁と云つても、こゝに掲げた系圖のやうに、頼朝の妹の曾孫にあたるといふわけで、而もその時僅かに二歳でしたから皇は仕方なくこれをおゆるしになりましたが、御心に添はなかつたことは云ふ迄もありません。



併し鎌倉の政治は決してわるい政治ではありませんでした。政子は男まさりの賢婦人でありましたし、義時も亦中々頭のよい男で、人民の難儀を救ひ、儉約を守り税金を安くして、世の中は太平に治まつてゐました。殊に東國には源氏の恩顧を受けたものも多く、又全國を通じて、長い間の亂れた政治と戦争の惨害には、もうすつかり飽きくしてゐましたから源氏の正統が亡びて公卿が將軍にならうが、政治の實權が北條氏の手に入らうが、そんなことはどうでもいと云つた風の考が滲み渡つてゐました。政權を朝廷にお還ししないのがわるいのですけれど、そんなことはその頃の人民にはわかつてゐませんでした。

或時上皇は熊野へ行幸せられました。神前で何をお祈りになりましたかそれは勿論わかりませんが、その時路の傍に一人の武士が二人の子供をつれて禮拜してゐました。上皇はこれを御覽になつて、その子供の如何にも賢さうな愛らしい姿にお目を止められ、お側のものに「あの武士を呼べ」と仰せられました。呼ばれた武士は仁科盛遠と云つて幕府の家人でした。併し上皇が西面の武士にと

仰せられましたので、盛遠は深く感激して、關東にそむいて上皇に一身を捧げ奉らうと決心しました。それで幕府から歸つて來いとこの命令があつても、返辭もしないで京都に止まつてゐました。

そこで義時は大に怒つて、盛遠の領地をすつかり沒收しました。上皇は御心配あらせられて、義時に命じ、これを返すやうに仰せられましたが、義時はこれに従ひませんでした。こんな風に義時等が朝廷をないがしろにし、上皇の御命令にさへ中々従ひませんでしたので、上皇は益々お怒りになり、遂に意を決して關東討伐の計畫をお進めになりました。

武藝大會の觸れ出して

集る一千七百餘騎

後鳥羽上皇は天皇と共に關東討滅の御相談がありましたが、天皇が御位にあられては都合がわるいといふので、急に位を仲恭天皇にお譲りになりました。これが順

徳上皇で、この時まだ土御門上皇もゐらせられましたので、一度にお三人の上皇がおありになることになりました。こんなことは全く歴史に例のないことです。それで後鳥羽上皇を本院、土御門上皇を中院、順徳上皇を新院と申してゐました。

承久三年五月、本院は鳥羽の城南寺で流鏑馬を催すからといふ觸れ出して、近畿十四ヶ國から兵をお集めになりました。流鏑馬とは矢を射る遊戯で、今で云へば柔剣道の大會と云つたやうなわけでした。すると上皇の召に應じて集つたものが一千七百人もありましたので、上皇も非常に力強くお思召になりました。

この時三浦胤義もお召によつて馳せ參じました。胤義は關東の家臣ですけれど、深く北條義時を怨んでゐましたので、上皇のお召に應じたのであります。又京都の守護であつた大江親廣もお召に應じましたが、伊賀光季は應じませんでしたので、上皇は兵を遣はしてこれを攻め殺させ、又關東に味方してゐた公卿の西園寺公經とその子の實氏を執へて馬場殿に押し込めさせられました。公經は頼朝の孫女を妻としてゐましたので、關東を笠に被て大威張りに威張り、近衛大將になりたいと云つ

て、お許しが無かつたのを怒つて、朝廷を辭して、將軍實朝の處へ行かうとしました。この度のことに ついても、上皇北條氏討滅の兵をお舉げになるのだと察して、すぐにこれを伊賀光季に告げ、鎌倉へ急報させたので、上皇も大そうお怒りになつて、これを殺さうとして執へられたのであります。

それから上皇は全國に院宣をお下しになつて北條義時討伐を命ぜられました。そして三浦胤義の兄の義村をはじめ、東國各地の豪族に對しては、特に重い賞與を出すからとのお諭しで、押松丸といふ非常によく走る男を使として、大急ぎで東國へ下されました。この時胤義も兄の義村に使をやつてこれを誘つたのですが、義村は遂に應じないで却つて、そのことを北條義時に告げましたので、義時はすぐに押松丸を捕へて所持する院宣を奪ひとり、尼將軍の政子と共にこれを披き拜して、上皇の御意志を確め得たのであります。

僅か十八騎で

泰時の鎌倉出發

男まさりの尼將軍は、これは一大事とばかり、早速家人どもを大廣間に集め、秋田城介景盛をして次の様に云はせました。

「皆一同心を沈めてよく承れ。これが最後の言葉であるぞ。頼朝公は朝敵を攻め滅ぼしてこの幕府を創設せられた。もとより朝廷のために盡し天下のために努力せられた處が大である。然るに今逆臣の胤義等が讒言によつて、關東討滅の院宣を拜することは心外の至りである。御身達が若し頼朝公の御恩を忘れないならば、胤義等の逆臣を除いて、頼朝公の創められたこの幕府といふものを死守すべきである。併しこの際お召しに應じて京都に馳せ參じようとするものがあるなら、今すぐにそれを云へ、決心はどうじや」と、これには一同感激して「必ず身命を擲つて御命令に服します」と誓ひました。

そこで諸將を義時の邸に會して軍議をこらしめました。みんな「足柄・箱根の關を固めて西軍を防ぐがよい」といふ意見でした。ところが大江廣元は「それはいけな

い。ぐづくして居たら一致團結がうまく出来るかどうか知らぬ。すぐに京都へ上つて勝敗を天に任すべきである」と主張しました。

それではといふので義時の子の泰時を總大將とし、武藏の兵の集るのを待つて出發する手筈にしました。ところが四五日経つうちに又しても「京都へ上るよりは箱根を守る方がよい」といふ議論が出てごたくしました。廣元は「一日でも待つてゐるからそんな議論が出る。武藏の兵の集るのを待つといふことがいけない。そんなことしてゐたら武藏の兵だつて變心するものが出るかも知れぬ。最早一時も猶豫すべき時でない。今夜すぐに出發すべきだ。さうすれば大軍は立どころにこれに従ふだらう」と云ひました。この時三善康信は病氣で寝てゐましたが、政子はこれに意見を問ひました處、全く廣元と同じことを答へましたので、直ちに泰時に命じてその晩に出發せしめました。これに従ふものは子の時氏、弟の有時以下、僅かに

十八人に過ぎませんでした。

その翌日の朝のことです。思ひもかけず泰時がたゞ一人馬を走らせて歸つて來ました。義時はびつくりして「どうした」と問ひますと泰時「戦のことについては昨日詳しくお指圖を受けましたが、たゞ上皇様の御車を先に立て、御旗を立て、行幸のことでもありました場合にはどうしたらよろしいでせうか、そのことを伺つてゐませんでしたから、一人走つて歸りました」といふ。義時はしばらく考へてゐましたが「よく申した。それが大事なことだ。上皇様の御車に弓を引くといふことは決して相成らぬ。そんな時には兜を脱ぎ弓の弦を切つて、御車の前にひれ伏し、御命令のまゝにしなければならぬ。併し上皇様は都にゐらせられて、たゞ將兵のみが來たのであつたら、千人が一人となるとも最後まで戦つて、決して後れをとつてはならぬ」と。れそこで、泰時は又すぐに馬の首をめぐらして一さんに駆け出しました。

泰時京都に迫る

公卿は顔色をかへて恐れる

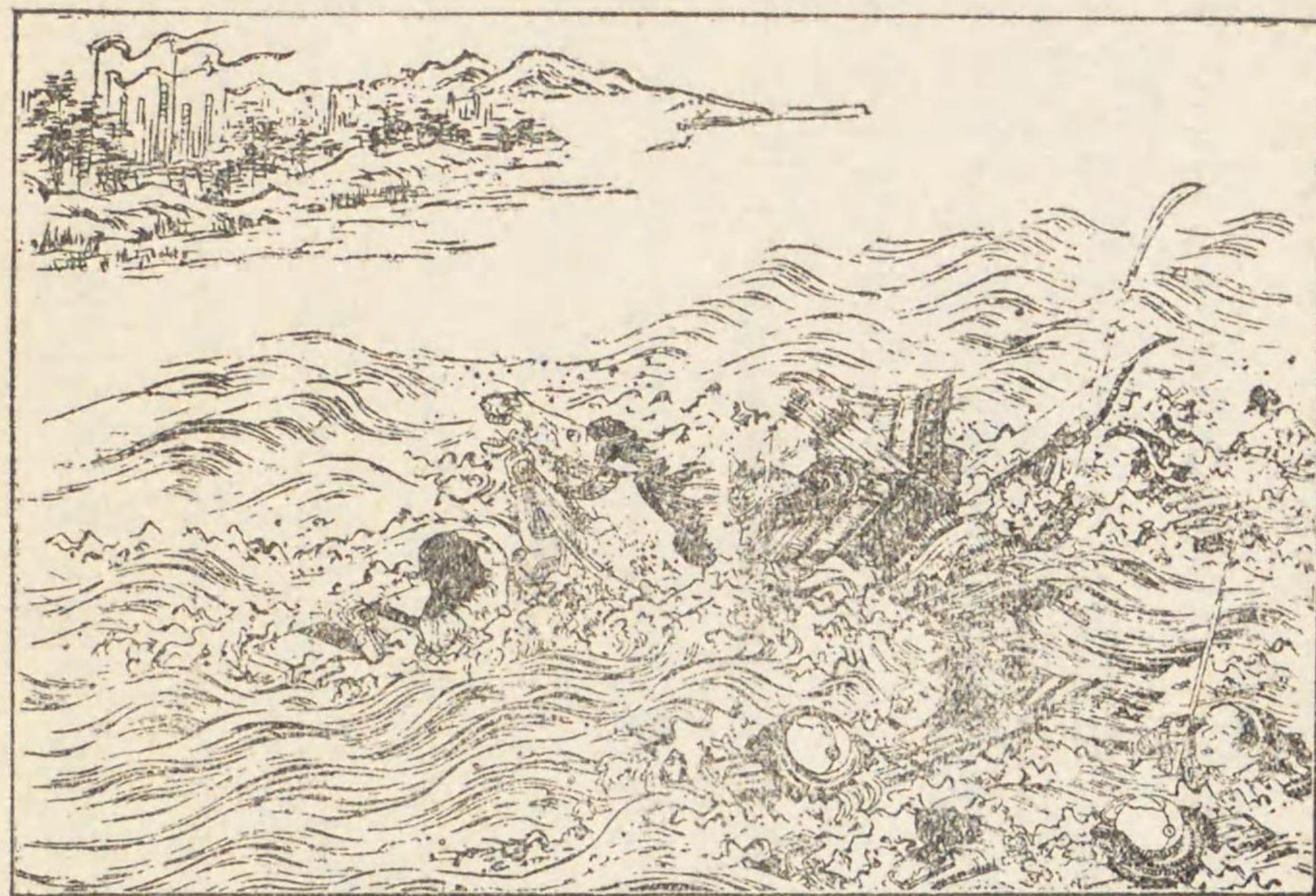
泰時が已に出發したと聞いては、ぐづくしては居られないといふので、諸國の兵は争つて、後を追ひました。それで出發後三日目には、已に總勢十萬となりました。そこで全軍を三つに分けて、泰時は東海道を進み、武田信光等は東山道を、泰時の弟朝時等は北陸道を進みました。

父が從軍すれば子は必ず關東に止め、兄が行けば弟は残すといふ風に、凡て一家一族が全部從軍するといふことは許しませんでした。それは朝廷方へ寢返るものがあつてはならぬといふ氣遣ひからです。併しそれでも總勢は十九萬といふのですから、如何に源氏の勢力が東國に行き渡つてゐたかゞわかります。「朝廷にはそむいても主人にはそむけない」といふのがその頃の武士の一般の考へ方でした。そこで義時はさきに捕へた押松丸を放して京都に歸しました。そして朝廷に申し

上げさせたことは「私は何の罪も犯しては居ませんが、讒言によつて討伐せられることは誠に殘念であります。陛下は戦をお好みとかいふことですから、さしあたり十九萬人を上げて戦はせませう。どうかゆつくり御覽下さいませ。そして若しまだ不充分でしたら、こちらに二十萬人残つてゐますから、それを引きつれて私が参りませう」と。これを聞いた公卿たちは身ふるひして恐れ、殆ど人間らしい顔色は無かつたといふことです。

併し上皇はさすがに少しもお騒ぎになりません。すぐに防戦の計畫をお立てになりました。そして總勢一萬七千五百餘を別つて九隊とし、美濃から尾張にかけて戦線をお布かせになりました。

泰時等は尾張の一宮まで来て攻撃の部署を定め、一齊に軍をすゝめましたが、官軍の大井戸を守つてゐた大内惟信、摩免戸を守つてゐた藤原秀康、三浦胤義等は、戦争もしないうちにわれ先にと京都に逃げ歸りましたので、全軍悉く京都に歸り關東の軍はぢりくくと京都に迫つて來ました。



宇治川の戦

向ふは官軍で、奈良の僧兵が一萬ばかり守つてゐます。こちらは幕府軍、折からの長雨で水が増してゐますので渡らんとて溺れるもの八百騎、春日貞幸の兵五百が漸くにして渡つたので官軍は遂に敗れたのです。

上皇は比叡山に行幸になつて僧兵の力を借らうとなさいましたが、僧兵が到底關東の大軍には勝てないと思つて御辭退申しましたので、再び京都に御還りになつて、二萬五千の兵を三手に分つて、宇治・勢多・淀をお守らせになりましたが、泰時の軍は遂に川を渡つて戦ひ、官軍を破つて京都の六波羅に入りました。

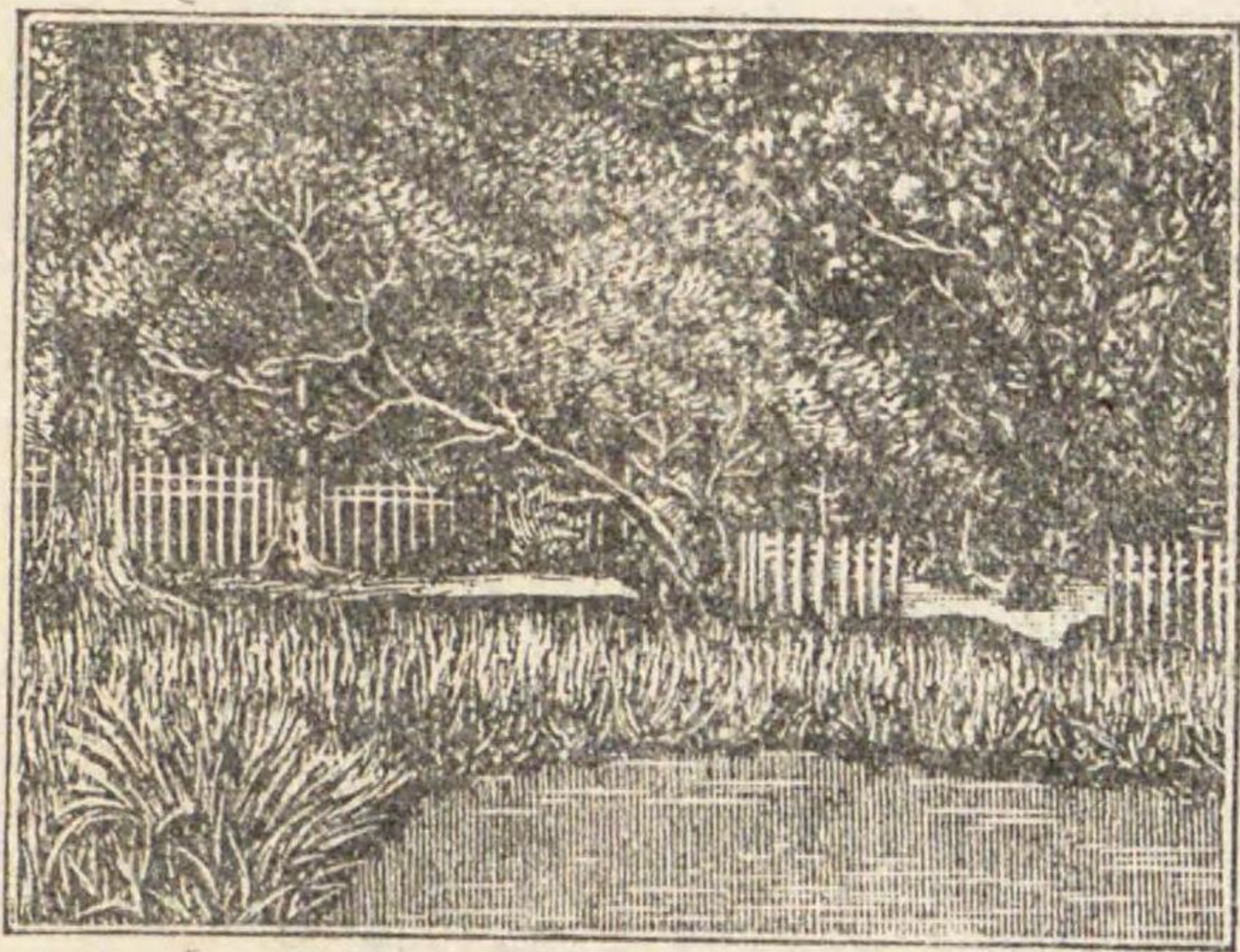
鎌倉では義時は毎日心配してゐましたが、或日雷がその邸に落ちましたので、義時いよく恐れ、これは鎌倉の亡びる前兆だらうと思ひましたが、そのうちに京都からうれしい戦勝の報告があつたので、始めて胸を撫で下して喜びました。

浪風荒き隠岐

十九年の憂き年月

泰時は京都に入ると、この度のことに關係した公卿を捜し出しては斬りすてました。平有範・佐々木廣綱などを京都で斬り、藤原光親・藤原宗行等は、關東へ送ると云つて途中で斬つてしまひました。併し泰時はどちらかかと云へば寛大な處置をとつて、罪の軽いものは捨て、置いて、あまりきびしく調べ出すことはしませんでした。そして没收した公卿の領地はこれを悉く功のあつた將士に與へ、少しも自分等は取りませんでしたので、北條氏の評判はますますよくなるばかりでした。本院後鳥羽上皇を併し朝廷に對しては義時のやり方は随分きびしいものでした。

ば隱岐に、新院順徳上皇を佐渡に遷しまゐらせ、雅成親王を但馬に、頼仁親王を備前に流しまつりました。この兩親王は共に後鳥羽上皇の皇子であります。又仲恭天皇に逼つて位を高倉天皇にお譲りを願ひました。かくて仲恭天皇は在位僅かに七十日あまりでした。こんな例は全くこれまで無いことであります。



隱岐の御遺跡
後鳥羽上皇の行宮のあつたところ、中島海士村の海岸です。

施薬院使長成入道、左衛門尉能茂入道の二人と女官が二三人ばかり、御輿の前

には甲冑の武士が警固し奉り、二十七日に出雲の大濱港にお着きになつて、それから船で遙かに浪路を越えて、八月五日に隱岐の行宮におつきになりました。その行宮といふのは隱岐の島前の中島、今の海士村の海岸で、山かげの大きな岩のそばに、松の丸木の柱をたて、葦を葺いた粗末千萬なもので、ほんの辛うじて雨風をおしのぎになるくらゐの假屋でした。風のあらい日などは、終日終夜波の音が騒がしく聞えて、安らかに眠らせ給ふことさへも出来ませんでした。それでわれこそは新島守よおきの海の

あらき波風こゝろして吹け

と御製あそばしました。まことに畏れ多い極みであります。かくて上皇はこの地に十九年の長い年月をお過し遊ばされ、遂に御年六十でこの地におかくれになりました。土地の豪族村上氏は絶えず上皇を庇護し奉つたので、その子孫が今も御陵墓のお守りをしてゐるのであります。

言語に絶する不忠

どんな理由も理由にならぬ

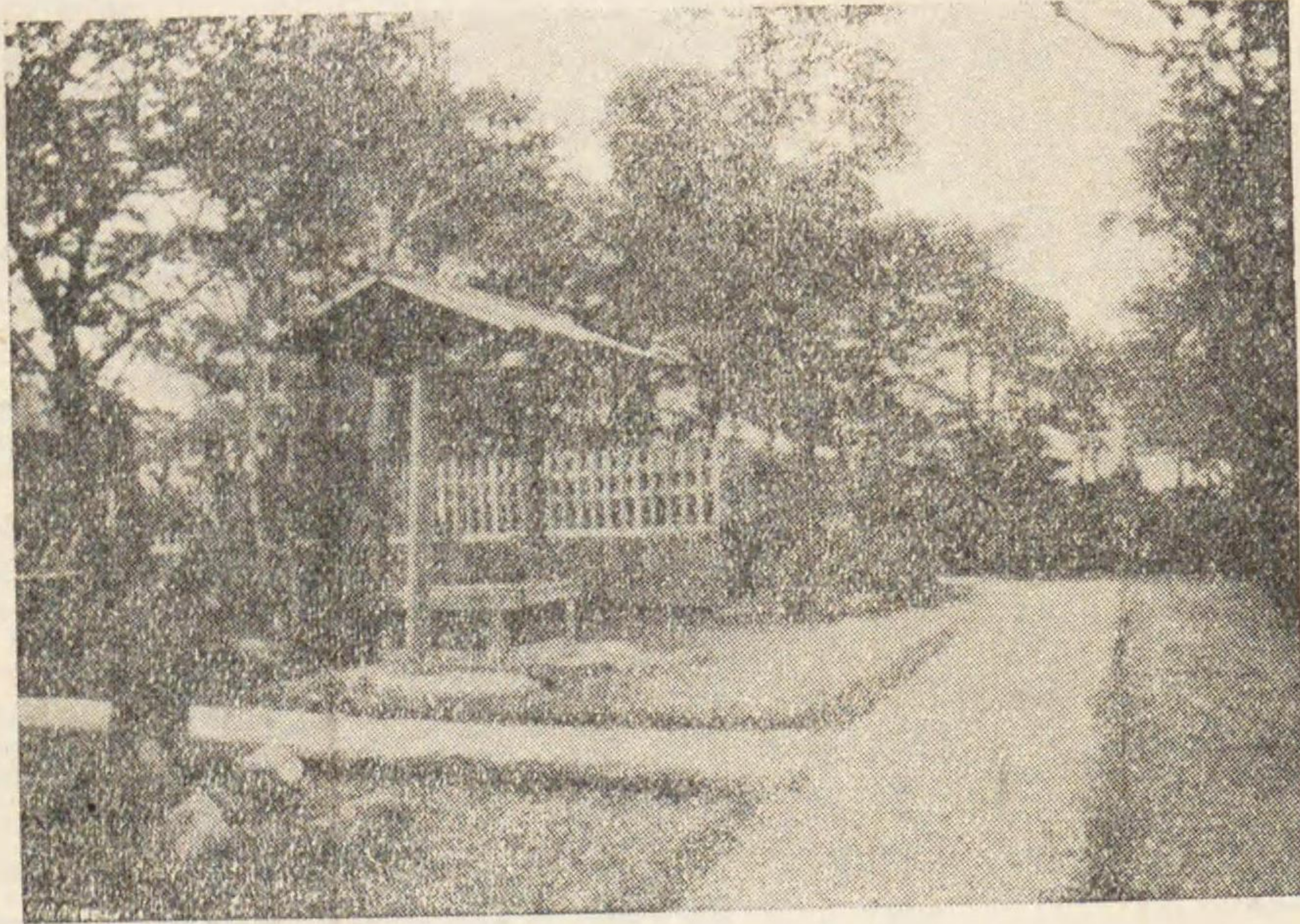
順徳上皇は七月二十日に佐渡に遷幸遊ばされました。花山院少將能氏、左兵衛佐範經、左衛門大夫康光、及び二人の女官が供奉して戀ヶ浦の海岸におつきになりました。その時の御製に

うぶさらばいそうつ浪に言問はん

あきの方には何事かある

とありました。遙かに浪を距て、何千軒のかなた、隠岐の空を眺めさせられて、御父君の御身の上を氣づかはせ給ふた御心のうち、御推察申し上げるも畏れ多いことながら、涙なくては語れぬ物語りであります。

行宮はその海岸から程遠からぬ眞野といふ處で、こゝで二十二年の憂き年月を過させられ、後鳥羽上皇崩御のことをお聞きになつてからは、殊の外御愁歎あらせら



黒木御所

址山の麓に近いところ、前は一面の広い平野、石の玉垣をめぐらしたところが御遺跡で、その手前に見えるのは古井戸です。

れて、たうとう御みづから御食事をお断ちになつて、崩御遊ばされぬした。その時に御年四十六歳であらせられました。

土御門上皇は關東討滅の計畫にはお加はりになりませんでしたので、北條氏も別にお咎め申し上げる處はありませんでしたが、御父君は隠岐に、御弟君は佐渡にお出でになりますのに、ひとり京都に止まるには忍びないと仰せられました。特に幕府にそのことを仰せられて、その年の十月に土佐に遷幸遊ばされ、翌年四月阿波にお

移りになりまして、遂にこの地で崩御遊ばされました。今板野郡堀江村にその御遺跡があります。

この承久の變は、勿論後鳥羽上皇が政權を朝廷に取り戻さうとの思召から起つたことで、それは機がわるかつたか、方法が拙かつたかではありませうが、併し、そのために義時の不忠を辯護することは出来ません。たとひどの様な理由があらうとも、身分の低い北條氏が天皇の御位を動かし奉り、殊に上皇お三方を遠い國にお流し申したといふことは、實に日本の歴史に又とない不都合を働いたもので、憎くて何とも云ひやうがありません。

併しその頃の一般の人民には、そんなことはよくわかりませんでしたから北條氏を憎むものはありませんでした。そして北條氏は京都に六波羅探題といふ職を置いて、朝廷を監視し束縛することを始めましたから、幕府の勢は一層よくなり、朝廷は全く手も足も出すことが出来ず、一から十まで北條氏のいふ通りにしなければならぬやうな事になつてしまひました。

北條氏の民政

政治の根元

たゞ慾を離れること

源氏が滅んでから後の北條氏は、身分が低いので自分で將軍になることは出来ませんでした。京から公卿や親王を迎へて將軍とし、自分は執權と稱して實際の權利を握り、將軍を自由に廢立したのは云ふ迄もなく、後には皇位のことにも口を入れ、攝政や關白の任命にも干渉する様になりました。そして義時の如きは三上皇を遠國にお遷しするなど、随分ひどいことを平氣でしました。

併し義時が近臣のために殺され、その子の泰時があとをついでからは、たいそうよい政治をしました。泰時は非常にやさしく情け深い性質で、恭儉以て己を持し、

仁慈以て下に對し、裁判は公平無私でありましたから、百姓は皆その徳に懐いて天下は大そうよく治まりました。

泰時はまた京都に居た時に、高山寺の明慧上人の處に行つて、佛法の話を聞いた序に「天下を治めるにはどんなにしたらよろしいでせうか」と問ひました。すると上人は「よい醫者はよく脈を見て、病氣の根元を知つた上で薬を與へますから、病氣がよく治るのです。國を治めるのもそれと同様で、世の亂れる源をよく知つて治めたらよいでせう。亂世の元は只慾といふやつです。慾心が凡ての禍の元となります」泰時「でも萬人が皆無慾になることは困難でせう」上人「太守一人が無慾となられたならば、萬人は自然に慾心が薄くなるでせう。若し人民に慾心の深いものがあつたら、わが慾のなほらぬためだと自分を責められるがよろしい。昔支那の周の國に文王といふ王様がりました。全く慾の無い方でありましたから、その國の人民は互に畦を譲り、自分の田の境は人の方へ譲るやうにして、決して人の土地を掠めるやうなことはありませんでした。その頃他の國の人が、田地の境を争つてお

上に訴へようとして、この國を通りました時に、その有様を見て自分等の慾心の深いのを恥ぢ、途中から皆歸つてしまつたといふことで、文王一人の無慾が、その國をよく治めたばかりでなく、他の國の人までも感化したといふ話です。太守一人が小慾になられたならば、天下は必ずよく治るでせう」と、泰時大に感じて、鎌倉へ歸つてから後はこの心で世の中を治めて行きました。それですから父の義時が死んだ時にも、その領分は皆弟たちに澤山分けて與へて、自分はほんの少しばかりしか取りませんでした。又人民の訴訟などでも、慾の深いものは強く罰し、無慾のものは賞しましたので、人の物を掠め取らうとするものなどは全く無いやうになりました。

飢饉の救恤

惻々として起る人間愛

或年に美濃國に大變な飢饉がありました。泰時は直ちに千余町の田地に對して年貢を免除しました。そして百姓の中に、親類縁者をたづねて他國に行かうとするものがあれば、それには旅費を與へ、止まつて住まうとするものには土地を與へて、洩れることなく行き届いた救済をしました。

飢饉で困つてゐる人民には幕府から米を貸し、或年には九千石も貸し下げて、今年返せなければ明年でよいと申しました。又貧民が地主から米を借りてゐるものは、來年になつてその元だけを拂はせ、利息は幕府から拂つてやりました。又貧乏と貧乏で元をも拂ふことの出来ないものには、全部幕府の方で返してやりましたので、地主も貧乏人も共にその恩義に感じました。

併しこんなにして人民を恤まうと思へば、もとより澤山の費用がいりますから、泰時は非常な儉約をしました。衣服なども古物ばかりを用ひて、決して新しいものを着ないやうにし、烏帽子などでも古いのを修繕しては用ひました。夜になれば燈火も特に小さくし、晝の食事も一回減らしました。酒宴だの遊覧だのといふことは

してしないで、それ等の費用を積み立て、人民を救ひ恤んだのであります。

泰時は又宿直の夜に、從者が敷物を持つて來たのを、そんなものはいらないと云つて用ひませんでした。又頼朝の廟所たる法華堂に參詣した時には、堂の下に敷物をしして坐つて禮拜しました。「堂の上にお上りになつては」とすゝめる者があつても「頼朝公御在世の時には堂上に上らなかつたのであるから、今亡くなられたから」と云つて禮儀を忘れては相すまない」と申しました。そして泰時が政治に熱心であつたことは、

事しげき世の習ひこそものうけれ

花の散りなん春も知られず

といふ歌をよんだのを見てもわかります。人々は退散した後までも、尙役所に残つて事務をとつてゐましたので、春が來ても花を眺めることも知らずに過してゐたのであります。

泰時は又貞永式目といふ五十一ヶ條の法律を作りました。貞永元年八月に三善康

連等と相談して定めたもので、武家制度の根本と稱せられてゐます。即ち専ら幕府の家人や幕府の勢力範囲内の一般人民に適用する法律で、頼朝以來幕府の定めたるのや、裁判の例などを集めて文章にあらはしたものであります。朝廷の制度の根本たる律令は、全く支那の眞似をして作つたものですが、貞永式目はたゞ當時に必要な事柄だけを集めたもので、全く日本流義のものであり、實際に行はれないといふ部分は少しもありません。その根本は「ものゝ道理」といふことを中心にしたもので、裁判の標準を定めたものであります。即ち今日の法律とは違つて、云はゞ官吏に對する訓令のやうなものです。この式目は永い間武家政治の根本となつたもので、足利時代に至つてもこれを用ひ、必要に応じて新命令を附加して來ました。徳川時代の法律でも、やはりこの式目の精神が多く取り入れられてゐます。

儉約を政治の本

皿に残つた味噌を肴に

泰時の孫の時頼は五代目の執權であります。時頼は泰時と並び稱せられる名執權で、この二人の善政によつて、北條氏の勢力はいよゝ／＼磐石の重きをなしたのであります。

ります。

時頼の母は安達景盛の女で、老後は尼となつて松下禪尼と云つてゐました。或時障子の破れを小刀で切りながら自分で張つてゐました。そこへ禪尼の兄の義景がやつて來て「何某といふ男に張らせてはどうですか、そんなことは慣れたものですが」と申します



北條時頼 時頼は後に僧となつて諸國を巡つたりしましたが、死んだ時の年はまだ三十七歳でしたもつと長生したらもつと多くの功を残したことでせうに。

と、禪尼は「いや私だつてその男に負けはしませんよ」

と云つて、やはり一間づつ張つてゐました。

そこで義景は更に「序に皆すつかり張りかへられてはどうです。古い紙と新しい紙とで班になつて見苦しいではありませんか」と云ひましたら、禪尼は「後にはす

つかり張りかへるつもりですが、今日だけはわざとかうして置くのです。今日は時頼が來ますから、物は破れたところだけを修繕して用ひるものだといふことを、よく見習はせて置きたいと思ひまして」と答へました。禪尼は實にこのやうにして、細かいことに注意して時頼を教へ育てたので、この母にしてこの子ありと、後の世からも褒められるやうな名政治家となつたのであります。

そんなわけですから時頼は儉約を以て政治の本としてゐました。どんなに儉約してゐたかといふことについて面白い話の一つあります。時頼の友達に大佛宣時といふ人がありました。或晩時頼からの使があつたので、すぐに行かうとしましたが、直垂が無いので、どうしようかと思つてゐますと、又使がやつて來て「直垂でも無いのか、夜のことだから不斷着でもいゝではないか、すぐに來てくれ」と云ひますので、そのまゝの粗末な服装で急いで行きました。

すると時頼は「よく來て呉れた、實は酒が少しあるのだが、一人で飲むのも淋しいから呼んだのだ、さアこちらへ」と云つて、自分で銚子と盃とを持つて出て來ま

した。「ところで肴が何も無いのだが、もう女どもも寝てしまつたらしい。何かそこらにあるかさがして呉れ給へ」といふので、宣時は蠟燭に火をつけて、臺所のあたりをあららこちらとさがして見ましたら、棚の隅に小さな皿に味噌の少しついたのが見つかりましたので「これがありましたよ」と持つて來ましたら「あゝ結構々々それを肴に」と云つて、二人は楽しく飲みつ語りつ、夜の更けるのを忘れたといふことでもあります。

今で云へば總理大臣にあたるほどの人が、皿に残つた味噌を肴に酒を飲んだといふのですから、如何に質素な生活をしてゐたかゞわかるのであります。それだから幕府の費用は少く、税金は軽くて人民は富み榮えたのであります。

水の中に小便

無駄をいやがる青砥藤綱

時頼は又部下を用ひるのに家柄などによらず、人物を見てはこれを引き上げまし

た。青砥藤綱といふ人は、身分の極めて低いものでしたが、子供の時から學問がす
きで中々頭のよい人でした。或年大旱魃があつた時、時頼は僧侶を集めて祈禱をさ
せ、これに食物を施しました。それから又三島の祠に祈りましたが、その時船に乗
せて居た牛が水の中に小便をしました。すると藤綱は「牛までが北條公の眞似をす
る」とつぶやきました。皆のものがそれを聞いて、「それはどういふことか」と聞き
ますと、「牛に若し心があるならば、この大旱魃といふのに水の中に小便をしなくて
も、田の中にしたら少しでもためになるであらうに、北條公だつてそうだ、多くの
僧を集めて施しをされても、欲の深いやつばかりは澤山貰つて腹いっぱい食ふが、ほ
んとに餓えてゐるものは却つて遠慮してゐる。これは牛が水の中に小便するのと同
じだ」と云ひました。この話を聞いた時頼は、早速藤綱を引き上げて、引付衆とい
ふ役に任じました。今で云へば書記官のやうな役で、又裁判のことにも關係してゐ
ました。

嘗て公文といふものが、北條氏の家來と土地の境を争つたことがあります。する

と多くの人北條氏に遠慮して、皆公文の方がわるいと云ひましたが、藤綱だけは
斷乎として公文の方を正しいと主張しました。公文は非常に喜んで、そのお禮にと

怒り、「裁判の公平は北條公が公平だからである。お禮をするなら北條公にすべきで
俺がお禮を貰ふわけが無い」と云つて、そのお金を使に持たせて、返してやりまし



なめり滑 川

鎌倉の中央を流れ、由井が濱に注ぐ小川で
す。川は小さいですが、併し傳へられる青
砥藤綱の人物は偉大なものであります。

お金を包んで、藤綱の邸の裏庭へ投げ込んで行きまし
た。これを見て藤綱は大に

た。今頃の役人や議員の人たちが、どうかすると賄賂を貰つたりして、裁判所に引かれなごします。それがこれとは大變な違ひだと云はねばなりません。

藤綱が或夜鎌倉の町はづれ、滑川にかゝつてゐる橋を渡る時に、誤つてお金を十銭川の中に落しました。そこで早速近所の人たちを頼んで、炬を買つて来て水中を探らせ、やつとのことで十銭を拾ひましたが、そのために炬の代を五十銭拂ひました。或人がこの話を聞いて、「十銭のお金を拾ふために五十銭の炬を買つては、差引四十銭の損になるではないか」と云ひますと、藤綱「五十銭は俺が失つても他人が儲けるのであるが、水中に沈んだ十銭は、そのまゝにして置けば腐るばかりで、つまり國家の損害である。俺は十銭を拾つた上に五十銭を儲けさせて、つまり六十銭を益したのだ」と答へました。時頼は益々藤綱を愛して更に重く用ひました。

あはれな尼の身の上話

月もさし込むあばら屋で

は全く嘘だと云つてゐる人もあります。併しほんつてあつても、決して不思議では



時頼の回國

時頼は僧侶となつて諸國をめぐり、困つて居る人民を救ひ、政治の行き届かぬところを調べ、わるい役人をたしなめ、孝子や忠僕をさがし出すのを樂みにしました。この圖は或貧民の家をたづねてゐるところです。

時頼は執權を譲つて後は、髪を剃つて最明寺に入り、自ら最明寺入道と稱し、諸國を巡つて

役人の様子や人民の生活ぶりを察しました。尤もこのことはあまり確かにはわかつてゐませんので時頼の回國

ありません。

太平記といふ書物に書いてあるのによりますと、時頼諸國を行脚して攝津國難波の浦につき、海士の鹽を汲むのを見て、「みんなこんなにして一生懸命に働いてゐるのに、一日たりとも遊んでゐては勿體ないことだ」と感心してゐましたが、そのうち日が暮れましたので、何處か宿をかる家でもありはしないかと、あたりを見廻はしますと、一軒のあばら家、軒も傾き壁も破れて、雨も降り込み、月もさし込むだらうと思はれるやうな家がありましたので、これでも人が居るのだらうかと、立ち停つて「もしく」と聲をかけて見ました。

すると中から年寄つた一人の尼さんが出て來ましたので「行き暮れて困つてゐる旅のものです、一晩お宿を貸して下さいませんか」と申しました。尼は「それはお安いことですけれど、藻鹽草より外には敷物もなく、磯菜より外に召し上げるものもありませんので、とてもお宿をお貸しするわけには行きません」といふ、時頼「でも外に頼む家もありますから、まア兎に角お貸し下さい。何もお構ひ下さるには

及びませんから」と、そこでやう／＼中に入れて貰ひましたが、もう秋もふけて夜の風は大そう肌寒くありましたので、柴を折りくべて夜どほし火をたいてもらつてやつと假寝の夢を結びました。

朝になつて尼さんが御飯の仕度をして呉れるのを見てゐますと、どうもそんなことには馴れないやうな手つきなので、時頼は不思議に思つて「召し使の人でもありませんか」と聞きましたら、尼さんは「されば」と云つて、泣く／＼身の上話をしました。

この尼さんの主人といふのは、このあたりの領主であつたのですが、その主人も亡くなり子供も死にましたところが、わるい地頭が居て、その領地を横取りしてしまつたのです。そこで京都か鎌倉へ出て、そのことを訴へたいと思つても、女の身ではどうすることもならず、たゞ一人貧苦にやつれながら、二十餘年の歲月を、やつと細い烟を立て、來たのでした。

この話を聞いた時頼は大そう氣の毒に思つて「それはほんとに氣の毒なことです

が、もう暫くの辛抱をなさい。屹度時節が來たら花の咲くこともありませうから」と云つて、机の上にあつた位牌の裏へ

難波潟鹽干に遠き月かげの

また元の江に澄まざらめやは

といふ一首の歌を書きつけました。屹度近いうちに、昔の様な幸福な境遇にしてあげようといふ心持を、それとなく歌によんだものです。それで後に鎌倉に歸つてから、この尼さんを呼び出して、昔の領分を歸してやつた上に、わるい地頭の財産を皆取り上げて、この尼さんに下げ渡したといふことであります。

謠曲に「鉢の木」といふのがありますが、こんな話を本にして作つた小説であります。身分をかくして諸國を巡つて、政治のよしあしを探るといふことは、後に徳川光圀もやつたといふことで、これによつて諸國の役人どもは、決してわるい事をしない様に、一生懸命によい政治をしなければならなかつたのです。

北條時宗

世界統一の野心

先づ日本を征伐して

奈良朝から平安朝の始め頃までは、わが國から唐の國に使を遣はし、留學生なども亦澤山行つて居りましたが、後唐の國が亂れてからは、わが國も遣唐使を廢してしまひました。それから後は日本と支那とは、表向きの交際といふことが絶えませんでした。尤も僧侶や商人は勝手に行き來してゐましたから、お互の様子は多少わかつてゐました。

唐の滅んだ後五十餘年間戰亂が續きましたが、やがて統一されて宋といふ國が出來ました。併しそれも間もなく金といふ國に破られました。その頃ずつと北の方に

蒙古人の國が起りました。今の外蒙古の北部、シベリヤとの境に近いあたりにテムジンといふものが起り、遂に皇帝の位に上つてジンギスカンと稱しました。ジンギスカンがわが國の源義經であるといふ話もありますが、勿論それは一向あてになりません。

ジンギスカンから四代の後にフビライといふものが皇帝の位につきました。このフビライの時、蒙古の勢力は非常に盛で、西はヨーロッパの中間までも占領し、印度を除いたアジア洲の大部はその手に歸し、僅かに支那に南宋が残り、東海に日本が残つてゐたばかりですから、序にこれ等の國をも平げて、全世界の王様になりたといふ、大それた考を出すやうになつたのも、亦無理からぬことでありました。その頃朝鮮には高麗といふ國がありました。この國は新羅が亡んだ後を受けて半島を統一してゐましたが、ジンギスカンに攻め込まれて降参してから以來、全く蒙古に屈伏してゐました。ところがわが國の九州あたりのものが、この高麗の海岸に寇をいたしましたので、高麗王はこれを蒙古王のフビライに訴へて、どうか日本を討つ

て下さいと申出でました。

高麗に趙彝といふ人がありました。初め坊さんでありましたが、非常に頭がよくて殊に語學が上手で各國の言葉を解し、海外の事情も亦よく知つてゐました。このものが蒙古に入つてフビライに用ひられ、又日本を討つがよいといふことを建議しました。そこでフビライもいよく心を決して、日本を征伐しようと思ひましたが、併し出来ることなら戦はずして屈服せしめたいと考へ、先づ高麗王にさととして、日本へ使をやるについて案内させることにしました。

併し最初の使は半島の南岸にある巨濟島まで來ましたが、對馬海峡の浪を眺めて急に怖氣がついて、そのまゝ引き返してしまひました。フビライは大に怒つて「そんなことで何になるか、たとひ浪風のために船が覆るとも、再び歸つて來たら承知しないぞ」と叱りつけました。そこで使のものは再び發して、遂に海を渡つて九州の太宰府に來ました。それは龜山天皇の文永五年正月のことでありました。

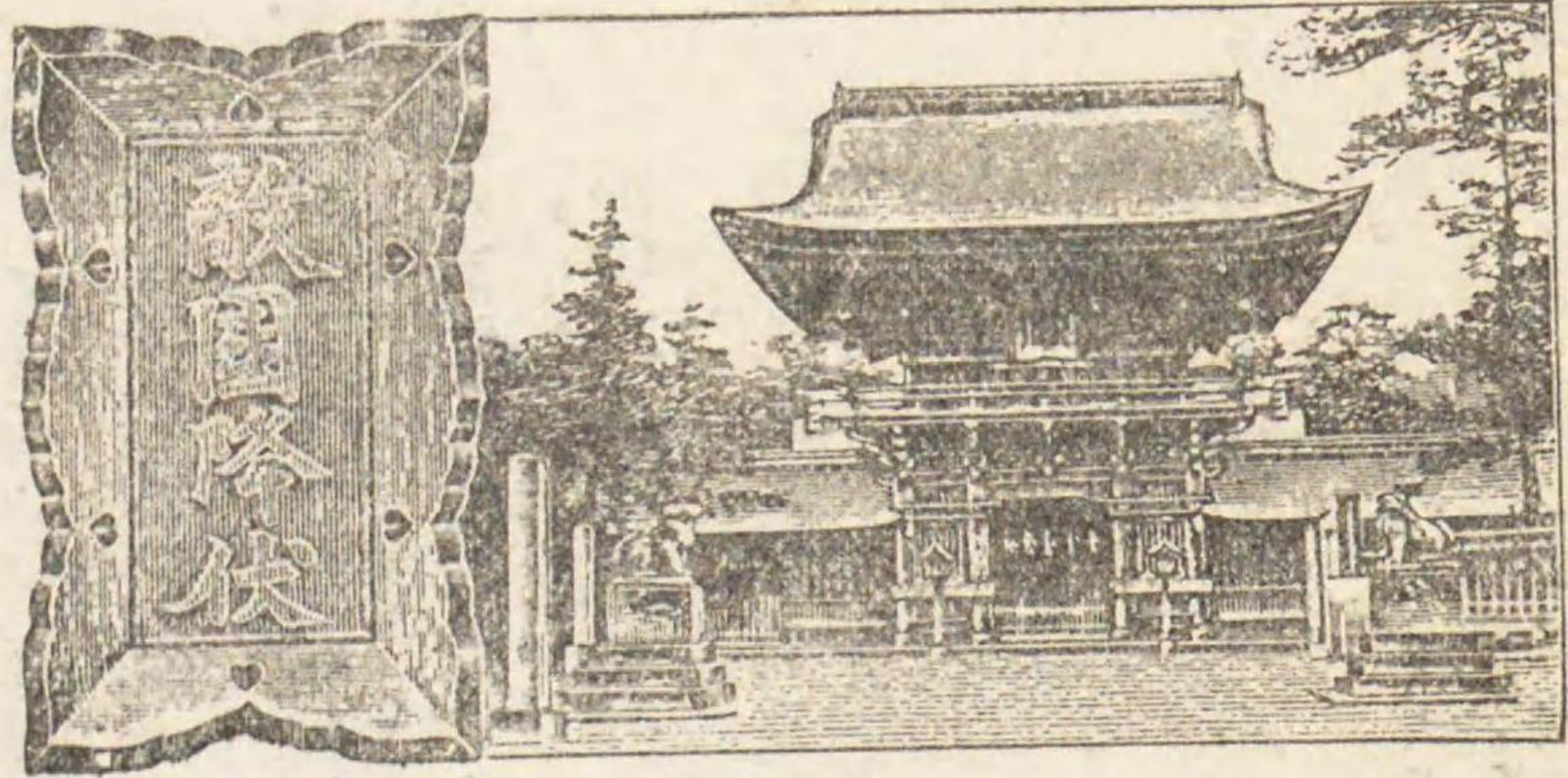
優遇された捕虜

それでも返事は與へない

太宰府に來た使のものは、蒙古の國書と高麗王からの手紙とを持ってゐました。その蒙古の國書には「大蒙古皇帝、書を日本國王に奉ず」といふ書き出しで、小さい國といふものは大きな國に服従するものだとか、高麗の國は蒙古の屬國となつて幸福であるとか、日本からまだ使をよこさないのは蒙古の強いのを知らないからだらうとか、兵を出して攻めるのは可愛相だからと云はぬばかりの、随分馬鹿にしたことばかり、書いてゐました。

太宰府からはすぐに使を以てこれを幕府に送りました。幕府ではそのことを朝廷に奏しましたので、朝廷では色々協議の結果、それを拒絶する意味の答書を與へようと思はれましたが、時の執權北條時宗は、あまりに無禮な蒙古の國書に憤慨して「答書なんか與へなくて宜しいでせう」と申し上げて、そのままに放つて置きました。

勢神宮に參拜させ、又代々、天皇の御陵にも使を發して蒙古のことをお告げになり



宮崎神宮

福岡市の東部にあります。このあたりは元寇の古戦場となつた處で、その樓門には『敵國降伏』の額が、今も玄界灘に向つて掲げられてあります。この文字は龜山上皇の御宸筆だらうと思はれます。

たので、使のものは太宰府で五ヶ月も待つてゐましたが、已むなく歸つて行きました。

た。その時彼等は必ず戦争になるものと考え、九州北岸のあたりの地形を偵察して行つたといふことです。

幕府の方でも、かうして使を追ひ返す以上は、屹度戦争になるだらうと覺悟して、海岸の諸國に命じて、何時何處に攻めて來るかもわからないから、充分用意をととのへて置くやうにさせました。又朝廷でも二十二ヶ所の神社に幣を奉つてお祭りがあり、全國のお寺に命じて祈禱を行はせ、更に權大納言花山院通雅を伊

ました。

フビライの方でも亦日本征伐の計畫を立て、着々として準備を進めました。先づ高麗の國に命じて戦艦一千艘を作らせました。そして文永六年三月に二度目の使を對馬によこして、前年の國書の返事を貰ひ度いと申しましたが、對馬の島司はこれを承知しませんでした。すると使者の一行七十餘人は大に亂暴をして、遂に塔次郎・彌次郎の二人の男を捕虜にして歸りました。

二人の捕虜はフビライの處に連れて行かれました。どんなにひどい目に合はされるか、どうせなぶり殺しにでもなるのだらうと覺悟してゐましたが、フビライは何と考へたか、二人を大そういたはつて、「汝の國の來朝を欲するのは、何もそれによつて利益を得ようといふのでは無い。たゞ世界を統一して名を後世に残したいばかりなのだ。歸つたらよくその事を申して呉れ」と云つて、御馳走をしたり色々土産物を呉れたりして、大切に日本に送り歸して呉れました。併しその二人を送つて來た使に對しても、太宰府は遂に何等の返事を與へないで

そのまゝ追ひ返してしまひました。

豪氣の時宗

脅し文句にはビクともせぬ

それでもまだフビライは志をかへませんでした。文永八年九月に、更に趙良弼といふものを使とし、高麗人の通譯と共に筑前の今津に來ました。もうその頃九州の人たちは、何時蒙古が攻めて來るかも知れないと、警戒おさ／＼怠りなかつた時ですから、「それ來た」とばかりにこれを討ち拂はうとしましたが、そのうちに攻めて來たのでないといふことがわかつたので、太宰府へそのことを報告しました。そこで太宰少貳藤原經資は兵を率ゐて今津に來て、「國書を持つて來たならそれを出せ」と申しましたが、「直接日本國王の處に行つて國書を献上するつもりだ。若しどうしてもそれが出來ないなら、大將軍の處に行つて手渡ししよう。太宰府の役人なんかには渡すことは出來ない」と云つて、櫃に入れて鎖でしばつて、嚴重に守つて

どうしても開きません。併し経資は國書を見ない内はどうしても上京はさせないと云つて頑張りました。そこで良弼も已むなく國書の寫しを出して見せました。



北條時宗

時宗が後に髪を剃つて僧となつた時の肖像です。死んだ時の年は三十四でしたから、文永五年に蒙古の國書が来た時はまだ僅かに十八歳の青年でした。

それを
見ますと
「前に使
をやつて
國書を送
つたのに
まだ返事
が來ない

それで又この使をやるのであるから、どうか答使を送つて貰ひ度い。若しこの上返事を貰へないならば、兵を出して攻めるの外はない」といふ意味のことが書いてありました。この位の脅し文句には最早ビクともしない日本人です。経資は早速その

ことを鎌倉へ報告しました。鎌倉ではこれを朝廷に申し上げ、返事を與へないで使はそのまゝ追ひ返してしまひました。

その翌年に又高麗王からも書面を送つて來ますし、十年の三月には趙良弼が再び來ましたが、これも亦追ひ返されてしまひました。その時の幕府の鼻息の荒いこと、云つたら、何度蒙古の使が來ようとも、一切返事をしないで追ひ返すことにきまつてゐました。そしてますます九州地方の防備を嚴重にし、何時幾萬の敵軍が來るとも、直ちに撃退せんものと、手ぐすねひいて待ち構へてゐたのであります。

朝廷に於ても勿論幕府の意見に御賛成でありました。國民も亦悉く一つ心になつてゐました。その緊張の有様と云つたら、日清戦争や日露戦争の起る頃の日本とよく似てゐました。もつと近い例で云ひますと、滿洲事變で世界の國々が日本をいぢめようとした時、斷乎としてこれに對抗し、遂に國際聯盟を脱退した。あの時のわが國民一般の氣持とよく似たものでありました。時宗は生れつ

き頗る豪氣で、十一歳の時大勢の目の前で、少しも氣おくれすることなく馬に乗つて出て、一矢で見事に射あてたといふほどの人物でした。十八歳の時に執權になりましたが、蒙古から第一回の使の來たのがその年でした。そしてその時から時宗は蒙古を相手に、戦争をする決心を固めたのであります。

未曾有の一大國難

忽ち一致團結して

その頃蒙古は國を元と名づけました。そしてフビライはいよいよ日本征伐の決心をしました。それ迄には勿論日本の様子をよく探つたことでせうが、つい五十年ばかり前には承久の變があつて、幕府と朝廷とが仲がわるかつた事や、幕府の内部にも、三浦氏の滅亡などいふやうな小事變が度々あり、人望のよかつた時頼が亡くなり、年の少い時宗があとをついだといふ事など、何となく國內がごた／＼して居るやうに見えましたので、攻めるならば今だと思つたのも無理はありません。

併し日本人はまさかの時に一致團結する力の極めて強い民族であります。少し位内輪喧嘩をしてゐるやうでも、スワ一大事といふ時には、何も角も打ち忘れて忽ち一つ心になつてしまひます。さういふ點は支那人と全く反對であります。支那人は



フビライ
東は日本海から、西はヨーロッパ中部のカルパチヤ山脈まで世界に未だ嘗て無かつた大帝國を建てたといふ不世出の大英雄フビライも神の國日本を征服しようとして全く大變な失敗を演じました。

外部から壓迫されて、ひどい目に會へば會ふほど内輪揉めをひどくやります。さうして遂には國が分裂するのです。日本にはまだ一度も、そんなことがありません。それを見損つたのはフ

ビライの失敗でした。それは日清戦争の時でもさうでした。政府と議會とが衝突して、内輪が揉めぬいてゐたので、今やればわけは無いと思つて、支那は日本と戦争をはじめました。と

ころが日本は戦争が始まると、今迄の内輪喧嘩は全く忘れてしまつて、議會は滿場一致で政府を助けました。そのことは本書の第十一卷に詳しく述べるつもりですが六百年の昔にも同じやうなことがあつたのは、一寸面白いではありませんか。わが國でも勿論蒙古の様子は相當に調べて居ました。その頃日本の僧侶で支那に行つて來たものも澤山ありましたし、九州あたりの商人の中にも、深く支那國內に入り込んで、そつとその内情を探つて來た者も、随分あつたことだらうと思はれます。日露戦争の時なども、政府の命令でも何でもないのに、個人の考で深く敵地に潜入して、敵の様子を探つたり、敵國を搔き廻すことをやつたものが澤山ありました。元寇の時にもやはりそんなことがあつたでせう。そして相當詳しく敵の様子がわかつてゐなければ、いくら時宗が豪氣でも、さう無闇にあれほどの堅い決心がつくものではありません。かくていよいよ文永の役は始まりました。實に日本にとつては古來未だ嘗て一度も無かつた一大國難に遭遇したのです。

鬼のやうなわるもの
壹岐・對馬を荒して

元主フビライは我が國が容易に屈服しないのを怒り、大に兵備を修め、又高麗に命じて戦艦を作らせ、文永十一年十月、蒙古の兵一萬五千、高麗の兵八千、海兵七千七百を率ゐ、戦艦九百餘艘に分乘して朝鮮半島の合浦（今の馬山）を出帆し、先づ對馬の佐須浦に押し寄せました。對馬の守護代、右馬允宗助國は、兵八十餘騎を率ゐて海岸に出て、「何用あつて來たか」と問ひかけましたが、賊は返事もしないで亂射すること雨の如く、すぐに上陸してやつて來ました。助國は大に奮戦して數人を射殺し、その子馬次郎も馬に乗つた賊の大將を射倒しましたが、もとより多勢に無勢でどうすることも出來ず、みんな戦死してしまひました。たゞ家來の小太郎と兵衛次郎とがやつと免れて舟に乗り、大急ぎに漕いで博多につき、太宰府にこのことを急報しました。

やがて賊は壹岐に押し寄せ、直ちに上陸して岸に赤旗を立てました。守護代、左衛門尉平經高は、百餘騎を率ゐて迎へ戦ひましたけれども、もとより何萬の大軍に勝てる筈はありません。退いて城に入りましたが、翌日はその城も陥つて經高等は皆戦死しました。

すると賊どもは島を荒し廻つて、多くの良民を斬つたり殺したり、殊に慘酷なのは女を捕へて手の掌に穴をあけ、これに綱を通して船の側に吊り下げ、「これ見よ」とばかりに大威張りに威張つて、やがて九州の海岸に襲つて來たのであります。戦争で兵隊が殺し合ふのは已むを得ないことです。けれど戦争の出來ない女や子供を殺すといふことは、まことによくないことと云はねばなりません。況や生きた人間の手の掌に穴をあけ、綱を通してぶら下げるなど、日本の武士にはとても出來ないことです。そんなことを平氣でやる蒙古軍は、近頃で云へばロシアのバルチザンか支那の匪賊か、兎に角人間らしい感情を持つてゐない、鬼のやうなわるい奴ではありませんか。

賊は先づ肥前の海岸を荒し廻りました。松浦黨がこれを防ぎましたが、やはり勝つことが出來ませんで、或は戦死し或は捕虜となりました。かくて賊軍は遂に博多灣に迫つたのであります。これより先に對馬からの急報が太宰府に到着しましたので、太宰府からはすぐに急使をつかはしてこれを京都の六波羅に知らせ、又九州の各國に使を出して兵を集めました。少貳・大友・菊池・赤星・竹崎・三井・山田・白石・光友・龍造寺・大村・有馬・山鹿・紀井・日田・兒玉など、名だたる大將悉く兵を率ゐて馳せ集つたので、總勢ざつと十萬二千餘人、博多の濱は人で埋められるほどの大軍勢となりました。

進退は太鼓の音で

毒矢や爆弾を飛ばす

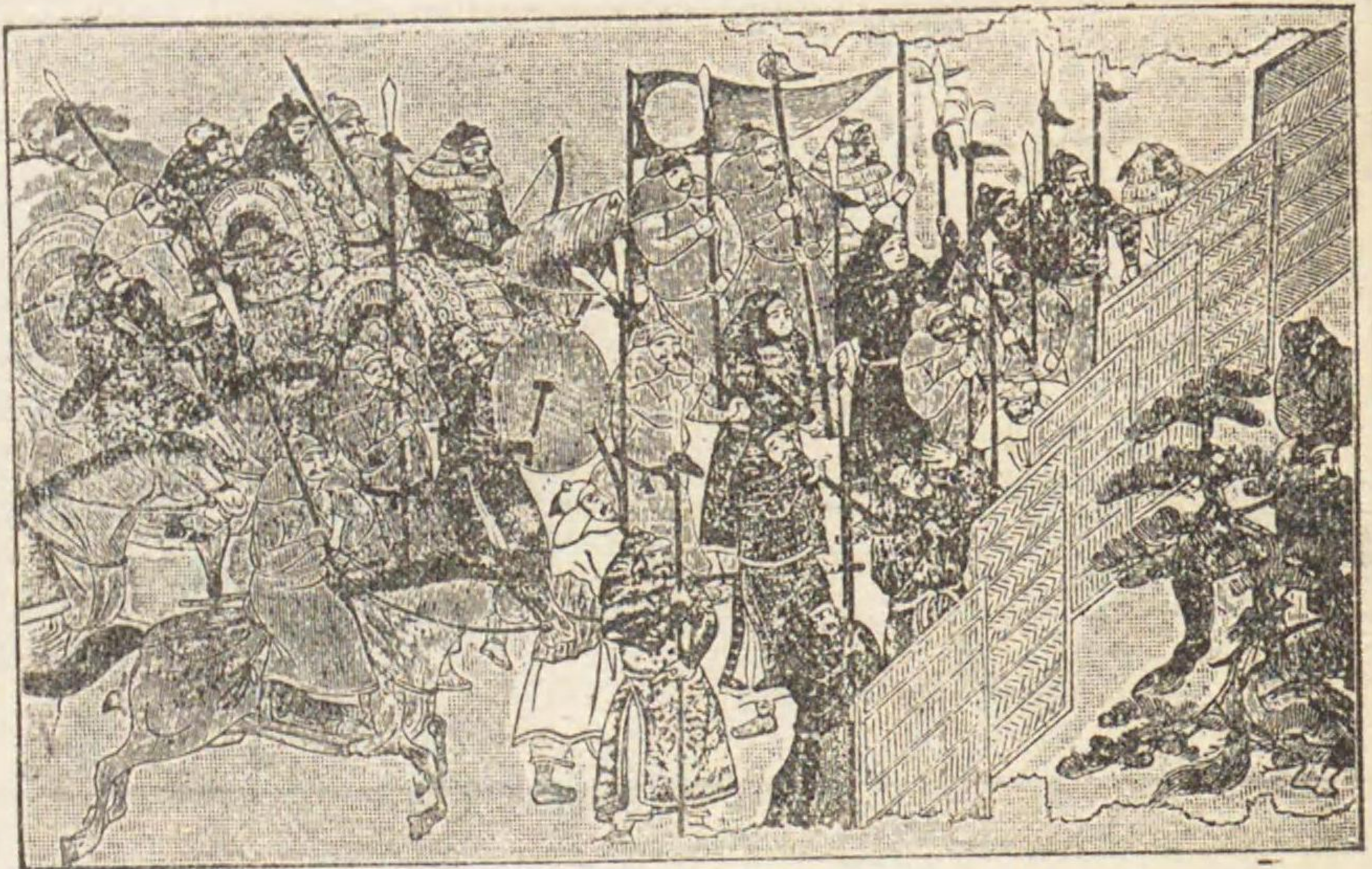
蒙古が攻めて來るだらうとは、何年も前から考へられてゐたことでした。暫く世

が治まつて戦争もなかつたことですから、武士にとつては却つてよろこばしい思ひもしました。功名手柄を立てるのはこの時とばかり、勇み勇んで集つて來ました。十萬餘騎が博多の濱に集りましたので、馬の鼻息は天に上つて風となり、蹄の音は地を響かして雷のやう、胸に張る弓は月の形、手に持つ三尺の劍は氷の如く、鎧の色は海に映つて海水悉く紅に染り、濱風に翻る旗は枯野の尾花かと思はれるほどでした。

蒙古の兵と云へばどんな顔をしてゐるか、一人位は生け捕つて國へ土産に連れて行かうなどと云ひ合ひましたが、敵は三萬あまりで味方は十萬以上も居るのでしたら、一人の敵へ何人もかゝらねばならず、せめて一人に一人なら、目覺ましい働きも出来るのだが、これでは功名手柄も出来ない、みんな口々に不平ばかり云つてゐました。

そのうちに蒙古兵は上陸しました。旗を立て馬に乗つて攻めかゝります。太鼓を叩き、銅羅を鳴してドン／＼ガン／＼、まるで耳も聾になりそうな騒がしさに日本

ことをしません。何百人が一列に並んで、太鼓の音につれて一度に進んだり退いた

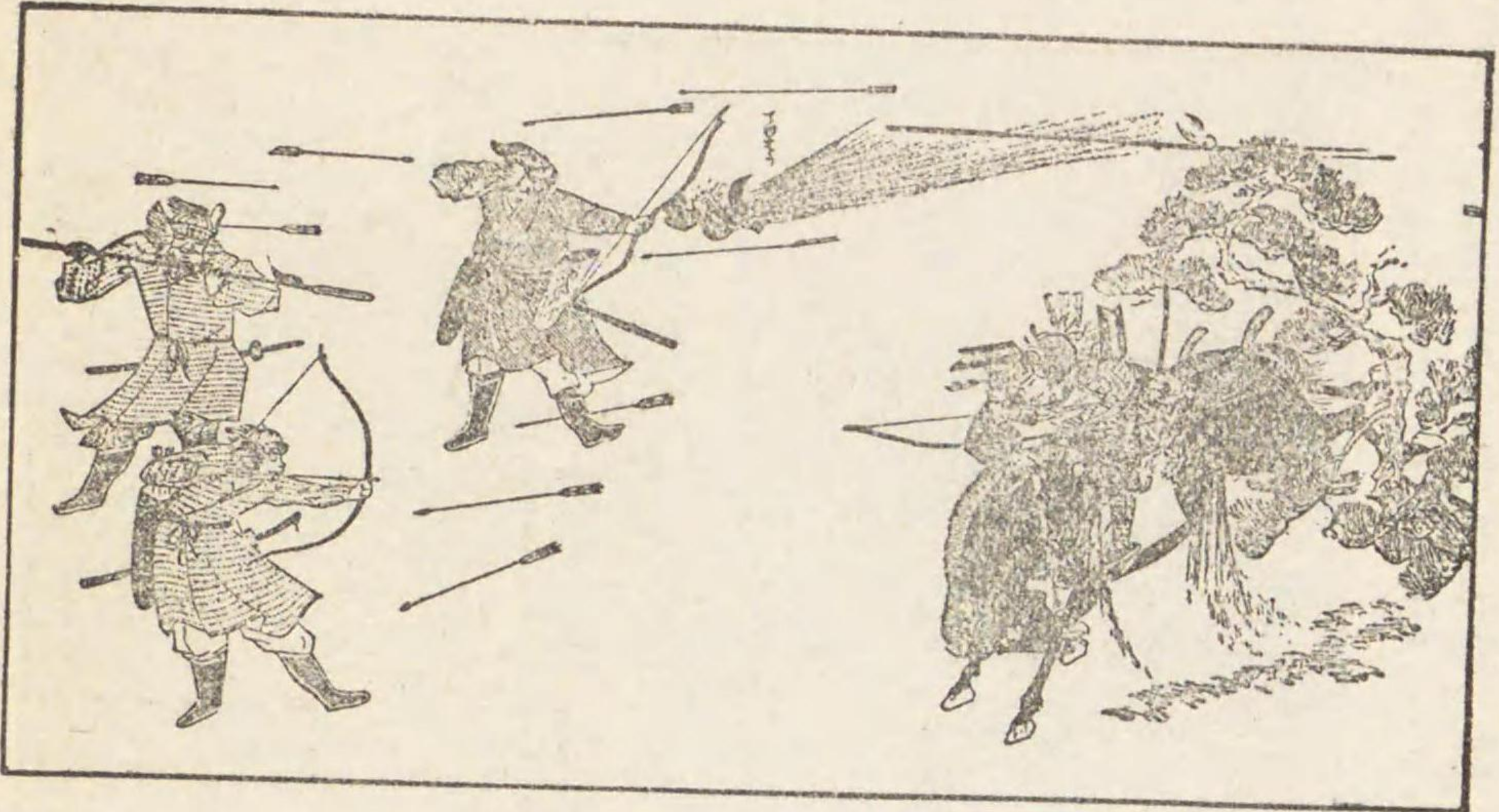


蒙古の軍勢

前面には楯を立てなれば、兵士は様々の鎧をもつて居ます。大將は馬に乗り太鼓をたゞいて進退の合圖をします。

の馬は驚きあきれてとんと思ふやうに動きません。馬を扱ひかねてゐる間に、敵は隊を組んでじりじりと攻め寄せて來ます。それに敵の矢は短いのですが、矢の根に毒が塗つてありますので、一寸かすり傷をしても、毒にあたつて皆倒れてしまひます。

わが國では戦争と云へば、一人づつ出て行つて名乗りをあげて刀で斬り合つたり組み打ちしたりするのでしたが、蒙古の兵はそんな



役 永 文

この時の戦争に従軍して手柄を立てた竹崎季長が、畫工に命じて描かせたものです。中央に見えるのは鐵砲の爆發してゐるところです。

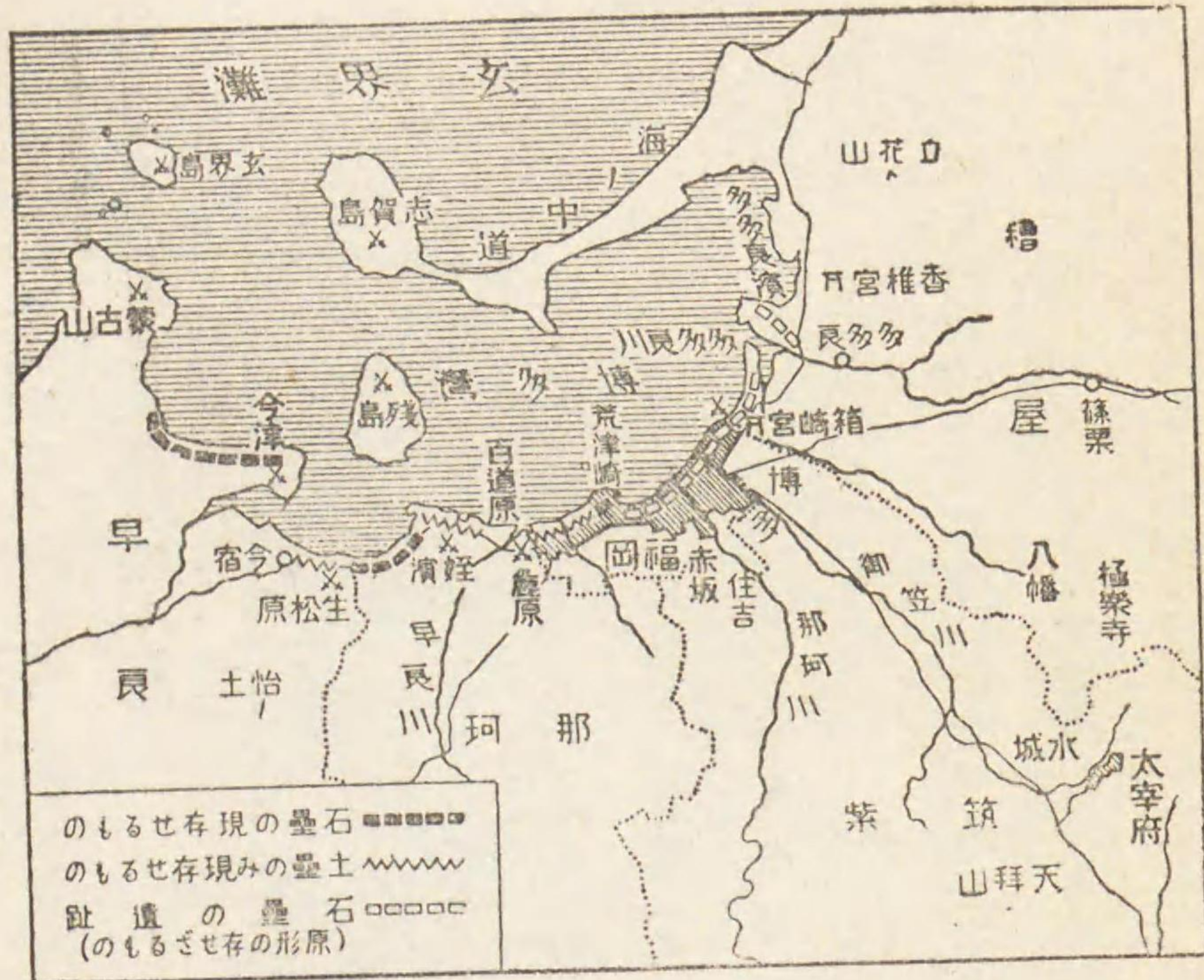
りします。大將が高い處にあつて、號令をかけて進退させます。日本の武士がたゞ一人駈けて出ますと、さつと左右から取り巻いて、何百何千が一度にかゝりますから、矢は四方から、雨の如くに降り、鉾や長柄が一齊に出て來ますから、どんな剛勇な武士でも、屹度やられてしまひます。勿論その間に敵の三人や五人は斃しますけれども、生きて歸るものは一人もありません。これにはさすがのわが軍も頗る面喰つたのであります。

それにもう一つ驚いたことには、敵は時々鐵砲といふものを飛ばしました。これは今頃の鐵砲とは違つて、手で投げて爆發させるものであつたらしく、云はゞ今頃の手擲爆彈のやうなものだつたのでせう。兎に角猛烈な音がして耳が潰れたかと思ふと、煙が出てあたりは何も見えなくなるのです。こんなものは今迄話にも聞いたことがありませんので、随分困らされたこと云ふ迄もありません。

神風敵を追ひ拂ふ

われは一騎討の奮戦

それでもわが軍は力の限り戦ひました。松浦黨は千餘人で賊軍に襲ひかゝり、二千人を斬りましたが、戦死したのも澤山ありました。山田重基等も二百三十騎が一度に賊に突入しましたが、これも奮戦して多く死にました。又菊池武房等は八百餘騎を以て赤坂で戦ひ、武房は自ら賊數人を斬り、赤星有隆は賊の大將を斃して首をとりました。



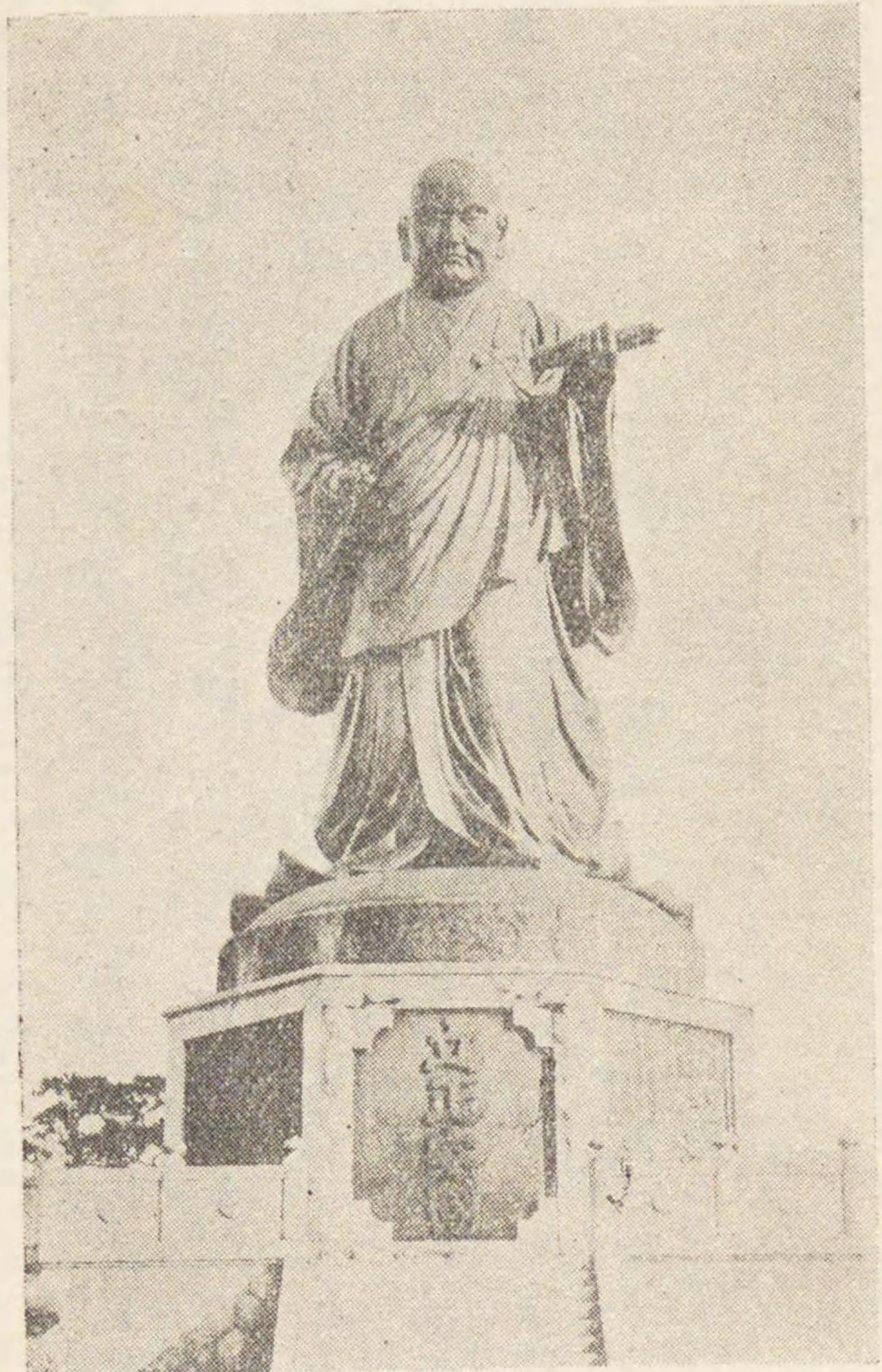
近南方にあつて、昔天智天皇の時、新羅の侵攻を防がんために作られたものので、この度時宗の命令によつて修繕したものです。谷を横ぎつて堤防を築いたもので川をせき止めると大きな湖が出来るやうになつてゐます。高さ三米あまり、長さは數軒に亘つてゐますので、わが軍はこれを



千代の松原

その昔惨憺たる戦場となつた千代の松原は、今は福岡市東公園の一部となつてゐます。

百道原では少貳覺惠等が三千餘人で戦ひましたが、遂に賊に追ひ立てられて逃げました。その時覺惠の子景資は奮戦して賊に迫りました。ところが賊の大將に頗る立派な鬚をもつたのがあり、赤い甲を着て馬に乗り縦横に馳せ巡つて頗る奮戦してゐました。進んで景資の方にやつて來ましたので景資は射て馬から墮しました。後に聞けばこれは賊の總大將の一人たる劉復亨でありました。



日蓮の銅像

文永の役に最も惨状を極めた千代の松原、そこに今日蓮の銅像が立っています。日蓮は蒙古の來寇することを豫言したえらい坊さんでした。そして弘安の役の翌年に六十一歳で死にました。

翌朝になつてわが兵が海岸に出て見ますと、昨日まで何千艘と居た敵の船が一艘

惨たり新戦場

見るかげもなく變りはて

防禦線としたのです。併し敵も随分疲れた上に矢も盡きましたので、夕方になると皆引き上げて船に乗りました。

この一日の戦に賊は相當に勝つたわけですが、併しわが兵がたゞ一人で勇敢に敵の中に突入し、縦横無盡に奮戦して數人を斬つた後に斃れる、その剛膽と勇氣には全く身ぶるひして恐れました。それにわが軍勢は敵に比べて數倍もありましたのでこれは到底叶はぬと思つて、その晩も歸るつもりの大將も居ました。劉復亨も重傷を負ひましたので歸國の途につきました。併し高麗の大將は是非決戦しようとする張してどうしても歸らうと云ひません。ところがその夜大風雨があつて、船が海岸の岩に打ちつけられて澤山こはれ、高麗の大將は波にさらはれて死にました。そこで全軍はその夜のうちに沖に出て、みんな本國さして歸つてしまひました。この時の風が第一回の神風であります。

も居ません。これは逃げたのだ。それ追つ掛けるといふので直ちに船を出しましたが、最早玄界灘は一望涯なき浪ばかり、敵の片影さへも見えませんでした。已むなく引き返して来ますと、逃げ後れた賊船が一艘、博多灣の入口の志賀島に留まつてゐました。乗つてゐる兵は手を合せて拜みましたが、もとより言葉が通じませんので、とても助けて貰へないと思つたか、大將は海に飛び込んで死にました。そこで兵卒百二十人を生捕りにし、水城まで連れて来て残らず首を斬つてしまひました。この戦争に戦死した賊軍は、總數一萬三千五百人であつたといふことで、随分ひどい損害でした。これまで何處の戦にでも、嘗て敗れたことの無いフビライも、この不成績には頗る氣を腐らしたことでせう。

併しわが軍の蒙つた損害も中々大きくありました。殊に博多の海岸では、人民の殺されたものも澤山あり、家は多く壊されたり焼かれたりしました。蒙古軍が退散したと聞いて、急いでわが家に歸つて見れば、吹く浦風に灰のみ高く天に上つて一夜のうちに見るかげもなく變りはてゝゐます。子を失つた親、妻をとられた夫、財

産も無くなり、立ち寄る家も無い中を、死骸を搜して泣きながらさまよふ様は、實に何とも云へない慘状であつたのであります。

この戦は十月の二十日でしたが、詳しい知らせが京都についたのは十一月のことでした。朝廷では非常にお喜びになつて、早速各地の神社にお使を立て、戦勝を奉告せられました。

併し幕府では、元の軍が再び攻めて来るに違ひないと思つて、ますく九州の兵備を盛にし、何度来てもこれを追ひ拂つてしまつてやらう。殊に今度の經驗を本として、再び失敗を繰り返さないやう、成るべく敵を上陸させない方針をとらうと、色々の計畫を進めたのであります。

更 に 外 征 の 計 畫

六百年前の一太郎やい

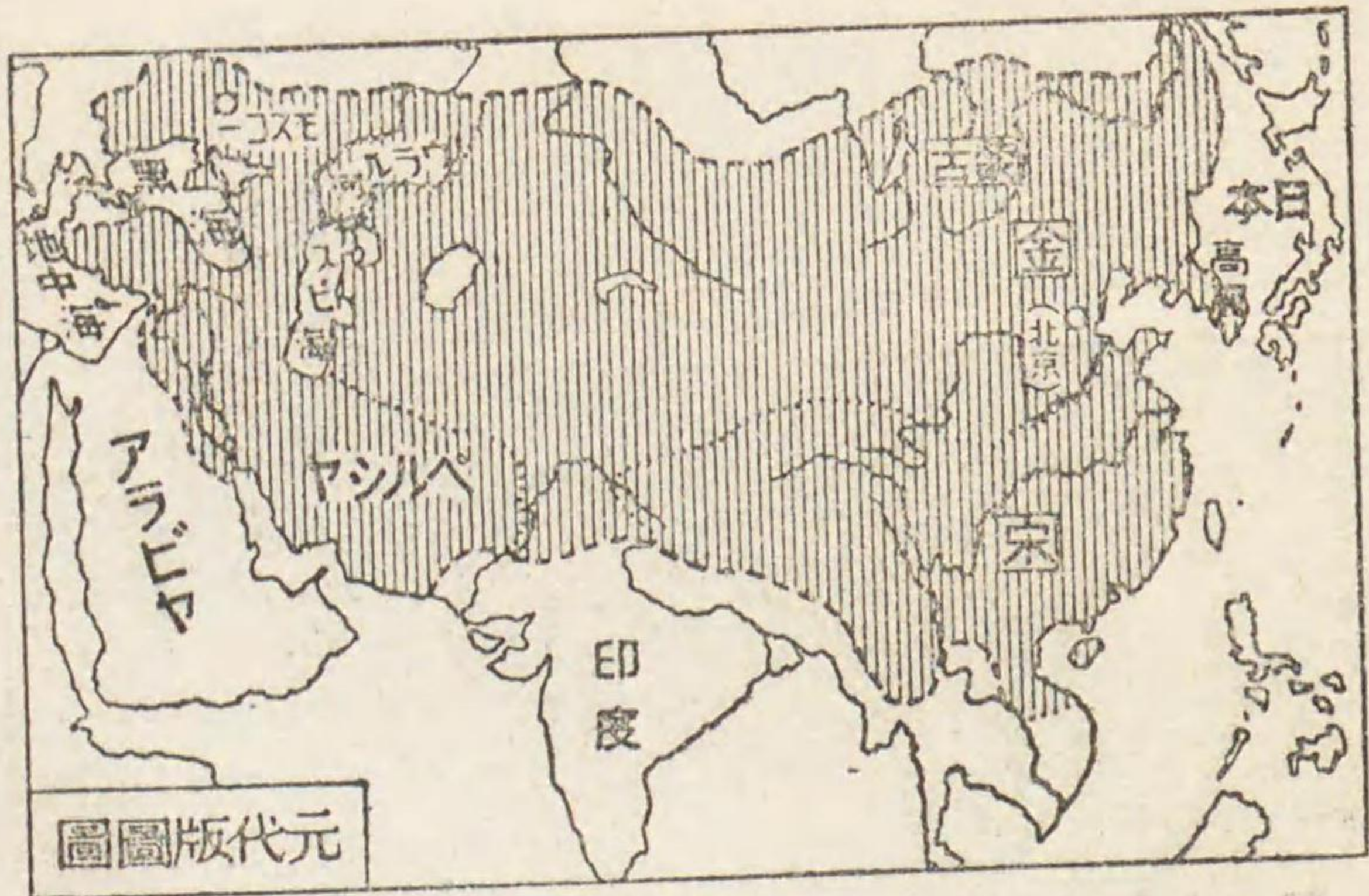
そのうちに元主フビライは、杜世忠等を使として又わが國へ書面を持つて來させ

ました。そこで時宗は太宰府に命じてこれを鎌倉に護送させ、龍口で悉く斬つてその首をさらし首にしました。そして益々兵備を嚴重にし、北條實政を鎮西探題といふ役にして、九州方面の軍事を總括せしめました。

そして時宗は、ちつとして居て元の攻めて来るのを待つよりも、いつそこちから攻めて行つてやらうと考へ、西海の將士に命じてそれ／＼出征の準備に着手せしめました。先づ少貳經費には、戦艦を取りそろへて明年三月に出發するやうに命じ、若し船が不足するならば中國・四國の各方面から補充するといふことになつてゐました。それから又安藝國の守護武田信時にも云ひつけて、經費からの通知があつたら、速かに船艦や兵士を繰り出すやうに準備させました。

鎮西奉行の大友頼泰も亦幕府の命令を受けて、九州の將士に各自の領内の船舶の數、櫓の數、船乗りの人名年齢等を書き出させ、それ等の船は來月の中旬までに凡て博多灣に集合するやうに命じ、又出征する際の兵士の人名・年齢・武器・乗馬の數等をも届け出さしめました。

すると鎮西の將兵どもは、われも／＼と出征を希望し、中には八十五歳の老人が

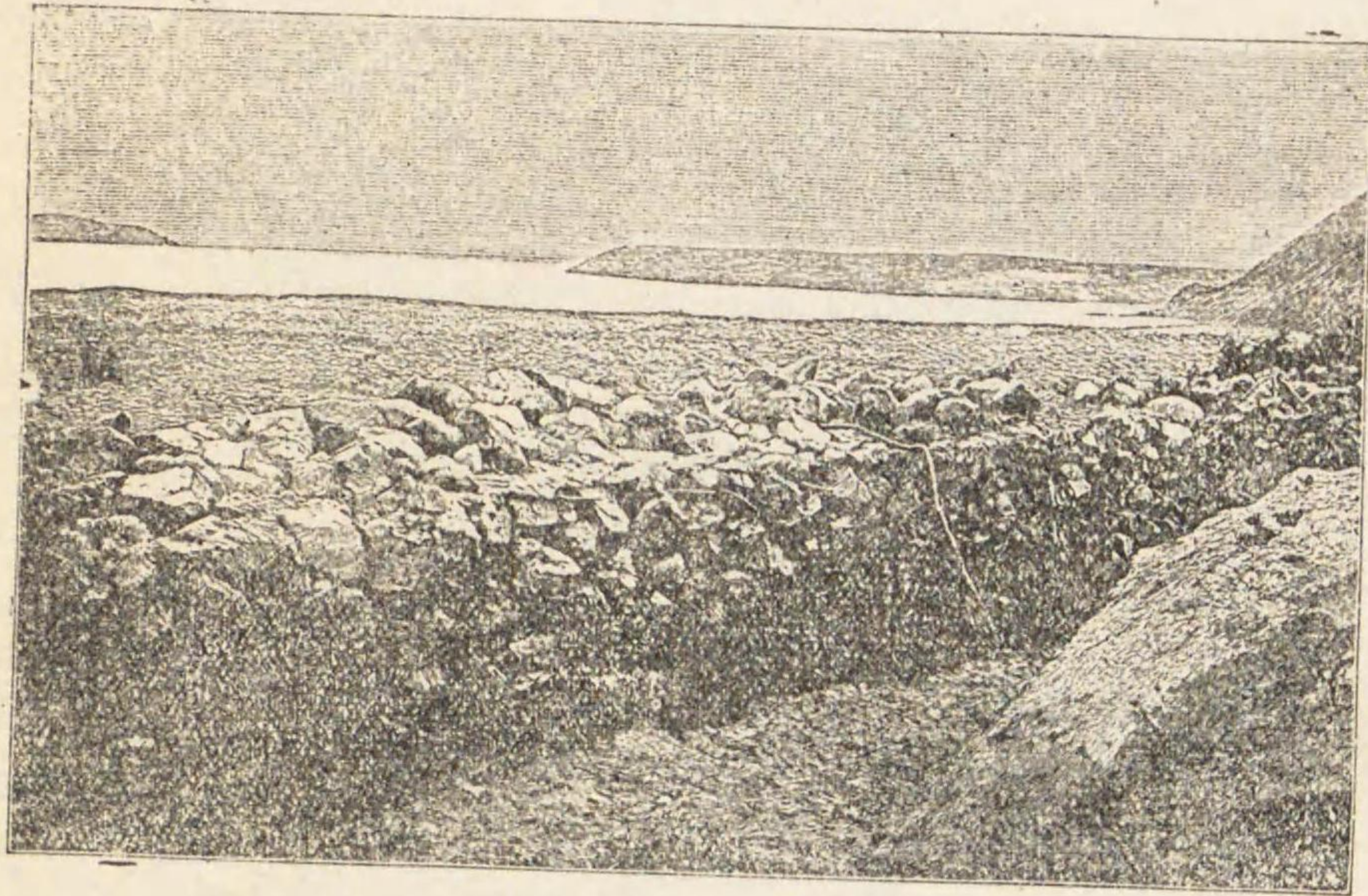


その頃元の國の領地はこんなに大きなものでした。アジアの大部分とヨーロッパを半分ばかりもつてゐたのです。だから日本位、何でもないと思つたに違ひありません。

へ攻め寄せる積りでありましたが、そのうちに元の國からまたも大舉して攻めて來

自分は歩行も出來ない老體だから、總領以下四人の子供を悉く從軍させたいと願ひ出るのがあり、又年老いた女から、自分は女で出征が出來ないから、力と頼む子息と聳とを差し出し、夜に目を繼いで馳せ參じさせますと申し出たのもあります。日露戦争の時の有名な「一太郎やーい」のお母さんのやうな勇ましい女が、昔からわが國には少くなかつたのであります。かうしていよいよ元の國

る様子がありましたので、出征を中止して又防禦に主力をそそぎました。そして西



防壘の址

防壘は中々の大工事でしたが、各將はそれぞれ区分して受持つて競争的に立派に築造しました。これは今も崩れかゝつて残つて居る今津附近のものです。

國の將士に云ひつけて、筑前の海岸へ防壘を築かせました。この防壘といふのは今も福岡市の西方、今津附近等に残つてゐます。處によつて石で積み重ねた處もあり、土壘のところもありましたが、兎に角高さが三米ばかり、前面は直立して攀ぢ上ることの出来ないやうにし、後ろは馬で駆け上れるやうにして、その上から射撃する仕掛けになつてゐました。

ところがその頃元の國は、宋の國を攻めるのに忙がしかつたので、暫く日本のことは打ちやつてゐましたが、弘安二年六月に更に周福等を使としてわが國に遣はしました。勿論その手紙も前より一層無禮なことを書いてゐましたので、時宗は大に怒つてこれを博多で斬つてしまひました。そして關東地方から兵を送つて九州の防備を一層嚴重にし、又四國の兵を博多の方面に送り、中國地方の兵を京都に集めて宮城を護らせ、北陸から奥羽の兵を敦賀の方向に集めて敵の來寇に備へました。

元軍再び來寇

又荒された壹岐對馬

弘安三年二月、元の使を斬つたといふことがフビライに聞えましたので、彼も大に怒つて鬚むしやの顔を一層むづかしく擧めました。そして范文虎を大將として兵十萬を率ゐて南支那から出發させ、洪茶丘等をして蒙古及び高麗の軍四萬を率ゐて朝鮮半島から出發せしめ、途中で出會つて共に九州に押し寄せるといふことに定め

ました。

四年五月、高麗から出發する東路軍は朝鮮半島の先端合浦を出發しました。戦艦九百艘、彼等は必勝を期し、勝つたらそのまゝその地に止まつて、農業でもやらうといふので農具までも船に積み込んで來ました。そして先づ對馬と壹岐とを侵し、兵士のみならず人民を多く虐殺して慘狀を極めました。島民は山の中などに逃げかくれてゐましたが、子供が泣いたりすると、その泣き聲で人の居る處をさぐりあてゝ片つ端から殺してしまひました。そこで幼児を泣かすまいと思つて、口に手をあてたりして思はず子供を殺したのも澤山あつたさうです。

少貳資時・龍造寺季時等は、數萬の兵を率ゐて壹岐に渡り、瀬戸浦で防戦して賊の大將數名を斬りましたが、賊は船の樓に登つて爆彈を投げますのでわが軍大に辟易し、資時も遂に戦死しました。

そこで賊は更に進んで太宰府を攻めようとし、六月五日に博多灣入口の志賀島に來ました。わが軍又これを迎へ討つて大に破り、賊の大將洪茶丘を殆ど捕虜にする

ところでしたが、横から來て助けるものがあつたので、惜しいことに逃がしてしまひました。その翌日の戦にも賊は大敗しました。その上賊軍の中にもわるい傳染病が流行つて、病死するものが頗る多く、戦死と併せて凡そ三千人にも上りました。

元軍が再び九州に攻め寄せたことが全國に傳はりますと、世の中は大變な騒ぎになりました。今頃とは違つて通信機關が不充分ですから、中々實際の様子がよくわかりません。そのうちに噂が噂を生んで、妙な流言が傳はりました。賊が長門國に攻め寄せたとか、すぐに京都に攻め上るさうだとか、或は東海道の方へ來るとか、北海の方を侵したとか、色々なことが口から耳へと傳はつて行きました。朝廷でも一時は京都が危いから、上皇は關東へ行幸せられたらといふ様な説もありました。龜山上皇は殊の外御心配あらせられて、親しく石清水八幡に詣でられて、夜の明けると御祈りになりました。又勅使を伊勢神宮に參拜せしめられ、畏くも御身を以て國難に代るやうにと祈らせられました。その時の御製に

世のために身をば惜まぬ心とも

荒ぶる神は照らしみるらむ
といふのがあります。まことに何とも申し上げやうのない有りがたい、大御心のほど、たゞ感涙にむせぶの外ありません。

敵艦に躍り込む

帆檣を梯子にして

九州に集つた將兵は、皆命を捨て、戦ひ、勇名を轟かしたものが少くありませんでした。敵が上陸しようとするれば、石壘に據つて力限り防いで、どうしても上陸させません。中には石壘の陰にかくれてゐるのは卑怯だと云つて、わざ／＼石壘の外側、僅かの砂濱を利用して陣屋を構へたものもありました。

草野次郎経長は、夜襲して戦艦一隻を焼き、二十一人を斬つて歸りました。これには敵も大に恐れて、それから以後は各艦を鐵の鎖でつなぎ合せ、一隻づつ別々にならないやうにして嚴重に警戒しました。なにしろ敵の軍艦は大きいので、わが小

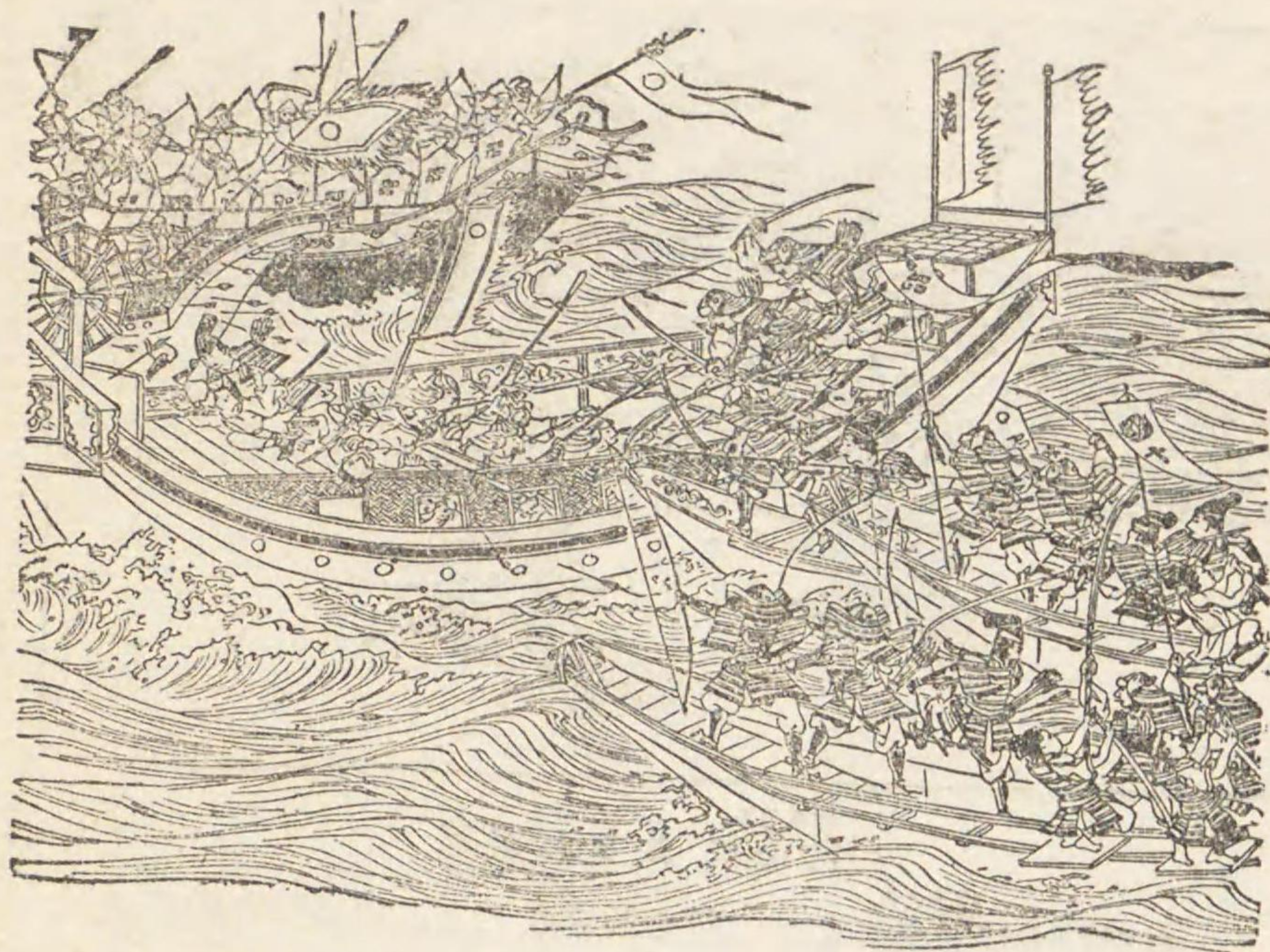


防壘によるわが軍

わが將士は防壘によつて敵を防ぎました。右の端に居るのが菊池次郎武房です。武房は奮戦して賊の大將を斃した勇士で、その子孫は長く朝廷のために盡しました。

兵船では到底寄りつけないので、随分海戦には困られました。

伊豫の人に河野六郎通有といふものがありました。郷里を出發する時に三島神社に祈つて、「十年間待つても敵が來なかつたら、必ず海を渡つて攻め撃ちます」と申しましたが、博多に來てから已に八年、やつと賊が來たのですから大に喜び勇み、小舟に乗つて敵艦に迫り大に奮戦しました。敵が盛に矢を放ちますので、通有も肩に負傷して弓をひくことが出來なくなりま



敵艦に躍り込む

わが將兵は小舟に乗つて敵艦に乗りつけ、刀を抜いて躍り込み縦横無盡に斬りまくつてゐます。今河野通有が敵の大將を組み敷いて捕虜にするところです。

した。そこで刀を揮つて敵艦に迫りましたが、彼の軍艦は大きいので容易に乗り移ることが出来ません。そこでわが舟の帆檣を倒し、それを梯子として敵艦に躍り込み、數十人の賊を斬つた上、大將らしいものを捕へて歸りました。

五日から十三日まで、毎日の戦に多少の勝ち負けもありましたが、賊は

どうしても上陸することが出来ず、わが軍の度々の奇襲には困りぬいてゐました。元來六月の十五日までには江南軍が来る豫定で、壹岐で出會はうといふ約束でしたのに、もうこんなにして博多に来て、一週間も戦多てゐるのに江南軍が来ませんか、東路軍の大將洪茶丘等は大に心配して、最早兵を纏めて一旦歸國しようといふ相談になつてゐました。

そこへ漸くにして范文虎の率ゐる江南軍がやつて来ました。兵十萬、船三千五百隻、残島から志賀島あたりはまるで、船ばかりで海の水さへ見えぬほどになりました。そこでわが軍も更に勇氣を揮つて大に戦ひ、度々賊船に躍り込んで斬りまくりますので、賊も大に恐れて一時肥前の鷹島の方に引きました。

こゝで伊萬里灣にでも入り込んだら、或は上陸されたかも知れませんが、賊はあつたりの地形をよく知りませんし、山の影が水に映るのを見て、暗礁があるかも知れないと恐れて、灣内に入ることも出来ないで、沖の方に漂つてゐました。そこへ又しても神風が吹いて来たのであります。

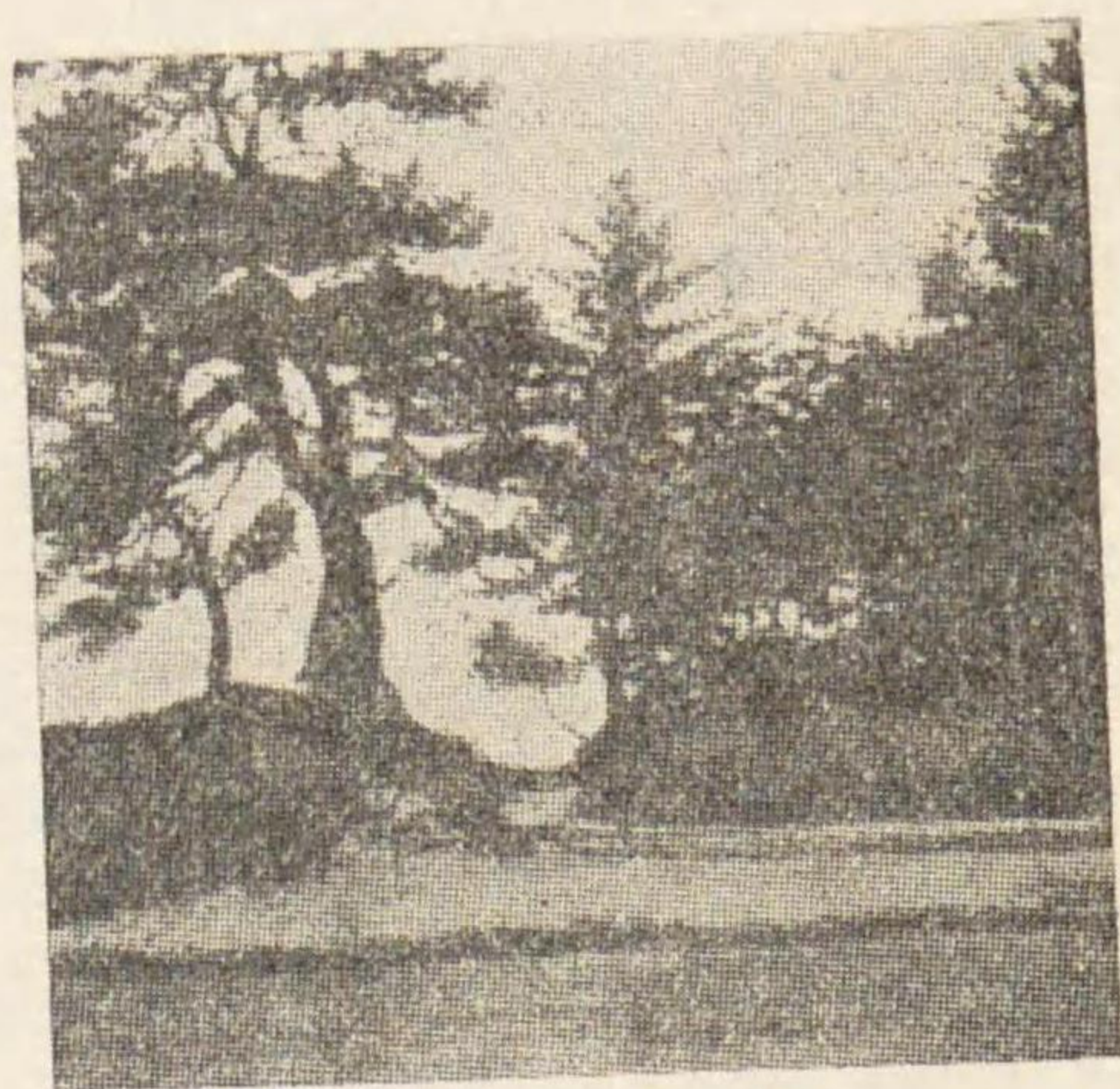
僅かに歸る三人

海は死體に覆はれて

あゝ神風、ありがたい神風、不思議な神風、それはほんとに人間の智慧でははかり知ることの出来ないものです。わが國家の危いといふ時、必ず起つて國難を救ふのがこの神風です。日露戦争の日本海大海戦の時にも「天氣晴朗なれども浪高し」と云はれたあれもやはり神風でした。文永の役にも神風が敵艦を惱まし、又この弘安の役にも神風が猛烈に吹いて吹いて吹きまくつて、徹底的に敵艦を叩きつけたのであります。

恰度それは七月三十日のことでした。夜半から俄かに起つた暴風、それは今で云へば南洋あたりから進んで来た颱風であつたのでせう。そして、その颱風の眼、低氣壓の中心が對馬海峡さしてやつて来たのであります。翌日に至つて益々甚しく荒れ狂ひ、猛烈な東風は雨を伴つて、玄海灘は怒濤天を蹴るといふ有様、四千五

百余艘の敵艦は、沖に出たものは吹き流されて行方がわからなくなり、岸に寄つたものは岩かどに打ちつけられて無残に碎かれ、お互に離れまいと繋ぎ合つた船は、船と船とが叩き合ひ、かち合つて碎けては沈みました。



古塚 志賀島の志賀湾にあり。わが軍の斬つた蒙古人の死體を埋めて祭つてやつたところです。

かくて元帥アラチムルを始めとして溺れ死ぬものその數を知らず、死體は海を覆ふて、遠方から見れば島かと疑はれ、潮の満干につれて海岸に押し寄せ流れ込む死體で伊萬里灣や唐津灣のあたりは全く塞がれてしまひました。それでもどうかにか生き残つた賊兵が

數千人、鷹島に集つて壊れ残りの船七八艘を修繕して、これから逃げ歸らうとするところを、少貳景資が見つけましたからゆるしませぬ。すぐに兵船數百を出して襲撃し、嵐のために散々に叩きのめされて、疲れ果ておびえ切つてゐる賊兵を、攻め

かけ攻めかけ射倒し斬りまくり、山に這ひ登り木のかげにかくれ、助けて呉れと手を合はすもの千人ばかりを生け捕りにし、博多に連れて来て那珂川のほとりで悉く首を斬つて落しましたので、那珂川の水は血のために赤く染つて流れたといふことです。そしてその死體を悉く今津の高麗寺に埋めました。

かくて十四萬の大軍はほんとにみなごろしになつたのです。生きて歸つたものはたつた三人だつたと云はれてゐます。ほんとに日露戦争の日本海海戦にも似て、世界の歴史に全く例の無い大勝利でした。

賊の歸つたものが三人だといふことは、支那の古い書物の元史といふのに書いてあります。ところが朝鮮の東國通鑑といふ書物には「高麗軍一萬の中歸らないものが七千、元軍の歸らないもの十萬」と書いてありますから、元軍が二三萬、高麗軍が三千位は歸つたのかも知れません。その頃出来た日本の書物にも、歸つたものは五分の一足らずだとありますから、やはり二三萬は歸つたものと思はれます。總大將の范文虎も生きて歸りましたし、平戸島に逃げ込んでゐた四千人も、蒙古の將張禧に助けられて高麗へ歸つたといふことです。ところで鷹島に逃げてゐた數千人が我が軍に襲はれて多く戦死し、捕虜となつたもの一千人でしたが、その中高麗兵は先きに我が民に對して殘虐を極めたといふので、全部那珂川で斬られたのです。その中に南宋の宋といふ國の兵だけはゆるされて奴隸とされました。ところがこの奴隸となつたものゝ中、于闐・莫青・吳萬吾といふ三人が、隙を見て逃げ歸つたといふことです。十數萬の中から三人だけ歸つたといふのはこの話と混同したのかと思はれます。

不征國日本

浪靜まつてのどかな春

文永・弘安の二度の戦争は、わが國にとつては實に歴史はじまつて以來の大事件でありましたが、幸にして執權は剛膽なる時宗であつた上に、國民上下一致團結し、公卿も武士も、北條氏を怨むものも、何も知らない田舎の百姓も、みんな一つ心になりましたから、遂にわが國土を侵されることなく、國威を充分に發揚することが出来たのであります。殊に泰時や時頼がよい政治をして、税を安くして人民を富ませてゐましたので、これほどの大戦争もしとげることが出来たのであります。

併し幕府としては随分澤山なお金を使ひました。神社やお寺への祈禱料でも大したものですが、有功の將士に與へた恩賞も莫大なものでした。そして戦争には勝つても敵の土地を占領したり、品物を分捕つたりしたのでありませんから、凡ての費

用は皆幕府の方から出す許でした。これは幕府の衰へる一つの原因となりました。それに元の國からは又何時攻めて来るかわからないので、戦争の用意は一日も怠ることが出来ませんでした。九州探題の外に中國探題といふ役を置いて、西海の防備をますます嚴重にさせました。

元の國では范文虎が敗れて歸りますと、フビライは大に怒つて更に兵を出すやうに命じましたが、臣下のものが「今日日本は元氣が一ぱいですからもう少し様子を見てゐて、少し疲れた頃に急に攻めたら、必ず一氣に降参させることが出来ます」と云ひましたので、それではといふので一應出征を中止しましたが、併し準備は一日も怠らず、十月には高麗・金州あたりの防備を嚴重にし、翌年十月には高麗に命じて軍艦三千艘を作らせ、牢屋に入れてあつた罪人を悉くゆるして日本征伐の軍勢に加へたりしました。高麗でも日本軍が攻めて來はしないかと恐れ、使を元の國に遣して日本征伐をすゝめました。

弘安六年正月には、元の方でもいよく出征の準備が出来上り、兵糧や武器も山

と積まれましたが、そのうちに南支那方面に内亂が起つたので、暫く出征をのぼしてゐました。そこへ如智といふ坊さんがあつて、フビライに向つて「今兵を出したところで澤山の人を殺すことになりすから、一つ私が行つて説いてやりませう。元の國の大きく強いことを知らせたら、いくら日本だつて無益な戦争なんかしないで、屹度素直に降参するに違ひありません」と云ひました。

そこでフビライは如智に國書を持たせて日本に遣はしました。ところが如智の乗つた船は暴風に遇つて遠方に流され、八ヶ月もかゝつてとうたう日本に來ることが出来ないうで歸つて行きました。そしてその翌年にもう一度船を出しましたが、又途中から引き返しました。依てフビライは更に日本征伐の命を下し、大に水夫を募集し艦船を用意し、弘安八年十月には征東行省といふ役所を置いて、明年三月を出征の期と定めました。併し又フビライを諫めるものがあつたので中止しました。

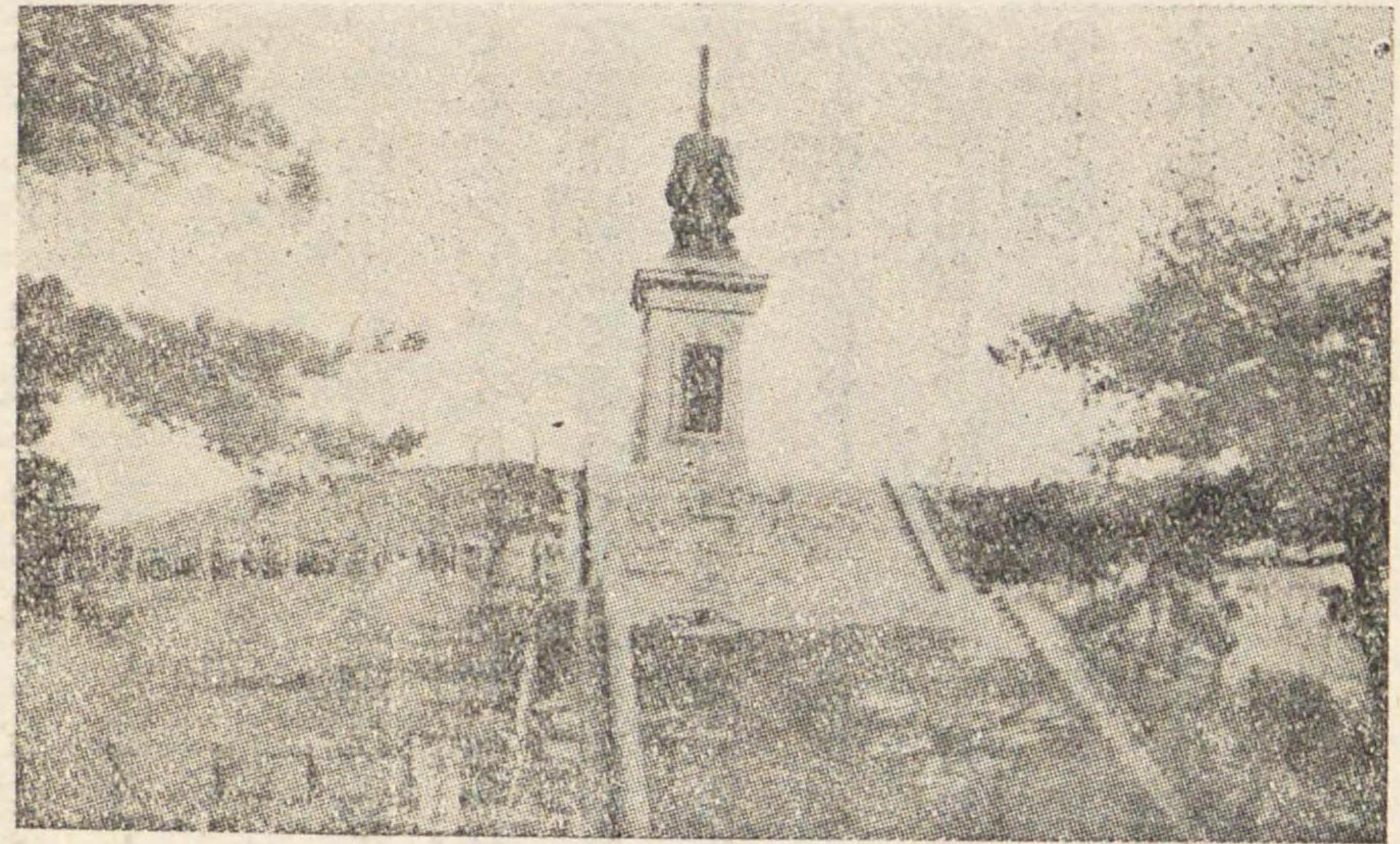
それから二年あまりして伏見天皇の正應元年二月、フビライは又日本を攻めようと思つて、高麗王に軍隊や兵糧の用意を命じました。それから五年たつて高麗王は

本を不征國と定め、決してこれを撃つことのない様に子孫に言ひ傳へさせました。かうして支那が日本を征服しようといふ志は永久に無駄となり、わが國の獨立國たる體面はいよく確實に保たれて來たのであります。

龜山天皇御製

四方の海浪おさまりてのどかなる

わが日の本に春は來にけり



龜山上皇の御銅像

畏くも身を以て國難に代りたいと祈らせ給ふた上皇の御銅像、博多の海岸千代の松原の古戰場に、永久に國の鎮めとして立たせられてゐます。

が出來ませんでした。そして元が滅んで明の國が起りますと、明の皇帝の太祖は日

使をわが國に遣はしましたが、鎌倉幕府はこれを牢屋に入れて歸しませんでした。ところがそれから二年たつてフビライは死にましたので、日本征伐はとうたう駄目になつてしまひました。

その後もう一度僧の一山といふものが元の國書を持つて來ましたが、やはり無禮なことを書いてゐましたので、時の執權北條貞時は一山を捕へて伊豆に流しました。併し元は遂にわが國を攻めること

鎌倉時代の文化

武士道の華

箸を投げすて一目散

頼朝が質素儉約を重んじ武藝を奨励したことは前にも述べました。それが鎌倉武士の風俗となつて、平素から常に戦時の用意をする。即ち治に居て亂を忘れないといふことが、武士道といふものゝ根本になつたのであります。天下は泰平でも武藝はしつかり練つて置く、そして儉約を守つて驕りに耽らないやうにして置いて、一朝事ある時は何物も打ちやつて置いてすぐ戦場へ駆けつける、かういふことが武士の最も尙ぶべきことゝなつてゐました。

それですから、鎌倉には、別に兵隊を澤山入れてある兵舎などはありませんでし

た。何か事が起つた時には、飛脚を立て、呼び出しさへすれば即座に何千何萬と集めるのです。「スワ鎌倉」といふ言葉が今でも残つてゐますが、その頃の武士が云ひはじめた言葉でせう。

それについて面白い話があります。二代將軍頼家の時のこと、越後の城介平資盛が叛いたので、そのことが鎌倉へ知れますと、「さア誰を大將にやつたらよからう」といふ評議になつて、北條時政や義時、大江廣元などが相談の結果佐々木盛綱がよからうといふことになりました。盛綱は嘗て源範頼に従つて平家追討の軍に加はり、備前の海岸で藤戸渡といふ海峡を馬で渡つたといふ有名な大將ですが、この時はもう年をとつて坊さんとなり、わが領地の上州磯部(今の群馬縣磯部温泉)に引つ込んでぶら／＼遊んで居ました。

で、或朝のこと、盛綱は起きたまゝで門の外に出て散歩してゐますと、そこへ鎌倉からの急飛脚が來ました。何のことかと思つて手紙を受取つて見ると「越後の城介が叛いたから早速征伐に出掛けるやうに」とありました。これを見た盛綱はすぐ

門内(もんない)にかけ込み、門(もん)の脇(わき)の馬部屋(うまべや)に入(はい)つて馬(うま)を引き出(ひきだ)し、そのまゝ打乗(うちま)つて只(ただ)一騎(いき)一目散(もくさん)に駆(か)け出(だ)しました。

驚(おどろ)いたのは家來(けらい)共(ども)です。これはどうしたことから、早速(さつそく)走り出(で)て馬(うま)の轡(くつわ)をとらへて、「まアもう少しお待(まち)ち下さい」と申(まを)しますと、盛綱(もりつな)「いや一刻(ひととき)も愚圖(ぐず)くしては居(を)れない。昔(むかし)平(たいら)將門(しやうもん)が叛(そむ)いた時(とき)に、平(たいら)忠文(ちゆうぶん)が勅命(ちよくめい)を受けて、追討(つひたう)を仰(あふ)せ付けられた。その勅使(ちやくし)の來(き)た時(とき)に忠文(ちゆうぶん)は食中(しょくちゆう)であつたが、箸(はし)を投(な)げすて、すぐ御所(ごしょ)に罷(ま)り出(い)で、そのまゝ家(いへ)にも歸(かへ)らないで關東(くわんと)へ赴(おもむ)いたといふこと、これが勇士(ゆうし)の鑑(かたみ)といふもの、止(と)め立(た)て致(いた)しては武士(ぶし)の名折(なを)れとなるぞ」と云(い)ひ捨て、ピシヤリと馬(うま)に鞭(むち)をあて、後(あと)をも見(み)ずに走(はし)らせました。

そこで家來(けらい)どもも「それ後(おく)れるな」とばかり、大急(おほいそ)ぎで仕度(したく)をしてあとを追(お)つかけましたので、三日(かみ)目に越後(えちご)の國(くに)に入(はい)つて城介(じやうのすけ)の居城(きじやう)の鷄冠山(とさかやま)(今の高田市附近)の麓(ふもと)まで來(き)た時(とき)には、已(すで)に數千騎(すせんき)の兵(へい)になつて居(ゐ)たといふことです。それで早速(さつそく)攻撃(こうげき)にかゝつて間(ま)もなく城(しろ)を陥(おとし)ました。

かうしたことは今頃(いまごろ)の兵隊(へいたい)でも同(おな)じことです。今日(こんにち)のわが軍隊(ぐんたい)は全(ま)つた鎌倉時代(かまくらじだい)から發達(はつたつ)した武士道(ぶしだう)を受け繼(つ)いでゐるので、軍隊(ぐんたい)は在郷軍人(ざいがうぐんじん)が中心(ちゆうしん)で、兵營(へいえい)に居(ゐ)る現役兵(げんえきへい)はほんの教育中(けういくちゆう)の兵隊(へいたい)といふだけのこと、スワ戦争(せんさう)といふ時(とき)は召集令狀(せふしふれいじやう)を出(だ)して在郷軍人(ざいがうぐんじん)を集(あつ)めるのです。そこで令狀(れいじやう)を受取(うけと)つたものは、寢(ね)て居(ゐ)ても食中(しょくちゆう)をして居(ゐ)ても、又(また)は仕事(しごと)の最中(さいちゆう)でも、すぐそのまゝ駆(か)けつけるといふことになつて居(ゐ)ます。病人(びやうにん)の家族(かぞく)を打(うち)すて、出(で)たとか、死(し)んだ親(おや)の葬式(さうしき)もしないで出(で)たとか、自分(じぶん)が病氣(びやうき)であるのに擔架(たんか)に乗(の)つて出(で)て行(い)つたなどと、美(うつく)しい話(はなし)が度々(たびたび)新聞(しんぶん)に出(で)てゐます。

優美(いうび)な歌(うた)、雄壯(ゆうさう)な歌(うた)

ぬれた衣(ころも)をほし給(たま)ふ

優美(いうび)な歌(うた)・雄壯(ゆうさう)な歌(うた)

武士(ぶし)はこんなにして尙武(しやうぶ)一點張(てんぱ)りでしたから、學問(がくもん)のあるものは非常(ひじやう)に少(すく)なく、文(ぶん)學(がく)と云(い)へばやはり京都(きやうと)の公卿(こうけい)が中心(ちゆうしん)でありました。殊(こと)に和歌(わか)の如(ごと)きは藤原俊成(ふぢはらとしなり)その

子の定家、僧の西行などの名手が澤山あつて、言葉の美しくなだらかで風雅なことは前後に並ぶものが無いと云はれてゐます。併し武士の中でも實朝などは和歌が非常に上手で、且武士であるだけにその歌風は非常に雄壯で、ずつと古い昔の萬葉集の歌によく似てゐます。

山はさけ海はあせなん世なりとも

君にふた心われあらめやも

時により過ぐれば民の歎きなり

八大龍王雨やめたまへ

ものゝふの矢並つくるふ小手の上に

霰たばしる那須の篠原

これ等は實朝の歌の中でも殊に名高いもので、山はさけの歌は後鳥羽上皇に上つて忠誠を誓つたもの、時によりの歌は大雨が續いて洪水で人民が難儀をした建暦元年七月に神に祈つた歌であります。



西行の諸國行脚

西行が諸國を行脚して、或日の夕暮れに吉野山にさしかゝつた時の有様を描いたものです。

その頃出來た歌集に百人一首といふのがあります。藤原定家の撰したもので、天智天皇以下百人の歌一首づつを集めたのです。定家が小倉山の山莊で撰んだといふので、小倉百人一首と云ひ、カルタに作つて遊ぶことが今も流行してゐますから、誰でもよく知つてゐるのであります。その第一首が天智天皇の「わが衣手は露にぬれつゝ」であり、第二首は持統天皇の「衣ほすてふ天のかぐ山」でありますから「ぬれた御衣、次の御歌でほし給ふ」などと、しやれた人があります。

西行は有名な坊さんでありますが、元來は佐藤憲清と云つて後鳥羽上皇に仕へた北面の武士でありました。勇敢で武藝にも達して居ましたが、仲のよかつた友達が頓死してから急に世をはかなみ、妻子をすて、僧となり西行と名づけました。その時二十三歳でしたが、それから日本中を歩き廻つて、たゞ歌を詠んでは日を送り、七十二歳で亡くなりました。嘗て和歌をつくつて

願はくば花の下にて春死なん

その二月の望月のころ

と云ひましたが、ほんとにその歌の通りに二月の十六日に死にました。

文學と美術

凡てが雄壯活潑なもの

文章は國文が非常に發達した代りに、漢文は殆どすたれてしまひました。僧侶の中には支那に留學して詩や文章を習つたものもありますけれど、立派な漢文の出來

る人は殆どありませんでした。

ところで國文は平安時代の源氏物語や枕草子とは違つて、多くの漢語や佛語を取り入れ、その文の内容も、たゞ事柄をありのままに記すだけでなく、これを佛敎や道德の上から批評したり判断したりする様になりました。又保元物語、平治物語・源平盛衰記・平家物語のやうな歴史物語類といふものが澤山出來ました。それから日記では阿佛尼の十六夜日記が名高く、隨筆では僧兼好の徒然草が殊に有名であります。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯はす。奢れるもの久しからず、唯春の夜の夢の如し。猛き人も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝を問ふらうに、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆舊主先皇の政にも従はず、樂みを極め諫めをも思ひ入れず、天下の亂れんことをも悟らずして、民間の憂ふる所をも知らざりしかば、久しからずして亡じにし者どもなり。近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信賴、是れ等は奢れることも猛き心も、皆とりふくなりしかども、間近くは、六波羅の入道、前の太政大臣平朝臣清盛公と申し、人の有様、傳へ承はるこそ心も詞も及ばれぬ。(平家物語)

世の中が質素でありましたから、美術工藝はあまり發達しませんでした。たゞ繪

畫や彫刻には特に雄健豪放のものが多く、運慶の如きは最も有名でありました。鎌倉の大佛の如きもこの時代の一大傑作と云はれてゐます。それから繪の中には繪巻物類と云つて、戦争などを寫した勇ましい繪が流行しました。文章に物語類があつたやうにその物語を繪にしたものも、當時の人たちにも、大層喜ばれたからであります。それと



運慶の作の仁王の像
これは運慶の作つた仁王の像です。東大寺の南大門に安置してあつて、當時の剛健な氣のよくあらはれた名作であります。

同時に又甲冑を作つたり刀劍を鍛へたりすることも發達しました。岡崎正宗などもこの時代の名工で、ために日本刀のよく切れるといふ評判は遠く宋の國までも響き渡つたのであります。

來世を重んずる宗教

念佛すれば必ず極樂へ

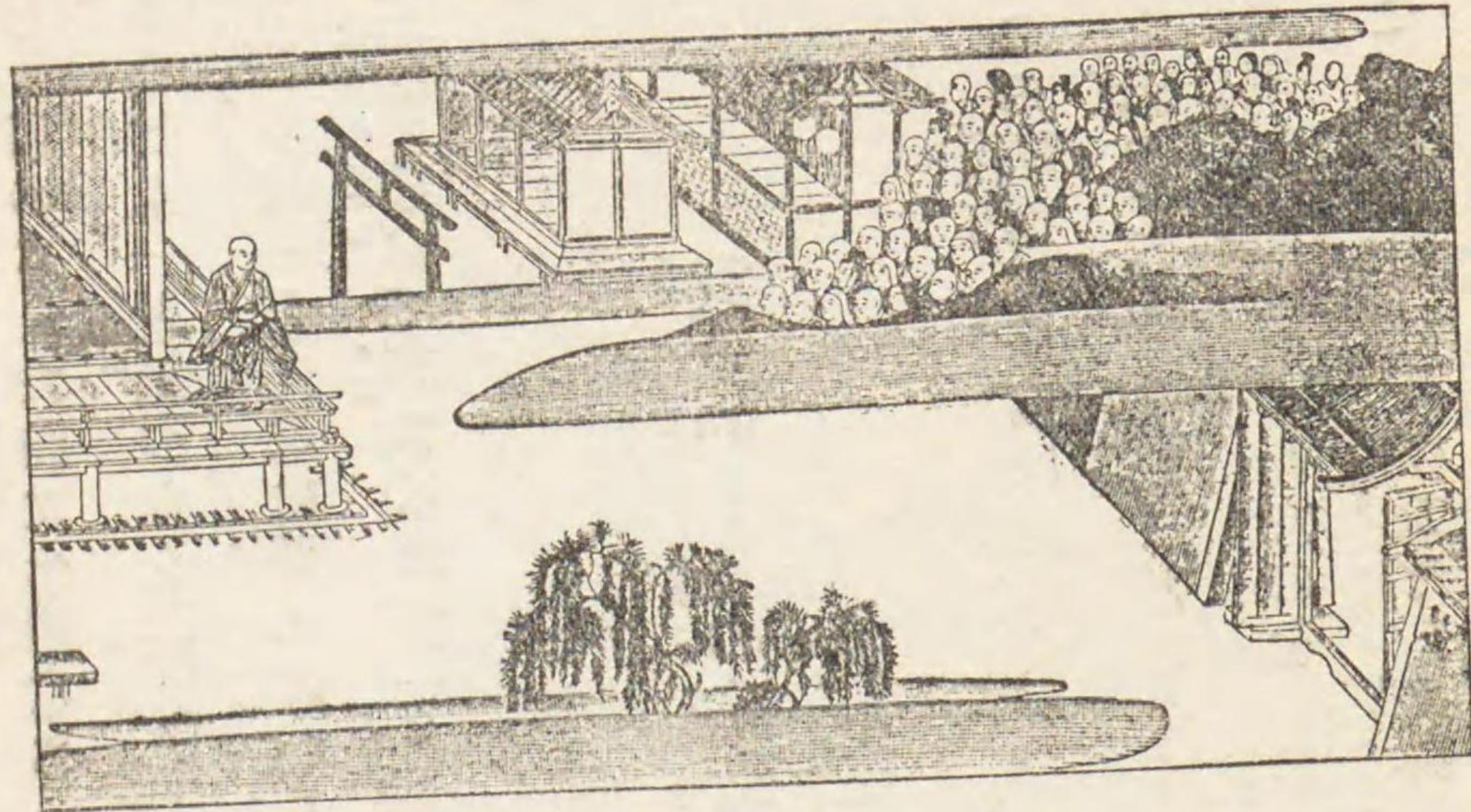
平安時代に最澄・空海の二高僧によつて盛になつた天台・眞言の二宗は、現世教と云つて現世に於ける利益幸福を求めるところを主とし、天災・地變・戦争・疾病などのある度毎に、僧侶をして祈禱せしめるのが常でした。従つて坊さんと云へば祈禱が仕事となり、それがもとで僧兵なども出來て、世の中に大害を流したことは、已に本書の前巻でも述べました。

ところが昨日まで榮華を誇つた平氏の一族が、一朝にして西海の波に沈んでしまつたのを見ては、現世の幸福は頼むに足らない。どうしても死んだ後の世の幸福を願はねばならぬと考へるやうになつて、こゝに來世教といふものが新しく起つたのであります。

美作(今の岡山縣)に源空といふ坊さんがありました。十五歳の時比叡山に上つて僧

となり、三年の間に天台を習ひ、更に黒谷に下つて眞言を學び、奈良に行つて八宗の教義を悉く修め、こゝに淨土宗といふ新しい宗旨を開き、「現世は假の世で、現世の名譽や幸福は續くものでない。死んだ後の世こそ永久の世であるから、來世の利益幸福を求めねばならぬ。それには阿彌陀佛の慈悲によつて、來世の淨土に往生すべきである」と説きましたので、信者が日増しに多くなりましたが、南都北嶺の僧侶たちから大に排斥され、とうとう土佐に流されました。法然上人といふのはこの人のことです。

源空の門弟の親鸞といふ坊さんは京都の人です。子供の時に父母を失つたので九歳の時に出家し、比叡山で天台を學び、奈良に行つて三論、法相等を學び、後源空の門弟となり、源空が流された時には親鸞も亦越後に流されました。後ゆるされて東國に赴き、淨土眞宗を開いてこれを諸方に弘めました。この宗旨は又一向宗とも云ひ、たゞ阿彌陀佛を信心して一向に念佛を申せば、それで必ず淨土に往生が出來ると教へ、僧侶と雖も肉食妻帯差支ないと云つて、自分も妻を娶り肉を喰ひました



親鸞上人の説教

親鸞上人が説教をせられますと、多くの僧侶や公卿や女までが交つて聽いてゐます。その教へは非常にやさしくてよくわかりますので、信者が日々殖えて行きました。

から、誰でも「これは信心し易い」といふので非常に盛になりました。今でもこの宗旨は大そう廣く各地に行はれてゐます。

天台宗や眞言宗は凡て理窟が高尙で、餘程學問のある人でないと中々信仰が出來ませんでした。淨土宗や眞宗は大そう平易で、どんなに學問の無い人にも手取り早く教義が呑み込めるので、この時代の世の中には、最もよく適してゐたわけです。或人が法然上人に「念佛を唱へてゐる時に眠くなつて困りますが、どうしたらよいでせうか」と尋ねました

ら「目のさめた時に念佛なさい」と答へました。又、「どうも、まだよく信心が出來ません」と云つたら「疑ひ乍らも念佛すれば往生する」と答へたといふことです。又親鸞は「どんなに罪の深いものでも、心配することはいらぬ。みんな如来様の方で罪を償つて下さるのだ」と教へましたので、これほどやさしい宗教は無いのであります。

武士的氣風の宗教

太平洋の怒濤の音

この頃僧の榮西は臨濟宗を、道元は曹洞宗を弘めました。この二つはどちらも禪宗と云つて、淨土宗などのやうに我が國で新に出來た宗旨ではありません。支那の宋の國に行はれてゐたのを、習つて歸つて弘めたのであります。

この宗旨は「不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛」と云つて、文字には書きあらはさないで、心から心に傳へるといふ宗旨ですから、文字をあまり知らな

ところがありました。



榮西宋を發す

僧の榮西は備中の人、支那に渡つて天台山上に登り萬年寺の虛菴禪師について臨濟宗を學び、歸つて博多に聖福寺を開きその宗旨を廣めました。これは支那即ち宋の國を出發して正に歸國しようとするところです。

い鎌倉武士には最も適した宗旨でありました。

文字で説かず言葉で説明せず、理窟

を云はずに直接體驗させようといふのです。例へば火は熱いとか、水は冷たいとかいふことを、解釋したり説明したりしないで、たゞ黙つて火を握らせ水を呑ませてその熱いこと冷たいことを了解させようといふので、大層武士の氣風に適合した



日蓮辻説法

日蓮が鎌倉の町の辻に立つて、通行人を集めて説教してゐるところです。「法華經でなくては世の中は救へぬ、他宗を信心するから外國から攻められるのだ」と云つて、熱烈な説法をしてゐます。

比べると全く正反對であります。京都に生れて東山の姿をながめ、加茂川の流れのさゝやきを聞いて成長した親鸞が、女のやうに優しくおとなしかつたのは無理もありませぬし、日蓮宗が勢よく太鼓をどんくと叩くのは、日蓮の故郷の太平洋の浪の音から來たものかも知れません。

龜山天皇の時、日蓮は

その上鎌倉の幕府が禪宗を保護した別の理由が一つあります。それはこれ迄の天台宗や真言宗は京都の公卿と密接な関係がありますので、そんな宗旨が鎌倉に盛になることは色々便利のわるい點もありました。そこで京都の公卿に關係の無いやうな宗旨を弘めることの必要を感じました。そして時頼は建長寺を、時宗は圓覺寺を建て、宋の國から直接僧侶を招いて、京都とは何の關係もなく、全く別途の勢力を打ち立てることとしたのであります。

これと前後して今一つの新しい宗教が起りました。それは日蓮宗であります。日蓮は安房（今の千葉縣小湊）に生れ、岸打つ太平洋の怒濤の音に育てられ、性質極めて豪放で痛烈でありました。法華經の功德をとへ、他の凡ての宗旨は悉く駄目だと罵り。「念佛無間、禪天魔、真言亡國、律國賊」と絶叫しました。念佛即ち淨土宗を信ずるものは無間地獄に落ちるべく、禪宗は天魔であり、真言は國を亡ぼすもの、律宗の信者は國賊だといふのですから、随分ひどい悪口と云はねばなりません。これを親鸞が「他宗の悪口を云ふものはわが親鸞の弟子では無い」と教へ戒めたのに

「立正安國論」といふ書物を書いて幕府に呈出しました。その中には極力淨土宗の悪口を云つて「早くこれを禁止しなければ諸種の災害悉く起り、他國から攻められるやうなことが屹度あるだらう」と述べました。幕府では衆人を惑はすものだといふので日蓮を伊豆に流しました。

ところが蒙古が襲来しましたので、日蓮はそれ見たことかと得意になり、「法華經の功德によらねば國難は救へぬ」と述べましたが、幕府は更に日蓮を佐渡に流しました。そして三年の後、赦されて鎌倉に歸り、後甲斐の身延山に久遠寺を建てました。日蓮が元寇を豫言したといふので、今も福岡市の東公園にその銅像があり、龜山天皇の御銅像と共に千代の松原の梢の上高く聳えてゐるのであります。(九六頁を見よ) 日蓮が死んだのは弘安五年の十月でした。

後醍醐天皇

北條氏の横暴

無闇に朝廷を抑へ奉る

前に承久の變があつてから以來、幕府は如何にもして朝廷を抑へ奉る様にと工夫をこらしました。京都に六波羅探題といふものを置き、北條氏の一族中最も重要な人をこれに任じたのも、表面は西國を治め京都を守護するといふことでしたけれど、その實は朝廷の動靜を探り、皇室を抑へ奉り公卿を壓迫するためでした。従つて代々の天皇は、どうにかして幕府の政權を取り上げたいと思召し、公卿の人たちも亦常に幕府の專横を憤つてゐましたけれども、全く手も足も出なかつたのであります。

北條氏は承久の變に御關係の無かつた後堀河天皇をお立て申してから、常に皇位の御事に口を入れるやうになりました。後嵯峨天皇の次には後深草・龜山の二天皇が、御兄弟を以て相ついでお立ちになりましたが、後嵯峨上皇は龜山天皇の賢明にましますのを愛せられて、その御子孫をして永く皇位を受けしめようと思召しました。その御子の後宇多天皇の後には、北條氏は後深草天皇の御子伏見天皇をお立て申しました。そんなことで、後深草天皇と龜山天皇との御子孫が、かはるゝ御位におつきになるといふやうなことになるりましたが、それも北條氏のはからひであつたのです。

かくて龜山天皇の御子孫は、後醍醐天皇に至つて遂に北條氏をお亡ぼしになりましたが、後深草天皇の御子孫は常に北條氏に親まれ、北條氏滅亡の後には足利氏の奉ずる所となつて、遂には吉野朝五十餘年間の混亂を來すやうなことになるりました。一體天皇の御位を御つぎになる順序については、大寶令に明文があつて、第一に皇長子、皇長子がなくば皇孫、それも無ければ次子と云つたやうに、ちゃんと順序が

きまつてゐるのですが、兎角臣下のもの、権力の争ひなどから順序をたがへ、それがために色々の弊害が起つて、遂には天下の亂れるもともなつたのは歎はしいことでした。明治天皇が皇室典範を制定せられ、皇位繼承の順序をちゃんとお定めになつたのは、誠に國家萬代の慶福と云はねばなりません。

さて後醍醐天皇は、幼い時から極めておえらい方でありましたから、御祖父龜山天皇は深く御寵愛遊ばされ、北條氏を滅ぼすものは屹度この天皇であらうと、深くお心のうちに御期待遊ばされました。御父後宇多法皇も院中で政をとつておいでになりましたが、やがて政を天皇にお還しになりました。白河上皇の御時以來、久しく續いて居た院政といふものも一旦こゝで止むことになりました。そして天皇は記録所といふ役所をお開きになり、親しく政をお聴きになつたのであります。

朝廷の仁政

幕府は天下の人望を失ふ

とあるのは、後醍醐天皇の仰せられた御言葉と全く同じであります。後醍醐天皇はかうしてよい政治をなさいましたので、天下の人心が等しく御徳になつくやうになりました。然るにこの頃の北條氏と云つたら、全くお話にならない悪政で、頗る評判がわるかつたのであります。

後醍醐天皇は北畠親房・萬里小路宣房・吉田定房等の賢臣をお用ひになり、大いに政治をお改めになりました。この三人は常に力をあはせて、天皇をおたすけ申しました。



天皇 醍 後 皇 天 嗣 醍 後
これは後醍醐天皇の御肖像であります。傍の文字は天皇の御宸筆であります。

ところが元亨元年の夏に大變な旱がついて、稲は苗のまゝすつかり枯れてしまつて、田は赤土のまゝ干割れてしまつて、百姓は食物が無くて到る處に飢え死

にするものが澤山ありました。天皇は非常に御心痛あらせられて「朕が不徳ならば天は朕一人を罪せばよいのに、人民に何の咎があつて、かうも苦しめるのであらう

か」と仰せられ、毎朝の御食事を止めになつて貧民を救はしめられました。又金持ちがお米を買ひためて大儲けをしようとしますので、檢非違使に命じてこれを調べさせ、一定の價を定めて、これを賣り捌くやうに命令せられました。これは今頃の政府がやつてゐる米穀統制法とか、暴利取締令とかいふものと似たものであります。かうして人民を眞の子の如くお可愛がり遊ばしましたことは、歴代の天皇何れも同じ御事ながら、有り難い極みと申さねばなりません。

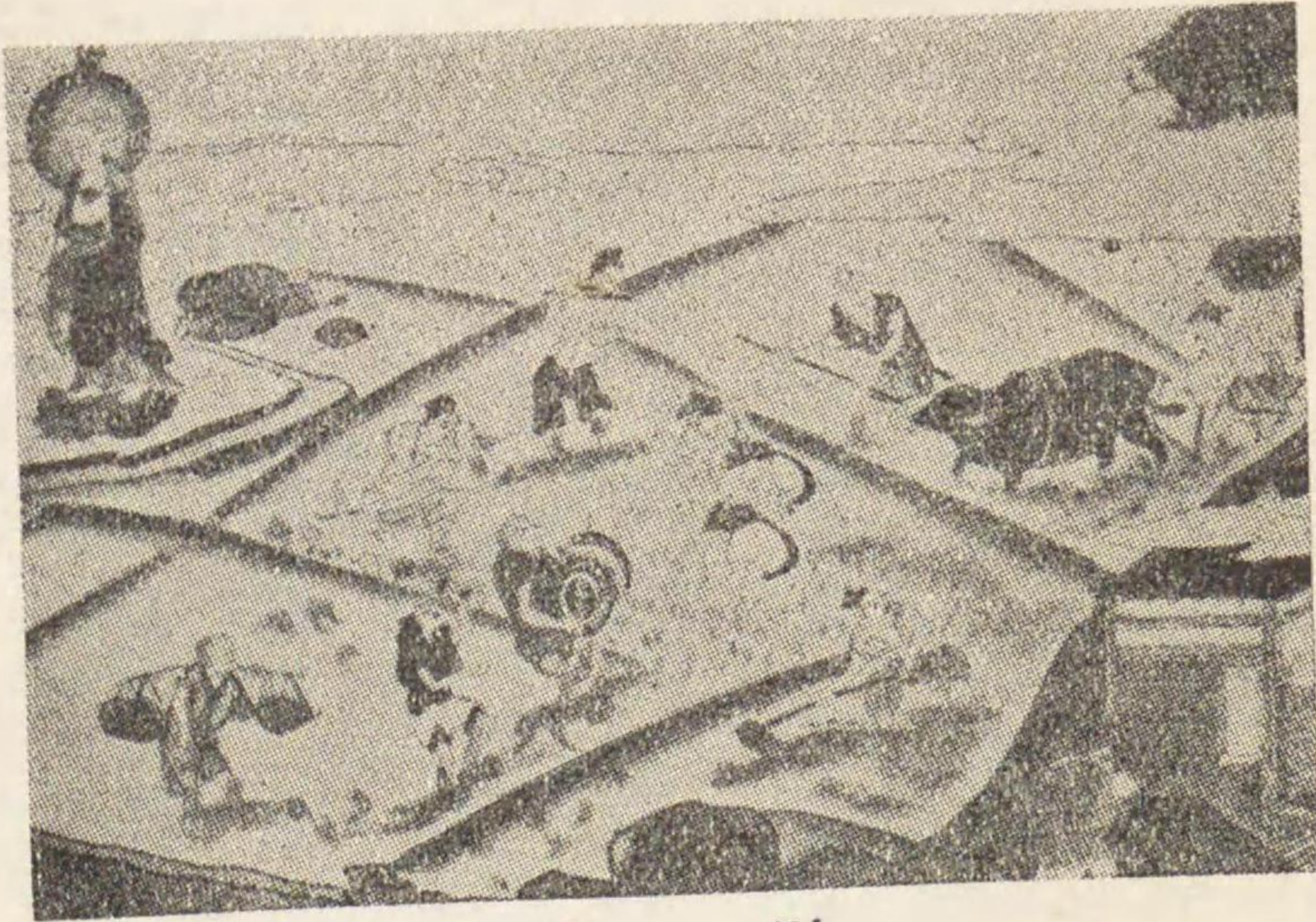
明治天皇の御製に
罪あらばわれをとがめよ天つ神

民はわが身の生みし子なれば

とあるのは、後醍醐天皇の仰せられた御言葉と全く同じであります。後醍醐天皇は

かうしてよい政治をなさいましたので、天下の人心が等しく御徳になつくやうになりました。然るにこの頃の北條氏と云つたら、全くお話にならない悪政で、頗る評判

或日高時は庭先で犬が噛み合つてゐるのを見て、「これは面白い」と云つてこれか



もとは田植の時に百姓を慰めるために歌を唄つて舞をま
つたものですが、後には田植の真似をして何時でもやる
やうになり、上下一般に行はれました。

高時はこの田樂が大そう好きで
朝に夕に舞はせては喜んでゐまし
た。そして一族・大名たちに一人
づつの田樂法師を預けて、競争で
その装束を飾らせましたので、皆
われ劣らじと金銀珠玉を以て飾り
ました。その費用だけでも中々大
變なものでした。

の音樂で、色々な樂器を鳴らし、歌をうたつて舞をまふのであります。その頃上下
一般に行はれて、これを専門にや
つて歩く田樂法師といふものがあ
りました。

高時は田樂が好きでありました。田樂と云つても豆腐やこんにやくを串にさして
味噌をつけたものとは違ひます。こゝに田樂といふのは鎌倉時代から流行した一種

田樂や犬の噛み合ひ

世にもいまくしい有様

その時の執權は北條高時でありました。高時は幼い時に腦の病氣にかゝつたため
頭が變になつてしまひましたが、總領に生れてゐますので十四歳の時執權職をつぎ
ました。併しその當分は舅にあたる安達時顯等が政をとつてゐましたので、別に
變つたこともなく天下は無事でしたが、長崎高資がこれに代つてから、自ら權をふ
るひ、盛に賄賂をとつたりしましたので、それ以來政治がひどく亂れ、武士の中に
北條氏に反いて兵を擧げるものが出来たりしましたが、これを征伐しても勝つこと
が出来ないといふ風で、朝廷と正反對に、次第に天下の人望を失つてしまつたので
あります。

ら犬の喧嘩が大そう好きになりました。それから諸國へ命令を出して犬を集めさせましたので、國々の大名は皆十匹、二十匹と飼ひ立て、は鎌倉へ送ります。そこでこれ等の犬には魚や鳥の肉を與へて御馳走せめにし、つなぐには金銀の鎖を用ひ、外出する時は輿に乗せました。百姓は忙がしい仕事を抛つておいて、この犬の輿を昇きに出なければなりませんし、武士と雖もこの輿に會つたら、どんなに急ぐ時でも馬から下りて跪いて敬禮しなければなりません。こんなわけで、飾の着物を着た不思議な犬が鎌倉中に充滿し、その數は四五千匹にも及んだといふことです。そして月に十二度の犬合せといふことがあります。高時が正面に座を構へると、一族・大名・御内・外様の人々は、左右にずらり座を連ね、下々のものは庭先に脚を屈して見物します。相撲のやうに東西から一匹づつ呼び出して噛み合ひさせることもあり、時には双方から一二百匹づつを出して、云はゞ團體競技といふかマシゲームといふか、兎に角數百匹の犬が噛み合ふ聲は、天を響かし地を動かすといふ有様で何とも云へない不思議な有様でした。

それでも執權に媚びるものは「武士が戦場で戦つてゐるやうだ」などと面白がつてゐましたが、心ある人たちは「さてもいまくしい事かな、まるで野獸が死屍を争つてゐるやうだ」と云つて眉をひそめました。これではいくら何と云つても北條氏が人望を失ふのは當然のことです。折角泰時や時頼の善政で得られた幕府の聲望も、高時に至つて全く臺なしになりました。これでは北條氏が滅亡するのも無理はありません。

落花の雪

哀れにも悲しき東下り

かくして北條氏が日に人望を失ふのを御覽になつた後醍醐天皇は、時こそ來れと潜かに王政回復の御謀をめぐらされました。その御相談に與かつた參議日野資朝は、柿色の衣を着、檜の笠を被つて修験者のやうな風をして、そつと東國に下つて勤王の士を求め、藏人日野俊基も、紀伊の温泉に行くと呼んで京都を出で大和路を

南へ下つて河内の國に入り、楠木正成などと密かに堅い約束をかはしました。

資朝に見出された勤王の志士、美濃の人士岐頼兼・多治見國長の兩人は、正中

元年九月、そつと京都に上つて四條のあたりに住み朝廷の討幕の御相談に與かつて

ゐましたが、ふとしたことからそれが幕府方の知る所となり、六波羅探題北條範貞

は俄に兵を發して二人の宿所を圍みました。二人は奮戦して遂に死にましたが、幕

府では更に資朝や俊基を執へて鎌倉に送り、遂に資朝を佐渡に流しました。これを

正中の變と云ひます。

かくて天皇の御計畫は、一旦失敗に終りましたけれど、もとよりそのまゝ御中止

になるわけはありません。しきりに謀をめぐらされましたが、天下の武士を集め

るといふことは中々容易でありませぬので、先づ僧兵の力を藉らうと思召し、皇子

護良親王を天台の座主とし、以て延暦寺の僧徒を味方とせられ、或は奈良に幸せら

れて春日神社に土地を寄附せられ、或は比叡山に行幸せられ、三井寺の焼けたのを

御覽になつて土地を寄附せられなどしました。

又皇后が御懷妊せられたといふので、僧の圓觀・文觀などを召して安産を祈らし

められました。これもその實は北條氏討滅の御祈禱だったので、月日が経

つても皇后の御産といふことはありませんでした。

そのうちに吉田定房が天皇の御謀をすつかり幕府に告げましたので、幕府では

大に驚き、直ちに日野俊基及び文觀・圓觀の二僧を捕へて鎌倉に護送しました。こ

の俊基が關東に送られた時のことを、太平記といふ書物に大變うまい文章で書いて

ありますから次に掲げませう。何度もくり返して讀んでごらん下さい。

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩り、紅葉の錦をきてかへる、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だに

も、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契り浅からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久し

くも住み馴れし、九重の都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀れなる。憂きをば

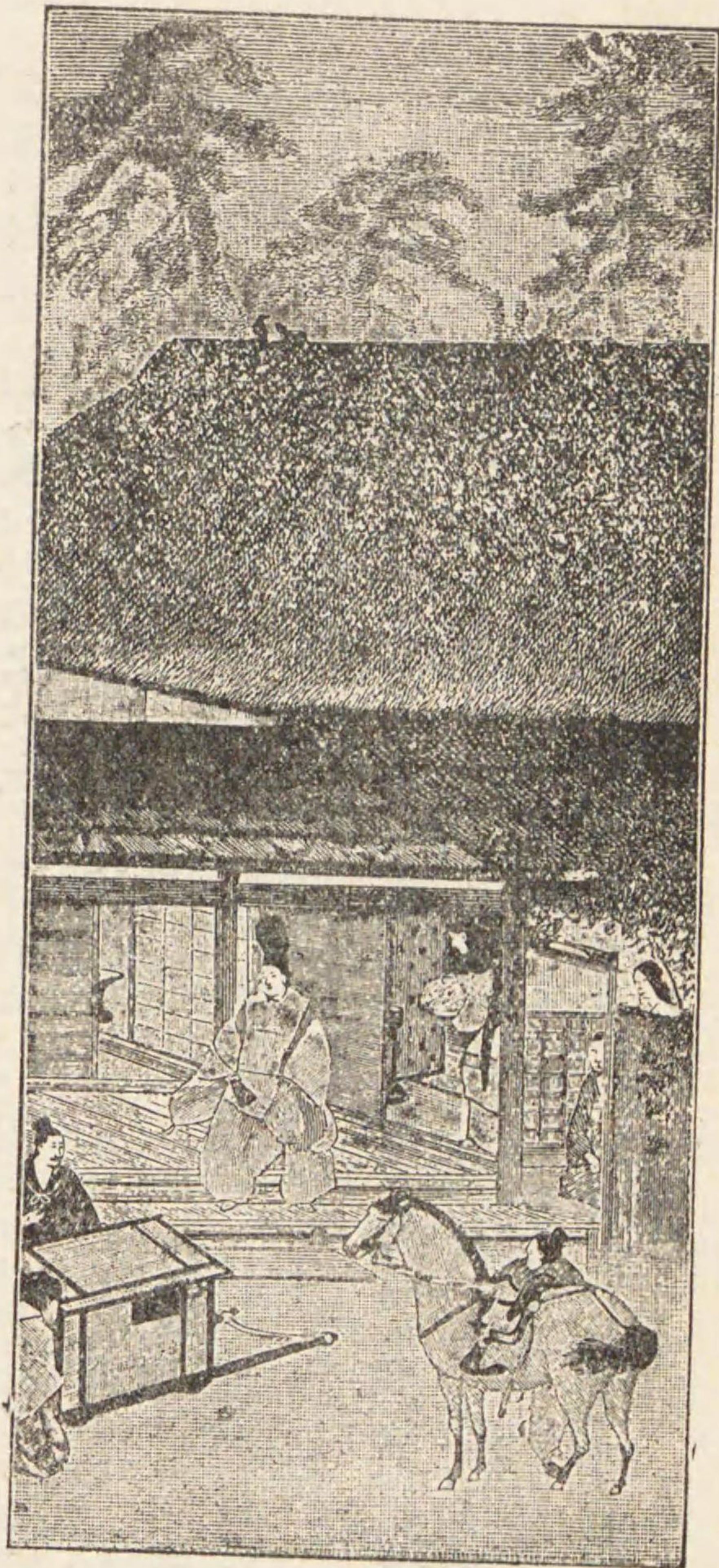
留めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行

く、身を浮き船の浮き沈み、駒もどろと踏みならず、勢多の長橋打ち渡り、行きかふ人に近江路や、世を

うねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり、時雨もいたく森山の、木下露に袖ぬれて、風に露散る篠原

や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山はありとても、泪に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間に、老蘇

の森の下草に、駒を止めて顧みる、古郷を雲や隔つらん。番場・醒井・柏原・不破の關屋は荒れはて、



池田の宿
日野俊基が鎌倉へ護送される途中、濱名湖の東方の池田の宿(今静岡縣池田町)についた時の有様です。今馬から下りて縁に上つてゐるのが俊基です。

猶もるものは秋の雨の、いつかわが身の尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、鹽干に今や鳴海湯、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕沙に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀れと夕暮の、晚鐘鳴れば今はとて、池田の宿につき給ふ。

どちらが屁理窟?

臣下としての道はいづれか

日野俊基が捕へられたので、天皇もいよく事が發覺したと思召し、先づ兵を發して六波羅を攻めようとして、北畠具行に命じ、詔を發して兵を諸國に召さしめられました。高時これを聞いて大に驚き、諸將を集めて謀を問ひましたが、誰も何とも云ふものがありません。ところが長崎高資が進み出て、「主上・親王は遠國へお流し申し、公卿で謀に與つたものは斬つてしまふが宜しいでせう」と云ひました。この時二階堂貞藤が「これ迄北條氏は世々王室を尊び人民を恵み、かくて百六十年の久しい間、政權を握つて武威を海内に輝かしてゐるのです。今主上を遠國にうつし奉つたり、朝臣たちを罪するといふこと、決して臣下としての道ではありません。つゝしんで勅命に従ひ、少しのあやまちもないならば、主上も思ひなほさせ給ふでせう。國家泰平・武運長久の道はこれより外ありますまい」と諫めました。すると高資は目をいからして貞藤を睨みつけ、「馬鹿ツ、そんな屁理窟が今日通用すると思ふか、承久の故事を知らないのか」ときめつけました。當時幕府に於ける高資の権力はすばらしいもので、政治のことは凡て自由にさきり廻してゐたのですから、

この時の相談も結局高資の云ふ様になつてしまひました。

そこで高時の命令により、貞藤等三千騎を率ゐて京都に入り、六波羅に於て相談してゐますと、護良親王は早くもこれを探り知られて、夜潜かに天皇にそのことを奏せられました。依て天皇は婦人の乗る車に乗られて、劍璽を奉じて宮を出でられました。門番が誰かと云つて咎めましたので、宮中の女官がお里へ行かれるのだと云つて、そのまゝ奈良に行幸せられました。

併しそれと同時に、一方には花山院師賢に天皇の御衣を着せ、御輿に乗せて比叡山にかつぎ込み、天皇が延暦寺へ行幸せられたやうに見せかけました。六波羅探題の北條伸時等が、人を遣はして宮中を探した時には、已に天皇の御姿は全く見當りませんでした。そこで已むなく上皇や皇太子を六波羅にお迎へし、佐々木時信等に命じて三方から兵を別つて比叡山を攻めさせましたけれども、僧兵の勢が中々猛烈で、容易に勝つことが出来ませんでした。

頼みに思ふたゞ一人

忠烈無二の正成の誓ひ

比叡山では兼て護良親王が座主としておいでになることであり、今又天皇がお出になつたといふので、僧徒ども大に喜んでお迎へし、西塔を御座所と定めて嚴重に護りしました。すると間もなく佐々木時信等が攻めて來ましたので、僧兵は進んで幸崎に於てこれと戦ひ、大に賊兵を破つてこれを追ひ歸しました。そのうちに後白河法皇の時もさうであつたからといふので、天皇を東塔の方へお移し申し上げようといふことになり、お輿にお乗せして昇いで行きましたが、その時風が吹いて輿の簾が翻りましたので、お乗りになつてゐるのは後醍醐天皇ではなくて、大納言の花山院師賢であることがわかりました。それですつかり僧徒も力を落し、みんな散りくになつてしまひました。

そこで已むなく護良親王は奈良に赴かれ、師賢も夜にまぎれて山を下り、遂に笠

置山の方へ参りました。

後醍醐天皇は京都をお出ましになつてから、先づ奈良の東大寺に赴かれましたが僧徒の中に異論を唱へるものがあつて一致しませんので、去つて笠置山に幸せられました。笠置山は木津川の南岸にそり立つ山で、四方に峻しい谷をめぐらした要害の地であります。その山上に笠置寺がありますので、そこを行在所とお定めになつて、萬里小路藤房等がお側に侍り、使を四方に出して兵を募られました。

すると近畿の各地方から、ぞろ／＼と兵隊が集つて來ました。殊に比叡山を攻めた幕府の軍が敗れて歸つたといふ話が廣がりますと、幕府を馬鹿にする氣持ちが人々の心の底に持ち上つて來ましたので、笠置へ集るものは日に／＼多くなつて來ました。

この時河内國から馳せ参じたのが楠木正成であります。正成はこの前に日野俊基によつて見出されて、必ず天皇の御ために盡さうと決心してゐたものですから、この度笠置に行幸あらせられたと聞いて、取るものも取りあへず行宮に参りました。

もとより身分の低いものではありませんけれど、智勇兼備はつた有爲の武士でありました。

正成が参つたといふので、藤房は天皇の御思召によつて膝つき合せて相談しました。「御身のことを兼ねてから主上には殊の外たのみに思召されてある。この度急いで参られたこと、叡感淺からざるところである。さて幕府を打ち倒して政權を朝廷に收めるといふ大事業、抑も如何にしたら、勝を一時に決して四海を太平にするこゝとが出来たらうか、腹藏なく意見を申されよ」と藤房が云ひますと、正成は恐れ入つて「正成如きものをかくまで重く御覽下さいませこと、まことに身に餘る光榮と、たゞ／＼感泣の外ございせん。抑も幕府近日の大逆は天のゆるさぬ所でありませ。已に天下の人望を失つて次第に衰へ亂れる形勢にありますから、これに乗じて天誅を加へ給ふことは誠に當然のことでありませ。併しながら事は武略と智謀との二つによつてのみ成功するものです。若し力ばかりで戦ふとしましたならば、六十餘州の兵を集めて武藏・相模の兩國に對しても、或は勝つことがむづかしいかも

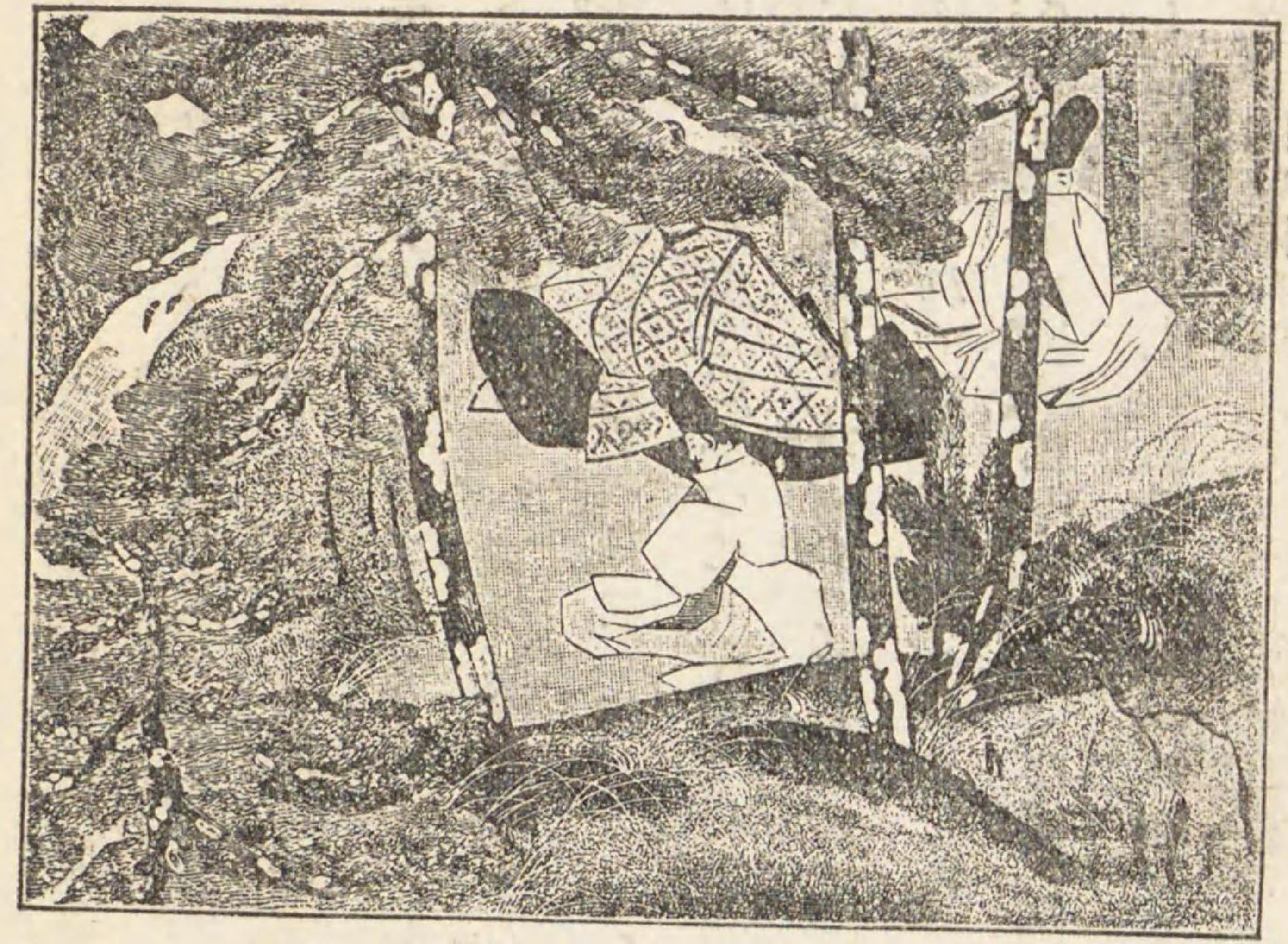
知れませんが、謀を以て争ふことになりますと、幕府の軍勢如何に多くとも少しも怖れることはありません。たゞ戦の勝ち負けには時の運といふこともあり、ますから一旦の勝負を見て御心配遊ばさぬやうに願ひます。正成一人がまだ生きてゐるとお聞きになりましたら、御運は必ず開けるものと思し召して下さい」と強い決心を顔色にあらはして申しましたので、藤房もほんとは頼もしく思ひ、正成の手を固く握つて「たのむぞ」とたゞ一言、あとはたゞ熱い涙をはら／＼と落すのみでありました。

笠 置 落

露と涙に袖ぬれて

正成は河内に歸り、赤坂に城を築いて、若しも笠置が危いやうならば、こゝに主上をお迎へしようと思へてゐました。笠置では幕府の軍が四方から攻めて來ましたけれど、峻しい山ですから中々登ることが出來ません。強いて進んで行きますと、

頭の上から射かけられますので、谷に落ちて死ぬるものも數知れない有様でした。そのうちに幕府の命令によつて、足利尊氏等が關東の兵を引きつれて上つて來ました。併しいくら大軍で攻めるにしても、足場がわるいのですから一度に攻めかゝるわけには行きません。官軍は自然の地形を利用して、所々に壁を設け柵を立て、弓矢を充分に貯へて守つてゐますので、容易に攻め破られる心配はありません。そこで賊の方にも考へました。とても力づくでは城は落ちないからと、そつと城の後の方に廻つて火をつけました。ところが折から風がはげしく吹きましたので、火は見る間に燃え廣がつて、やがて行宮の笠置寺にも燃え移りました。その勢に乗じて賊ははげしく攻め立てましたので、官軍は最後の一人となるまで奮戦し、天皇は暗にまぎれて落ち行かせられました。公卿の方々も皆跣足のまゝで、はげしい雨風の中を天皇の前後を、お護りしてゐましたが、なにしろ道もない山の中のことではあり、まつ暗がりの方角も何もわからず、敵の鬨の聲がこゝかして聞えるので、次第に別れ別れになつて二三百米



笠置落

後醍醐天皇笠置の山をいでまして、夜盡三日食もなく、歩みつかれて松蔭に休ませ給へば落つる露に、御袖もぬれる御いたはしさ、涙なくては御想像も申し上げられません。

も行つた頃には、天皇の御手をひかせられた宗良親王も御行方がわからなくなつて、お側におつきする人はたゞ萬里小路藤房とその弟の季房との二人きりとなりました。

どうかして夜の明けないうちに、賊の圍みをぬけ出たなら、馬にでもお乗せ申して赤坂の城へと考へてゐたのですが、もとより慣れさせられぬ御歩行に御足

を痛め給ひ、一足には休み、二足には立ち止りつゝ、やがて夜が明けますと、若しや敵に見つけられてはと、草木の繁つた藪の中に身を隠させられ、暗くなるのを待つては又も道なき山を迷はせられ、三日の後やつとのことで有王山（今の奈良縣綴喜郡多賀村と井手村との間）の麓におつきになつた時は、主従三人は飢と疲れで身體は綿のやうになつて、岩かげにバツタリ倒れて、木の根を枕にたゞウトウトと夢心地に打ち伏せられました。

天皇はふとお目をお開きになりますと、折からさつと吹いて來た風に、松の枝からハラ／＼と露が落ちて、御袖の上にかゝりました。これを御覽ぜられて、

さして行く笠置の山をいでしより
天が下にはかくれがもなし

と御口ずさみになりました。これを承つた藤房は泪をおさへて、
如何にせん頼むかけとて立ち寄れば
なほ袖ぬらす松の下露

と御返歌を申し上げ、あまりの勿體なさにたゞ泣くより外はありませんでした。

般若寺の異變

二度に捜した櫃の中

賊軍は遂に笠置を占領しましたが、天皇のお姿が見あたりませんので、部下に命じて附近の山中を捜させました。ところが深須入道と松井藏人とはこのあたりの住人で、地形をよく知つてゐましたので、山々峯々残る隈なく捜す間に、たうとうこの有王山の麓に來ました。先に立つた深須入道、ふと岩かげに人影を認めて、ツカ／＼とそこに寄つて來ました。

その時藤房は屹と起き直つて深須を睨みつけ、「お前たちは賊の仲間であらう。幕府のあることを知つて朝廷の御恩は知らないのか、天皇をお守りして忠義を盡すのは今だぞ」と申しました。この一言に深須も心をとりにほして、「これは天皇様をお隠まい申し上げて、義兵を擧げようか」と考へて見ましたが、それにしても松井が

どう思つてゐることか、この際彼が居なくて自分一人だつたら、と思ひながら後ろを見ますと、もう松井がそこへやつて來て、早く／＼とせき立てますので、已むなく二人で粗末な輿にお乗せ申して、奈良の方へお迎へして行きました。

大塔宮護良親王は、笠置の様子を聞かんものと、暫く奈良の般若寺に忍んで居られました。笠置も已に陥つて、天皇も囚はれさせ給ふたといふ噂が聞えましたので、虎の尾を踏むやうな恐ろしい御身の上、道行く人の姿にも、夜半に聞える犬の遠吠にも心をあきつつ、天地廣しと雖も御身をおかくしになる場所がなく、日月は明かなれど、永久の闇に迷へる心地して、色々に思案しておいでになりましたが、どうして聞いたか法眼好專といふものが五百余騎を以て、夜の明け方に般若寺へ押し寄せました。

折から親王はたゞ一人、お付きの人もなくて一間においでになりましたので、一防ぎ戦ふ間に落ちさせられるといふわけにも行かず、兎角する間に兵は已に寺の内

肌をおぬぎになりましたが、併し自害は何時でも出来る。若しも隠れることが出来るものなら、と思召して、佛殿の方を御覽になりますと、大般若經の櫃が三つあつ



親王 良護

これは鎌倉宮にある親王の御木像であります。馬に召して戦場に赴かせられる勇ましいお姿を刻んだものであります。

て二つはまだ蓋をしたまゝ、一つはお經を半分ばかり出して蓋もしないでありました。そこで親王はこの蓋を開けた櫃の中にお入りになつて、御身を縮めてその上に

お經を廣げて引き被つて、若しも見つけられたらすぐ自害しようと、氷の様な刀を抜いて腹に指しあてたまゝ、おつと息を殺して佛を念じて居られました。

そこへ賊兵亂れ込んで、佛殿の下から天井の裏から、残るくまなく捜しましたが、もとより見つかりませんので、尋ねあぐんだ擧句に「あの大般若の櫃が怪しいぞ、開けて見よ」と云つて蓋をした櫃二つを開けて、中のお經をすつかり出してひつくり返して底を叩いて見ましたが居られません。「蓋の開いた櫃は見るまでもない」と云つて、皆とや／＼と外に出してしまひました。

親王は不思議の命を助かつて、夢を見るやうな心地して尙櫃の中においでになりましたが、若し又歸つて来て捜すかも知れないと思召し、今度は前に兵の捜してひつくり返した櫃の中に這ひ込んで、暫く待つておいでになりました。すると果して兵どもが取つてかへし、「蓋を開けた櫃をたつた一つ見なかつたのが心残りだ」と云つて、中のお經をかき廻して「や、居られたく、大塔宮ではなくて、大唐の玄奘三藏が居られたぞ」と云つて、みんなどつと打ち笑ひつゝ、門外へ出ました。大唐

の玄奘三藏といふのは大般若經などを書いた支那の坊さんのことです。かくて親王は危い命をお助かりになつて、やがて吉野の方へ逃げておいでになりました。

忠孝兩全の勇者

十三歳で父の讐

後醍醐天皇は奈良から宇治に向はせられ、やがて六波羅にお入りになりました。藤房・季房は勿論、その他多くの公卿も捕へられ、尊良親王も亦捕へられて京都に入らせられました。

幕府では承久の昔に習つて、後醍醐天皇を隠岐に、尊良親王を土佐に、宗良親王を讃岐にお遷しし、花山院師賢を下總に、萬里小路藤房を常陸に、弟季房を下野に、その他事件に關係のあつた公卿や僧侶を悉く遠國に流し、又前に流した日野資朝を佐渡で殺し、日野俊基を鎌倉で殺しました。

資朝の子に阿新丸といふのがありました。年が十三で、母と一しよに仁和寺の傍

にかくれてゐましたが、父が殺されるだらうといふ噂を聞いて、どうか一度會つて別れたいと思つて、下男を従へて京都を出ました。もとより交通不便の昔のことですから、毎日徒歩で行き、十数日の後越後に出て、それから船に乗つて漸く佐渡へ渡りました。

佐渡では守護の本間宗忠といふものが資朝を預つてゐました。そこで本間の家に行つて、父に會はせて呉れよと頼んだのですが、宗忠はそれを許して呉れませんでした。そして数日の後資朝を殺し、その屍を焼いて骨を阿新丸に與へましたので、阿新丸は「生きた父上に會ひたければこそ遙々都をあとに來たものを、折角傍まで來ながら會はせて呉れないで、こんな白骨を見せられるとは」と、終日泣いて悲しみました。

併し今更どうするわけにも行きませんので、せめてこの讐を討つてやらうと心を決し、骨は下男に持つて歸らせ、自分は病氣で歸られぬと云つて四五日滞在してゐました。ところが或夜、大變な雨風になりましたので、これ幸ひとそつと本間の邸

に忍び込み、そこを捜して見ました。本間の姿が見えませんが、宗忠の子の三郎といふものが行燈をともして熟睡してゐるのを見つけたので、阿新丸は「父を實際手にかけて殺した奴はこの三郎だといふことだから、彼を殺してやればそれでよい」と考へ、枕元にある刀を奪つて刺し殺さうと思つたのですが、若しも目を覺されたら大變だと、暫くおつと思案してゐました。

ところが蛾が澤山障子の外へ集りましたから、これは面白いと思つて、そつと指を舐めて障子に穴をあけますと、穴から蛾が入つて行燈の燈に飛んで行つて、燈は忽ち消えました。そこで阿新丸は障子をそつと明けましたが、もとより嵐の音にまぎれて三郎は目を覺しません。そつと枕元の刀をとつて、三郎の胸のあたりにあてがつて足で枕を蹴りますと、三郎は驚いてはね起きようとしたが、その時はもう刀が腹を刺して背中に通つて、蒲團をつらぬいて畳に及んでゐました。

阿新丸は力一ぱい「父の讐、思ひ知れ」と、刀をぐりぐり廻し、三郎が弱つたところを、更に咽喉に突き刺して息の根をとめてしまつて、急いで邸を逃げ出

しました。併し邸のぐるりには濠をめぐらしてゐますので、これを越すことが出来ません。どうしようかと思案してゐますと、濠のほとりに竹藪があります。そこで大きな竹に攀ぢ登つて、竹が弓のやうに曲つたところで、濠の向ふへ飛ぶことが出来ました。

それから走つて海岸まで出ますと、もう夜もほのくくと明け離れ、新潟行の船が今出ようといふところでした。大急ぎで船頭に頼んでそれに乗せて貰つて、船が海岸を離れた時あとから、追手が來ましたが、阿新丸は船頭に簡單にわけを話しましたので船頭も大そう感心して、岸からどんなに呼んでも、知らぬ顔をして出てしまひました。折から風がまだ相當にひどく吹いてゐましたので、小さい舟で追つかけるわけにも行きません。ほんとに天の助けと人の同情とで、阿新丸は首尾よく京都へ歸つて來ました。

この阿新丸は後に名を邦光と云ひ、後村上天皇に仕へて中納言となり、足利義詮を討つたりして大に忠義をつくしました。忠孝兩全の勇者として、後の世までも有

名であります。

櫻に題する詩

夜行宮に忍びこんで

後醍醐天皇は元弘二年三月七日に京都をお出ましになつて、隠岐の國へと幸せられました。一條行房・六條忠顯等がお伴を申し上げ、幕府の將千葉貞胤・佐々木高氏等が兵を率ゐて前後を護衛いたしました。承久の昔に後鳥羽上皇の御遷幸の時に

天地

嘉曆三月初三

閑翊而有主者臣有親有子厚禮
義以任人遠發下無上者天不
吝之其深也所適故志士に人未
生無志仁殺有臣仁吾身終不
省誠天猶主恩空德何地故煩經
才疎庸所成謀討時傷花鳥思一
族天合將君委命會命和終再決者
一人不惜生命輕要芥欲謀ア軍
門

高島の

兒島高德の旗
兒島高德の用ひてゐる旗です。
小さい文字は「自ら范蠡となつて君のために盡し、身命を擲つて働かう」といふ意味のことです。

比べますと、凡ては頗る鄭重でありましたけれども、観るものは悉く悲憤して、泣く聲は町に満ちたといふことですか

ら、世間の人たちの北條氏に對する心持が、承久の昔とは余程變つてゐたものと思はれます。

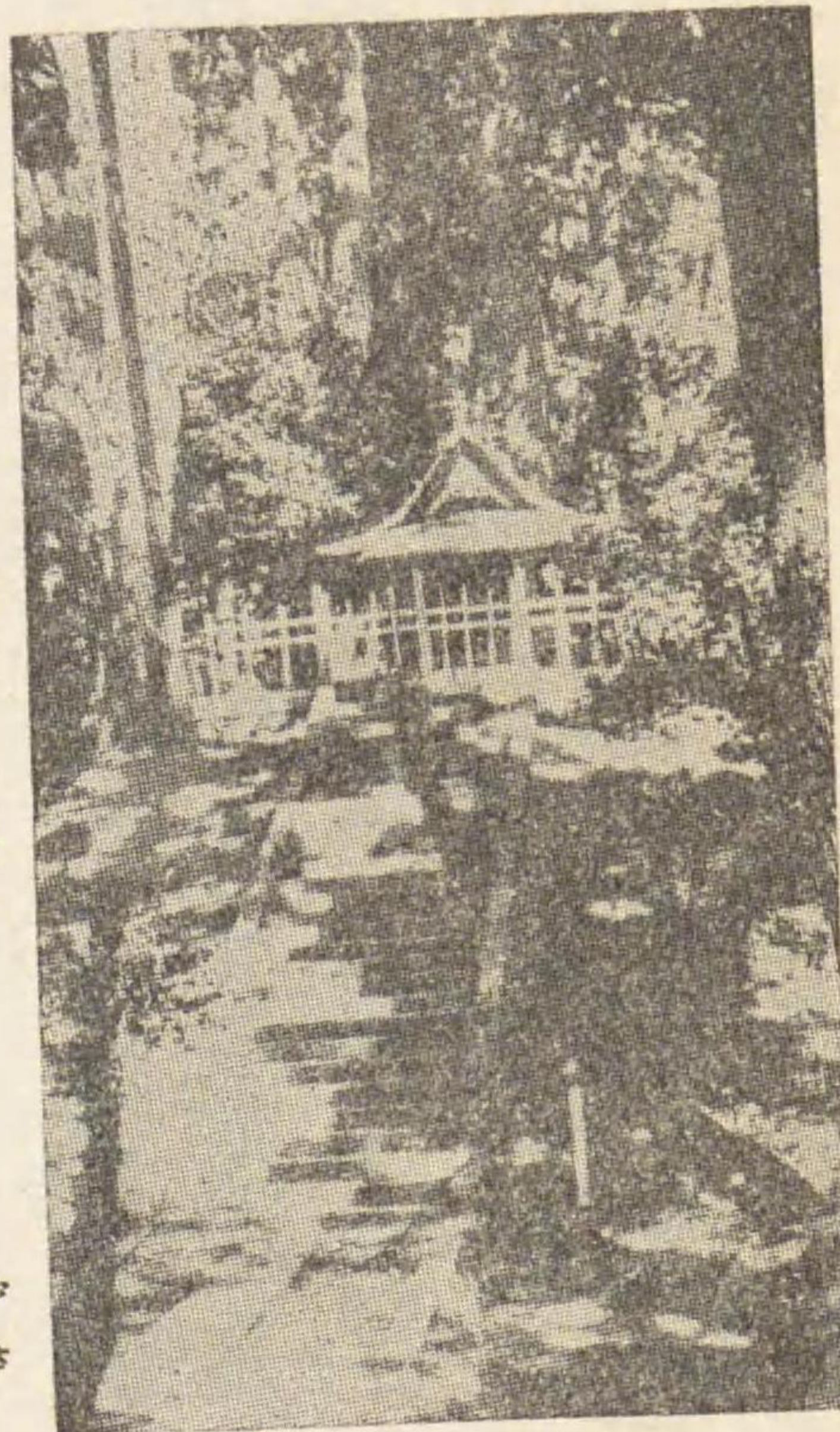
御輦は兵庫の海岸から姫路に出て、あれから北へ山陰道へと向はれ、作州津山の附近で少しく御病氣にかゝらせられましたので、院庄といふ處に二三日おとどまりになりました。その時のこと、警護の武士が見廻つてゐますと、お庭の櫻の木を削つて墨色も鮮かに、

天勾踐を空しうする勿れ

時茫蚤無きにしもあらず

と書いてありました。これは「必ず天皇をおたすけする忠臣が出て参りますから、決して御心配遊ばしませぬ」といふ意味のことなので、兒島高德が夜の間にそつと忍び込んで書いたのだといふことです。兒島高德は備前の人で、兼て勤王の志をもつてゐました。後醍醐天皇が笠置に幸せられたと聞いて、兵を擧げてこれをお助けしようとして、色々準備をしてゐる間に笠置は賊のために落され、天皇も京都に還幸

におつきになつて國分寺を行宮とせられ、
けて護衛しまつりました。



隱岐の守護佐々木清高が、

幕府の命を受

黒木神社は、後醍醐天皇をお祀り申したもので、黒木御所のあつたところ、景色はよいですが、歴史を知るものにとつては涙の種です。

天皇は更に西に進みになつて四月に出雲から船出せられ、隱岐

をお迎へして兵を擧げた時、これに馳せ加はつて忠勤をはげめました。

遊ばされ、楠木正成も赤坂の城が陥つて戦死したといふ噂が聞えましましたので、がつかり力を落してしまひましたが、そのうちに天皇が隱岐に幸せられると聞いて、途中に待ち受けて御輦を奪ひとらうと考へたのですが、一族郎等の数が少いの、警護が極めて嚴重なので、容易にその目的を達することが出来そうにもありませんでした。



兒島高德の墓

兵庫縣坂越の海岸にあつて、兒島高德の墓と傳へられてゐますが、この附近は今公園になつてゐます。

そこでせめて、この志を天聽に達せんと、院庄の行宮に忍び込んで、櫻の木を削つて書いたわけなのです。後に高德は、名和長年が天皇

北條氏の滅亡

三十萬の寄せ手

馬鹿にしてひどい目

楠木正成が赤坂に城を築きますと、東國から攻め上つた兵が凡そ三十萬、笠置も已に陥つたので、この赤坂も一氣に乗つ取らうと、非常な勢ひで押し寄せました。城と云つても急拵へのことですから、ほんの二百米ばかりの廣さに、塀を一重塗り廻しただけで、壕もまだ充分には掘らず、ほんの櫓を二三十立てならべて、四五百人の兵で守つてゐるに過ぎません。寄せ手の兵士どもは「なんだ、可愛想な城だね、こんなもの片手でとつて投げてもいい位なものだ。一つ楠木を生け捕りにして褒美を貰ふかね」などと評判しながら、一日に攻め落すつもりで、そこへ來るとす

ぐに馬を下りて、壕の中に飛び込んで、櫓の下に集つて、我れ先に飛び込まうと奔めきあつてゐます。

ところが櫓の上からは、二百人ばかりの選りすぐつた射撃の名手が、鏃をそろへて指しつめ引きつめ射かけますので、見る間に負傷するものや戦死するものが千人ばかりも出來ました。これを見た大將どもは少し案外に思つて、「これは少々手強いぞ、一日や二日には落ちないかも知れない。暫らく陣屋をかまへて手分けをして攻めかけよう」と云ふので、少し引き下つて馬の鞍を下し、甲冑を脱いで弓の弦を外して、先づ一休みと幕の中で休息してゐますと、兼て山の上にかくれて居た楠木の部下は「もうよからう」と三百餘騎を二手に分け、東西の山の本蔭から菊水の旗を風に吹き靡かせ、三十萬騎のたゞ中へ一度にどつと斬り込みました。

さア驚いたのは東國の兵ども、「これは天から降つたか地から湧いたか」と、あきれ返つてゐる所へ、城の中からは三方の戸を開いて、さつと一度に打つて出ます。うろたへあはてた賊兵は、繋いだまゝの馬に乗つてしきりに尻を叩くもの、弦をは

づした弓にしきりに矢をはめて射ようとするもの、一つの胃を二人三人で引つぱり合つたり、主人が打たれても従者は知らず、親が打たれても子は助けず、たゞもう蜘蛛の子を散らすやうに石川河原へ引き退きました。その道五千米ばかりの間、打ちすてた甲胃で足も踏み入れられぬほど、主人を失つた馬が數知れず迷ひ歩いてゐる有様に、近所の百姓どもは思はぬ拾ひものをして大喜びをいたしました。

思ひもよらぬ計略

賊はさんぐにいちめられる

そこで寄せ手も「これは馬鹿にならない、先づこのあたりの地形から研究してかゝらねば」などと色々評議をしてゐましたが、父を打たれた者共は「ぐづくして居ては益々馬鹿にされる、いくら澤山居たところが三百か五百の敵だ。堀一重が何のその、一氣に攻めつぶしてしまはねば」としきりに憤慨して、又城の周囲へ攻め寄せました。

ところがどうしたわけか、城の中はひっそりして音もしません。又昨日の様に山の上から出て来るかも知れぬといふので、十萬の兵で山の麓をとりまき、二十萬騎で城の周囲を十重二十重にとりまきました。けれども城の中からは矢の一本も飛んで来ません。

賊兵はいよく圖に乗つて、「これは昨日の戦争に怪我人が多く出来て、困つてゐるのかも知れない」などと云つて、壕の中に入つて逆茂木なんかとりのけてしまつて一度に城中へ飛び込むつもりで、みんな堀に手をかけました。ところがこの堀は二重にこしらへてあつて、外側の堀は吊り堀になつてゐましたので、今こそと四方の吊り繩を切りますと、堀はあたりと落ちて千余人が一度に押しつぶされ、頭だけ出して目を白黒にしてゐるもの、足だけ出してバタ／＼やつてゐるもの、「これは」と驚いて引き退く敵は、櫓の上からはげしく射かけられて、又七百人ばかりもやられました。

四五日評議を重ねた賊兵は、こんどは長い柄の熊手をつくつて、これで堀を引き

倒してそれから城内へ打ち入らうといふ計畫、手に手に熊手をもつて塀の下に集りました。ところが城内からは長い柄の杓にわきかへる熱湯を汲んで打かけますので、袖口や首すぢから熱湯が入つて焼けたゞれて、これは叶はぬと熊手をすて、逃げました。死ぬるほどではありませんけれど、顔を焼かれて目の見えぬもの、手がたゞれて弓の引けぬものなど、二三百人は怪我人になつてしまひました。

こんなことをくり返して居たのでは、何十萬居ても勝ち目はありません。そこで今度は遠巻きに城をとり巻き戦争はしないで、兵糧攻めにしようといふことになりました。勿論城は急に構へたことですから、ほんの二十日ばかりの兵糧しか用意してゐません。あと四五日でもう盡さるといふときに、正成は部下を集めて「敵は兵糧攻にするつもりらしいから、このまゝ待つてゐては仕方がない。打つて出て命をおとすのが惜しいのではないが、天皇の在はす間は俺は決して死なれない。もう少し計略で敵を悩ましてやらう。今この城を焼いて正成が戦死したと思へば、賊は東國さして歸るだらう。そこで又旗を上げ、寄せて來れば山に入り、引けば又打つて

出る。これこそ身を全うして敵を亡ぼす手段といふものだ。皆はどう思ふ」と云ひますと、みんな大賛成いたしました。

赤坂落城

うまくだました泣き男

城内では正成の指圖によつて、大きな穴を掘つて敵や味方の死骸數十をほり込みその上に炭や薪を積み重ね、雨風の夜を待つてゐました。ところが天の助けか、或日猛烈な風が吹き出して、夜に入つて益々甚しく、雨は盆を覆すほどの大雨となりました。「これこそ望む所」と、正成は泣くことの上手な男を一人残して、「二三十分も経つたら城に火をかけよ」と云ひ残して、城兵は悉く甲胃をぬぎすて、目立たぬやうに三人五人づつ、敵の囲みを通りぬけて落ち行きました。一寸先も見えぬ眞暗がりではありませんが、このあたりの地形はよく知つてゐますから、見張り所の前は通らぬやうに、敵の寝てゐる枕元を右に左に避けつゝ、閑々と通つて行き

ました。

正成はふと見つけられて「何者だ」と咎められましたので「大將の御内のものですが、馬の逃げたのを追つかけてゐる間に、とんと道を迷つてしまひまして」さうか、その先の方には小溝があるから、落ちないやうに用心しろよ」ありがたうございます」と、まんまと敵をたぶらかして、さて後の方を見返りますと、最早城には火がかかりました。

「それ火事だ。いよく落城にきまつた。城兵一人も残さずにみんな打ちとつてしまへ」と、賊兵はうろたへながらも攻めかけました。併し城内からは矢の一本も飛んで来ません。門を打ち破つて中に入りますと、只一人オイ／＼と泣いてゐる男が居ます。捕へて様子を聞きますと、「正成公もいよく討死せられ、一族、家來の人々悉くこの火の中に飛び込んでしまはれました。私はたゞ一人残つて、お骨を拾ふやうに云ひつけられましたので」と云ひますので、「さては正成の戦死も確實だ」といふことになつて、湯淺定佛を止めて城を守らせ、他の大將は皆兵を率ゐて引き

上げました。これが元弘元年十月三十一日のことでありました。

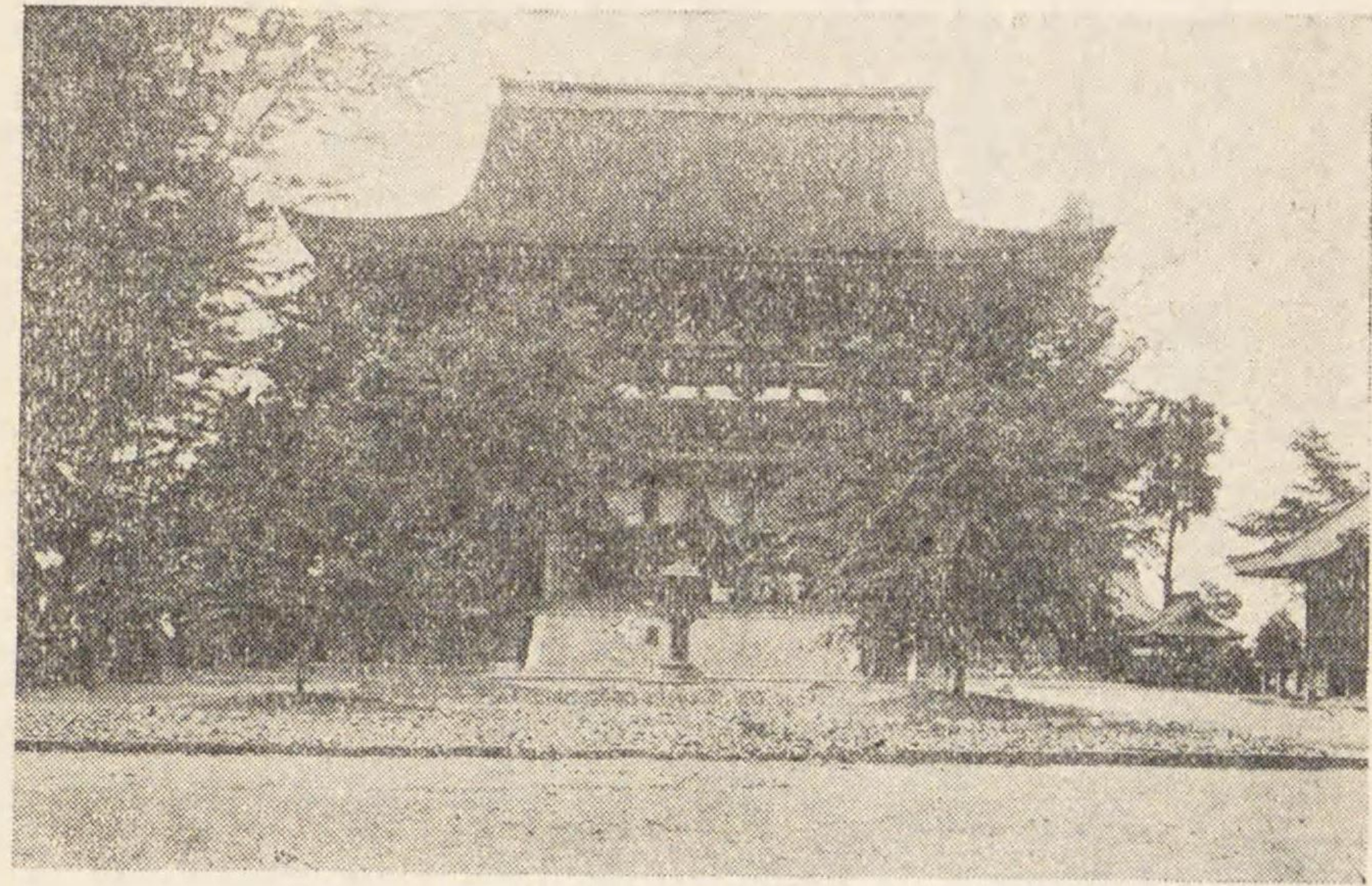
武臣のかどみ

櫻の花にも劣らぬ最後

護良親王は吉野から十津川、熊野、高野のあたりを往き來し給ひ、多くの同志を募つて遂に兵を起し、吉野山に據り、寺を城として令旨を諸國に下されました。そこであらにもこちらにも勤王の旗を擧げるもの引きも切らず、反北條氏の機運は正に全國に漲るといふ有様でした。

ところが幕府の大將二階堂貞藤が大軍を引きつれて上つて來て、はげしく吉野の城を攻めました。親王は御親ら諸兵を指揮して奮戦せられましたが、多勢に無勢でとても防ぎ切れません。藏王堂を本陣としてゐられましたが、思ひもよらぬ勝手明神の方からも敵兵が寄せて來ましたので、今は早これ迄と、堂の前庭に幕を張り廻した中に、お傍を離れぬ股肱の臣二十餘名を集めて最後の御酒宴をお開きになりま

の木戸も遂に攻め破られまして、たゞ今二の木戸を守つて居りますが、御身の上か
 心にかゝりましたので歸つて參りました。敵は新手をさしかへてはげしく攻め立て
 ますので、味方も早すつかり疲れしました。到底この城を保つことは覺束ないと存じ
 ますから、今のうちに一方を破つて一先づお落ち遊ばしましたがよいと存じます。
 併しあとに残つて戦ふものが無くては、敵は何處までもお跡を追ひ奉るでせうか
 ら、甚だ恐れ多いことですから、暫く錦の御鎧直垂を拜借いたし、御命に代ら
 せて頂きたくございます」と、深い決心を面にあらはしてお願ひ申し上げました。
 親王は「そんなことが出来るものか、死なば諸共だ」と仰せられましたが、義光
 は強ひてお願ひして止みません。そこで親王も「それでは」と御物具、鎧直垂まで
 脱ぎかへさせられて「俺が若し生きて居たらお前の後生を吊つてやらう。若しも敵
 の手にかゝつたら、冥途迄、一所に伴をせよ」と仰せられ、御涙を流させ給ひなが
 ら南の方へと落ち行かせられました。
 義光は二の木戸に歸つて、暫くの間敵を防いでゐましたが、最早親王も落ち行かせ



藏王堂前

藏王堂の前、櫻の木の植つてゐる處が、護良親王最後の酒宴を
 開かせられたところです。忠烈の臣義光が、御鎧直垂を頂いた
 時の様子が目に見えるやうです。

つて、まるで枯野に残るすゝきのやうです。

親王の御前に両手をついて「大手の一

した。

親王の御鎧に立つた矢が七筋
 御頬と二の腕との二ヶ所に御負
 傷遊ばして、たら〜と流れる
 血を拭ひもあへず、敷皮の上に
 立ちながら盃を上げさせられま
 すと、木寺相模は太刀の先に敵
 の首を刺し貫いて御前にかしこ
 まり、勇ましい詩を吟じて舞を
 まひはじめました。そこへアタ
 フタと走つて來たのが村上彦四
 郎義光、鎧には十六本の矢が立

られたであらうと思ふ頃、高檣に上つて、板を切り落して身をあらはし、大音聲に名乗りを上げて、「天照大神の御子孫、九十五代の帝後醍醐天皇第二の皇子、一品兵部卿護良親王、逆臣のために亡ぼされて恨みを泉下に報ぜんために、今自害する有様を見て置いて、やがて汝等の悪運がつきて、腹を切る時の手本にせよ」と、鎧兜を脱いで投げ捨て、錦の直垂の肌を脱いで、腹一文字にかき切つて、腸つかんで敵に投げつけ、太刀を口にくわへて打臥しになりました。誠に櫻の花にも劣らぬ潔よい武士の最後ではありませんか。

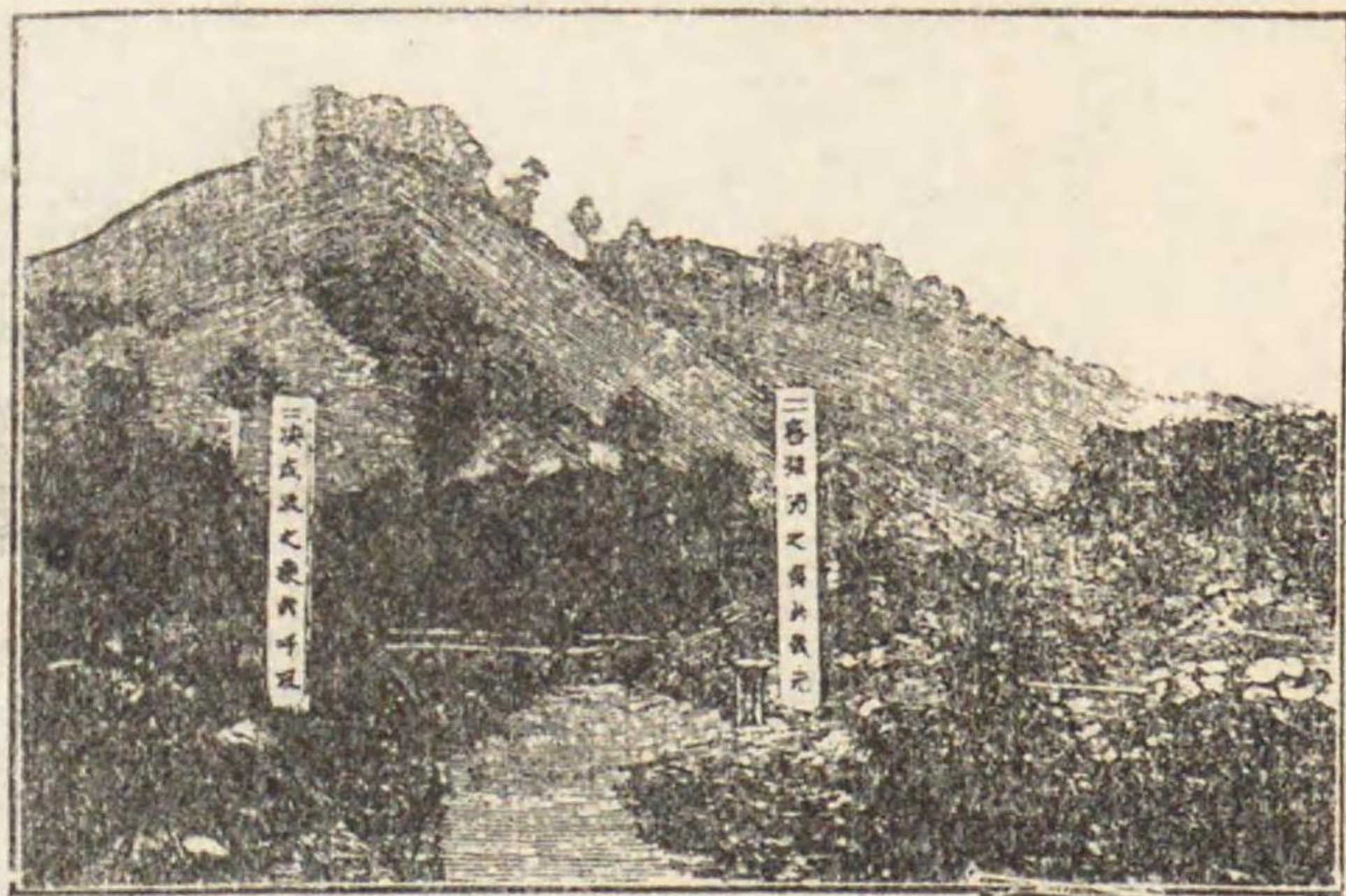
賊兵どもこれを見て、「それ御首を」とひしめき合ふ間に、親王は安らかにずつと山奥の天の河といふ處に落ち行かれました。

孤城を攻める大軍

まるで相撲の見物席

楠木正成は元弘二年八月に金剛山の千早に城を築き、先づ五百騎を以て赤坂の城

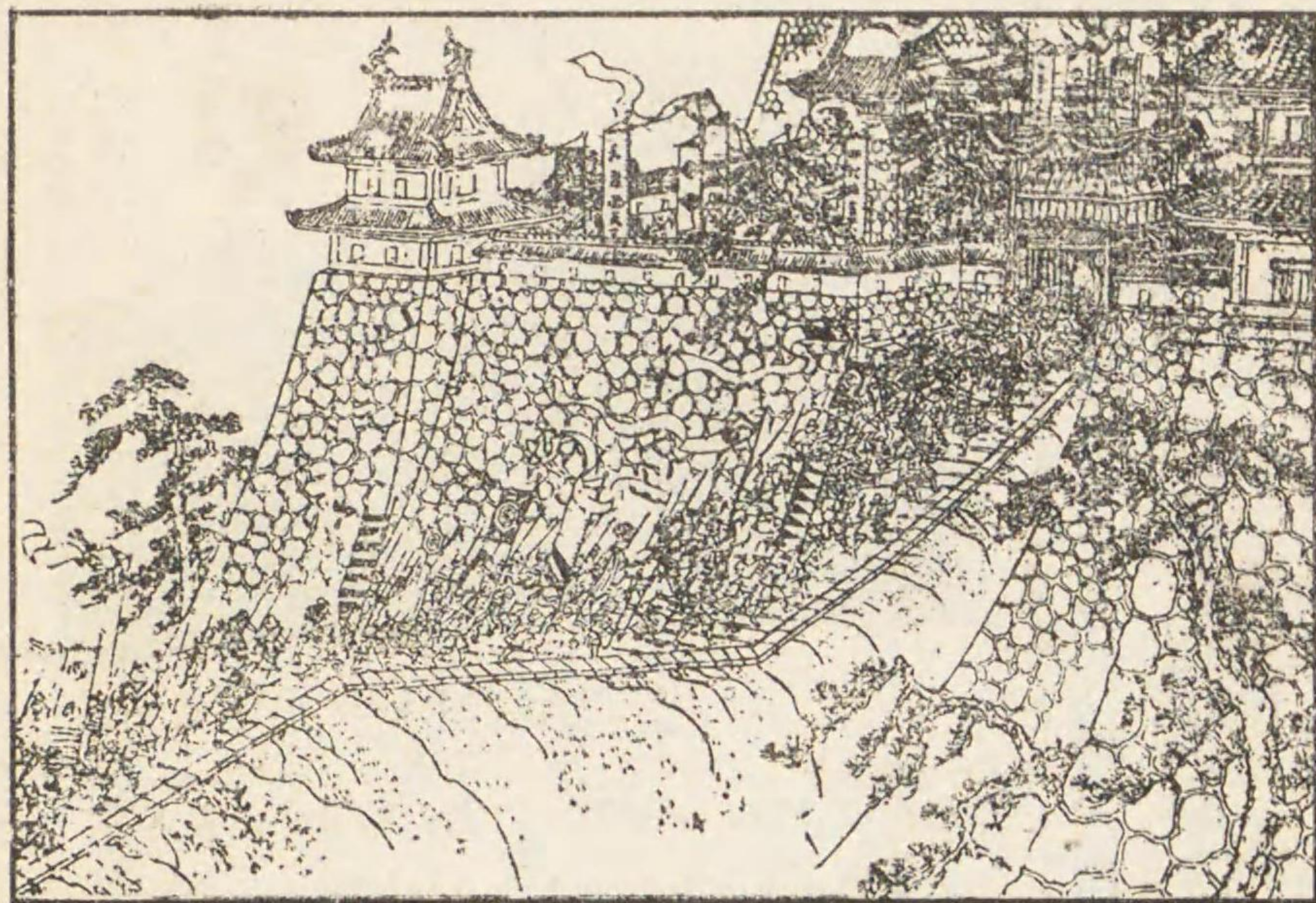
を攻めました。城の大將湯淺定佛は紀州から兵糧をとり寄せて居ましたが、正成は



千早城址
金剛山の麓、千早城二の丸の址です。こゝで八十萬の大軍を悩ましたのみでなく、全国各地に勤王軍の起る根源となつた處です。あゝ千古朽ちない正成の偉業。

これを途中で奪ひとり、俵の中に甲冑を入れて三百人の兵にこれを荷はせ、二百人で追つかけるやうにして城の方に行きました。城兵はこれを見てわが糧食を敵が奪はうとして居るのだと思つて、急いで門を開けて入らせました。ところが三百人は俵の中から甲を取り出して呐喊し、正成も亦門を乗り越えて進みましたの

で、定佛はどうすることも出来ず、直ちに降参してしまひました。そのうちに幕府の大軍は次第に金剛山下に集つて來ました。その數八十萬にも及んだのであたり數十軒の間は悉く兵を以て埋まり、まるで大相撲の見物席のやう



千早城の合戦

切り立てたやうな高い石崖、たゞ一すじの道をたよりに、木戸口に押しよせた敵が、片つばしから射斃されて行く有様です。

だつたといふことです。旗さしものは秋の野の尾花よりも繁く、劍の日に映じ輝くさまは、曉の枯草の霜のやうでした。これに對する城兵は僅かに千人たらずなのですが、正成が例の如く奇計妙案を出して敵を惱まし、容易に破られませんでした。

千早の城は三方が峻しい崖に臨み、一方は金剛山へのそり立つ峯嶺き、廻りは四料にも足らぬ小城ですから、何萬といふ兵が一度にかゝることは出来ま

せん。初めの間は寄せ手も侮つて、あまり用意もせず、城の木戸口に押し寄せました。城の中では少しもさはがず、充分に敵を引き寄せ置いて、高檣の上から大石を投げかけ、賊が楯の板を碎かれ、兜の鉢を破られてひるむところを、頭の上から射かけますので、折り重なつて負傷するものや死ぬるものが一日に五六千人にも及び、軍奉行が死傷者の名前を書き留めるのに、十二人の書記をつかつて夜晝三日間、筆を置くひまもなく續けざまに書きたいとふことです。

大將もこの有様を見て「今後は命令なくして押し寄せてはならぬ。犯したら所罰するぞ」といふ命令を出しました。そこで全軍暫く戦をやめて各自の陣營を固めましたが、その時一人の大將は大佛高直に向つて「これほどの山の上に水があるとは思へない。屹度夜の間に城の後ろの谷川へ水を汲みに下りるに相違ない。あそこを守つて水を汲ませぬやうにしたら、城は屹度陥るに違ひない」と云ひましたので、「それはよからう」といふことになつて、名越越前守を大將として、三千餘騎を以てこの小川の邊に陣を取らせ、城から下りて來そらな麓のそこへには逆茂木をつ